清心

NO. 15

清心十五号目次

巻頭言

毛利晴一

「年々歳々花相似たり年々歳々人、同じからず」この言葉は世の中の移り変りを言ったもので人は死んでいくと言う事も含まれていると思います。私にこの言葉を当てはめてみますとこれは同好者の移り気を現はしているもので全く淋しい限りであります。ある人はあれ程に私の考え方に共鳴し会員になった喜びを伝えてくれていたのに、その人が半年も経つかたゝないのに平気な顔でサヨナラも言わずに転居先不明で去っていく、それはまだいゝ方で一年も一年半も会誌を送らせておいて挙句のはて本人不在で会費の催促状が返って来る。

こんな事が大変に多いのです。私は今日まで一貫して心と心の結びつきを大切にして参りました。又それが社会生活の上に最も大切な事であると考え今でも私はそう思っております。勿論人生には心ならずも別れなければならない事もある事は判っております。ですから会員として在籍された期間の極く短い人でも頭の中にはっきりと残っている人もあります。その人達は休会又は脱会する際は良くその事情を話して滞納会費を清算してきれいに去っていった人です。中には古い会員の方で周囲の圧力に負けて心ならずも結婚を余儀なくされた様な方もありました。私はそんな場合に出来る限り励ましてそしてさゝやかな贈り物をした事もありました。そして最悪の場合は何時でも遠慮なく相談に来る様にと話した事もあります。人を一倍信ずる私にはそれを裏切られた時は尚一層に苦しむものです。

この人は立派な人だと信じこんでいた人が前述の様な去り方をされた時のやるせない気持、こんな事を繰り返し／＼乍ら今日迄続けて来た訳であります。又こんな事が今後もあるだろうと思います。でも私はそれでも良いとしてもその本人が果してそんな生き方で社会が受け入れてくれるでしょうか？私はそれが言いたいのです、そんな薄情なそんなやり放しの世渡りが果して社会は許してくれるでしょうか？私は世の中はそんな甘いものではないと思います。もしそれでいて一時的には別に困難が生じないとしてもその本人の行動の蓄積が本人の性格とか信用とかに評価されているのだと言う事を忘れない様にして欲しいと思います。私は時々自分のやっているこの仕事にほんとうに意味があるのかどうかぎもんを感ずる時すらあります。どうか私を悲しませないで下さい。親は何才になっても子供の成長を願っているものですから。

恋する者達よ

千葉県　長い髪の十代

肋（あばら）の透いて見える細い胴体を
僕は
食い千切り骨をしゃぶるかのように
舌と歯とを這（は）わせる。
男の顔があえぎ
唇が上を向いた透（す）きに
僕は
その喉目掛けて右手を宛外い
男を倒し
その上に乗る。
唇が乳房を吸い
右手が肋骨を数える。
左手が首を摩り
シーツと密着した背中へ
蛇のように滑り込む。

動きの止まった深夜の空間。
家々の部屋から
無言の男の夢が溢（あふ）れ
路上に落ち
いくつかの溢れた者同士が交じわり
何処へともなく流れる。
街路は夜の河。
男の切ないすすりが集まって
大きな流れとなり
何処かへ流れて行く。
ヘドロの湾（うみ）を渡って
南の孤島へ行くのか。
ビルの立ち並ぶオフィス街を通って
酒場のカウンタァへ行くのか。
それは分らない。
夜空の輝きをキラキラと反射させ
むせ返る匂いをばらまき
静かに静かに
河は流れる。

二つの影の後を
黒い運命が過（よ）ぎり
冷たい思いを感じた時に

僕は
ガラスの空間にある無機物が
バラバラと乾いて散るのを
知った。
愛は幻想。
夢は肉体。
雨のしずくのような言葉なき言葉を語り
二つの影は離れる。
二つをつないでいた物は今。
二つをつないで行く物は嘘。
足踏みのパターンが
ヒタヒタと聞こえる。

男の胴体の厚みを
両腕でしっかと計る。
野獣のように息を荒げている。
火のといきが耳に掛かり
官能の心にうずきが起きる。
僕は
両腕を男の双丘へと動めかせ
陽の割れ目から二股をまさぐる。
男の
泣き声にも似た声が聞こえ

僕は
きしむ肉体の重みを
ベッドに埋める。
呻（うめ）き。
長い髪が僕のほおで踊る。

河風に吹かれて
僕は身震いする。
ーホモのいない街。
沢山の石の中から
盛り上がった小石の山を
ける。
都会の何処かで
誰かが男を求めているだろうに
それへ報いられないなんて……。
ここにホモがいるんだよ。
男の来るのを待っているんだよ。
体が冷たい。
ブラブラし過ぎたせいだ。
馬鹿な奴！
遠く見渡せるこの川の河原で
僕は
散歩の振りをしながら

男の誘いを待っている。
美しい立体を通して
ことさら醜く見える僕……。

宛名のない手紙。
白い封筒
「ホモの街へいらっしゃいませんか？」
黒いペン字。
風は冷めたく
優しい日。
「もっと淋しい誰かの所へ行きなさい」
白い手紙はうなずくと
ヒラヒラヒラ。
抜けるような青空へ飛び立った。

僕と貴方が
精神性と言う高度の考えに寄って
肉体を介在とせず結びついている事が
とても素晴しいんです。
あくまで
理性と意志と感情とに寄って
本能を排除している事が

人間として
ホモとして
最高次元に位置しているのです。
だから
僕達は離れないのです。
妙え
別の恋人を拾ったとしても
あくまでそれは遊びで
本来の僕達は遠く離れていても
結ばれているのです。
僕達は
周りのホモ達を
唯なる性の相手としか見ないのです。

男の汗の香りが
爽（さわ）やかな雨上りのように
僕を落つかせる
肉体的焦りの中で
官能的なオアシスを見つけたように
僕は
男の腋毛に唇を埋めている。
固い繊維質を舌で感じる度に
男は

鼻先で軽い溜息をつく。
僕は唇を少しずらし
胸の上に接吻の後を作る。
舌で
歯で
熱い烙印を押す。
　「痛ッ!」
男は
そう言いながらも
僕の燃える接吻を拒もうとしない。

静かな夜闇を駆け抜けて
何処までも何処までも行く。
向こうにあるものが何か分からず
それでも
何かを求めて急ぐ。
心の安らぎ?
肉体の充実?
モヤモヤとしたベールを崩したくて
身を○ませて走る。
疲れているのに
苦しくて仕方ないのに
何故か急がせるものがある。

この世の危機?
自分の滅亡?
知らずに焦るこの気持ちは
果して自分のものなのだろうか。
何かに寄って
あやつられているのではないだろうか。
退屈と言う黒い球の中を
クルクルと訳もなく急いでいるのか。

「ー君は遊び人だからネ?」
「ーそうかな? でも、君が思って
いる程じゃないよ」
「……そうかも知れない」
「ー遊び人はそっちでしょ?」
「さァ、どうかな?」
「僕には関係ないよ」
「そう、そうだったネ?」
「そう。束縛しないもの」
「今、俺誰ともつき合ってないよ。
もう嫌なんだ。……わずらわしいよ」
「……」
「……何もかも嫌なんだァ……」
「ー 同じ……」

「今度ブラリと一人で旅行するんだ。
ー　おもしろいよ」
「連れてって貰おうかな？」
「ーどうしようかなァ？」

ぬめり込む男の舌が
ぎこちなく僕の口の中で踊る。
粘りつくような感触が
僕の性感帯をくすぐり
悶えるような思いにさせる。
重たい深みにはまったように
僕は動けない。
男のヘア・トニックの香りが
体をしびれさせ
息をつく間もない。
唇を離す音がする。
首筋に男の柔らかな唇を感じる。
溢れるような思いが
体の心から起こり
僕は小さく溜息をつくばかり。
男の泉息が
僕の耳に掛かる。
僕は
唯男の胴体にしがみつくばかり。

恋人達は
限りない日々をむさぼり
カスだらけの街にしてしまう。
街の向こうから
獲物が来ると
我先にと食いつこうとする。
もう
恋人達以外の街の住人は
いなくなってしまっている。

$$$$$　$$$$$

僕のアマンへ

大阪・三四五一番

兄さん。

思えば僕がRさんのことを、こう呼んだことは一度もなかったですね。幼い頃から近所に住んでいた仲だとか従兄とかのように、何の不自然さもなくそう呼べることを、どんなにか望みながら、どうしてもうまくいかなかったことが、手紙ならなんとスラスラ成功することでしょうか。

この手紙は、その兄さんを、あたかも玩具かなんぞのように、自分のそばにおいておこうとした愚かな道程を記録しておこうと試みたものです。

僕がはじめて兄さんの部屋で、とりとめもない話をし夜が更けたのを口実に、そこで寝かせてもらった時のことが、新鮮な気持でよみがえってきます。いつもあんな風にして、只、床を二つ並べて兄さんのそばにいることだけでも、僕は十分に満足したろうと思います。いい加減他愛もない話をし煙草を喫い、ラジオを聞き、こんな古い流行歌を知っているかあてっこしたり、ふざけて腕角力でもやるかということになり等々。又、別に何をするでもなく、お互い勝手な空想をし、そう、兄さんは兄さんらしく現実的な空想を、僕は僕で幼い空想をし、その合い間に二言、三言交わし、するうちに快い眠りがやってきて、あとは朝までグッスリ。

兄さんが真近にいたあの三月の間が、来る夜も来る夜もそんな風であったら、どんなに幸福だったかしれません。そして、兄さんと離れてしまった頃の、あんな種類の複雑な苦痛ではなく、もっと真実味のある肉親愛のようなものが今も残っているはずだろうと思う。

しかし、僕たち二人の間が本当にそうだったとしたら逆に別れはもっと足早にやってきただろうと思うのです。何故なら、もともと他人であった者同士が、思想的に共鳴した訳でもなく、もっと簡単に趣味が同じだとか、話のウマが合うとかが無くて、どうして三月も同じ部屋で暮らせたろう。そしてきっと、お互いにその不自然さに気づいて、あわただしく始末したことだろう。

そういう類の明瞭さに欠けていたけれど、僕は兄さんが好きだった。それは純粋に精神的なものだったとは言い張るまい。けれど、兄さんが僕に対して抱いていた印

象そのまゝに、快楽を追い求めていたわけでもない。兄さんの身体は僕よりもっと大人で、いくらかは魅惑的であったけれど、それのみを問題にするなら、世間にはもっと僕を鼓舞させてしかるべき男達が数多くいることだろう。

これは僕だけの勝手な解釈だけれど、僕達二人の唯一の共通点は、人生をまともに考えてしまうという欠点だったろうと思うのです。そしてお互い未来の重さにうんざりしていたことではないでしょうか。

僕はこうした精神面でも、明らかに兄さんより子供で現実をつかんでいませんでした。だからこそ、兄さんのキッパリした行動や、いくぶん捨てばちに見える決断が僕を驚かせました。はては、兄さんのシャベリ方や、寒い冬の朝もパッと飛び起きてネクタイをしめる、そのしぐさや、適量を越えた酒のおかげで、故郷は捨てたんだと自分自身にも言ってきかせているふうなセンチメンタリズムにいたるものまで、僕にはまったく目新しい現実を見る思いでした。

思い出してもみて下さい。直接の行為をする夜が全くなかった週でさえ、かえって僕が生き生きしていると思えるふしがあったことを。そんな時兄さんは、僕を不思議そうに眺みて、「そうしていると人が違って見えるナァ」と言うだけでした。兄さんは僕を魅了してやまない自分の美点をとり違えていました。

のちのちそうした錯誤が、新たな錯誤を生み、僕も兄さんも、結局のところ、精神面など二の次の次にした同性愛者になってしまったのです。

兄さんの吐息が僕の耳もとをくすぐる時は、粗雑な言い方が許されるなら、その瞬間は確実に愛されていることの実感はあったけれど、それ以上に、僕は兄さんに愛される存在よりは、兄さんそのものになりたいと痛切に思っていたのです。

自分の未来に憧れる典型を、この腕の中におさめているという感覚は、ともすれば、こうしておればその模倣の進み具合いも、きっとはかどるに違いないという愚にもつかぬ狂喜をもたらしました。

兄さんは兄さんで、女に不自由している代償に、まぁ男でもかまわないや、という調子で、あるいは装ってこの点は、兄さんが、僕がここに記してきたことを何ひとつ気づかなかったと同様、僕には兄さんのこうした点はよく解っていません ー 、僕を抱きました。そうしたことが度び重なるにつれ、心が通じ合うことなど、さして

重要でないといった調子にかわり、とどのつまりは、まったく無言でさえコトは可能で、危く二人の関係は成立していたようです。
　衝動が二人をおそわない時は、僕はひまつぶしに推理小説を割合熱中して読み、時折横へ眼をやると、兄さんはめんどうくさそうに煙草をふかしながら、何かを考えているようで、あるいは何も考えていないふうでした。そんな時の兄さんは又、格別で、とりたてゝどうということもないその横顔を、じーっと見ながら、やっぱり僕は兄さんを愛しているんだと感じたものです。その愛なるものはどこに起因するのか、自分でもわからなくなっていました。
　独白調になりがちですが許して下さい。
　僕達は、とりわけ僕は、そんなあいまいさの中に落ち込んでゆきながら、やたら心は急ぎました。僕も兄さんも男として生まれた以上、そして、そんなわかりきったことに念を押すかのように兄さんの故郷から送られてくる見合写真の大型の封筒を見るにつけても、僕はとうに別れることを承知でした。
　快楽に要した時間と反比例して、兄さんの内面を理解するのを怠っていた自分にあきれました。そして大急ぎで、兄さんを理解することによって見切りをつけ、束縛をたちきろう、もっと雑に言うなら、兄さんを卒業しよう—何と恥しらずな言い方でしょうか—と、努力しました。その矢先兄さんから、郷里で仕事を探すつもりだ、と聞かされた時は、かえって事がほかの方でうまくいきすぎた感じを受けただけでした。どう急ごうと別れは目の前にあったし、それにもまして、恋をしている僕の眼は、兄さんを冷静に理解する能力など所詮もちあわせていなかったようです。
　あらゆる面で裏切られっぱなしの僕の人生と違って、別れは約束通りきちんとやって来、家具など邪魔なものはすべて売り払い、トランクひとつで身も軽々と—そう見えました—去ってゆく兄さんの後姿を見送った時は、卒業されたのは兄さんではなく、実は僕の方だと悟りました。何故なら、それに続くひと月の間の、どうしようもない空虚な気持が、明白に裏付けしてくれるでしょう。
　その間の僕の苦悩を、いちいちここで披歴することはやめます。
　兄さんが捨て去ったはずの故郷へ帰った理由は多々あったことだろうと察しますし、いくら目をつぶろうと僕

僕達は世間の中に生きてい、別れは当然と言わねばなりますまい。たとえそれが唐突すぎたとしても、つまりは僕の為を思えばこそと、兄さんをたてれば気もおさまることです。別れた当座は、恋愛の基本的な反動として恨みもしましたが、今じゃ自分でも苦笑しながらこの手紙を書いているのですから。

僕もやっと余裕をとり戻しました。

それはとりもなおさず、僕のもっとも軽蔑する、ほどほどにしておくという世俗の習性をしらず身につけたのかもしれません。もっとも僕のほどほどは、ひと月後に兄さんを追って九州へ飛ぶという過程を要しましたが。

その時の気持はおかしなもので、行く前には、これが未練だと感じながら、阿蘇の煙を見はるかす頃には、ただ、僕がこれほど執着した人物をもう一度確認しておこうという割合冷静な目的に変化していました。だから、当の兄さんに逢っても、苦しむこともなく、二人して気楽に水前寺などを見物することも可能だったのです。

それは決して僕の軽薄さではありますまい。そうした不思議な仕業は、短い人生には必要な転換かもしれません。

臆面もなく、長々と書きましたが、最後まで読んでいただけたものと思います。

この手紙を手にする頃は、ひょっとすると結婚を真剣に考えているかもしれませんね。

そうだとすれば、僕のマゴコロなど無用の長物。足もとのクズカゴへ直行してください。

十二月二十三日

K

一時は完全に僕のものだった

R　さ　ん　へ

追伸　笑わないでください。実際、こんな他愛もなもないホモがいるでしょうか？

長編連載小説

心の波止場

東京都　三宅一夫

新年の宴

秋が流れて、冬がやってきた。冬も近づいて十二月の声を聞くと、翌年の、新年はもうすぐ目の前に迫って来るのだった。人は、今年一年の終わりを何となく心に刻み、忙しかった、此の一年を振り返りながら、やがて来るであろう新年を期待するのだ。忙しい一年の終りの、目まぐるしいような、十二月の狂想曲！ー日は暮れ、日は明けて、一日／＼が積み重なって行っていよ／＼新年はついに来た。旧い年は去り、新しい年は光明を宿して一九七二年は静かに美しく、おごそかに明けた。萬物一新の、新玉は、そのどこを探しても新しく眺められるから不思議だ。元旦を昨日に迎えたと思っている裡に、今日は一月三日、僕はその日、楠田練一の招待を受けて東京屋デパートの六階の、大広間の新年の挨拶兼新年宴会に出向いていた。新年の挨拶交換の後に、デパートの店員の恒例の余興があとに催されて、その翌日から又、業務が始まる。

社長、重役等、二、三の主だった人の、新年の誓いが披露されて、会は終った。で、その後から皆楽しみにしているそれがいよ／＼これから始まるのだった。係の、司会者が壇上に立って演奏者を呼び上げた。いよ／＼それの幕は切って落とされるのだ。

第五回東京屋デパートの新年会の式典も無事に終りまして、愈々これから、皆様お楽しみの各自、秘術を儘した隠し芸に入らせて頂きますー先づは、お目出度いお正月にちなみまして、トップを切って演奏致しますのは箏曲「みだれ」八橋検校作、演奏者は楠田練一様でございますー」

司会者がそう挨拶をすると、小豆色の〇〇がする／＼とまくり上げられた。僕は、前面の舞台近くの椅子に坐っていた。琴面に流れる白線の糸が、目に痛い程、光線を受けて白く光り、スポットライトが舞台に投げられた。

楓材の直台の前に、タキシードに身を包んだ練一が緊張した顔で坐っていた。僕は、じっと練一を見つめた。練一は十三絃を三つの爪で糸を弾じてこれから「みだれ」を演奏すると云うのだ。

練一に箏曲の技術なんかあったのだろうか？そのよう

な技術を僕はこれまで一度も、彼から聞いた事はなかった。琴は、十三本の糸を、あちこち、手指にはめた糸で引っかき、左手で押してあの妙なる得も云はれぬ音色が発せられるのである。読者の皆さんも御存じのように、琴台の一番前方の糸が、壱弐参と数へて拾壱、拾弐、拾参をそれ／＼、斗為巾と呼ぶ慣はしになっているのである。〆て、十三本の糸を爪で弾じて、あの幽玄なる「みだれ」の曲を披露すると云うのだ。

練一は果たして、あの、有名で難解な曲を無事弾きこなすのだろうか？みだれの曲は、ある程度の熟練者がつまびく、一寸、難しい曲なのだ。瞬間、僕の頭脳から血の気がすっと引いて、練一を打ち案じる白っぽい空気が流れたのを憶えた。練一の演奏がゆっくりとした調子で始まった。妙なる、美しき音色が場内にひびき始めた。美しく、たほやかに金の小鈴を振るような音色ー。

一段目である。二段目、三段目と曲が次第に早くなって、四段、五段と進んで行くと、もう、目まぐるしいような爪の動きが十三絃を白爪が飛ぶ。六段目からは、急流、瀬を割るようなテンポの早さとなって美しいその日本的な音色は、弱々たる音韻を放って場内一杯にひびき渡る。練一の指先は、生きもののように糸を掻き引き、左手で九糸、七糸、十壱糸を押し放す。白爪が十三絃の間を正確な機械の歯車の如く往来して、その音色は、深い紫色の谷間から、おごそかな、且つ、慈愛深い神が浮び上るが如く印象を放って、音、色が飛び散りその爪の早さは、十段目頃は、空を飛ぶつばめの如く目にも止まらぬ早さである。場内は寂として、全員の瞳が一つになって、練一の、その挙動に注がれた。十分間の演奏で十二段に入って、曲は、再び、ゆるやかに戻り終りの五と壱の合せ爪がやや間をおいて静かな音を放って終った。場内は、その美しき音に酔うが如く、暫し、呟き、一つなく、あぜんとなって、拍手をする者とてなかった。練一は、静かに一礼して、やがて、緞帳はする／＼と降りて舞台を塞いだ。場内はその時思い出したように、萬雷のような拍手が起った。練一のその美〇に粋って、晴着の一人の女性が、うっすら涙を浮べている者すらあった。僕は、改めて、練一のかくれた偉大な一面に触れたような気がして大いなる感動に押し包まれるのを、どう制し得ようもなかった。

母の訪問

成功裡に練一の演奏は終って、それから、他の店員達

の歌、踊り、寸劇も進んで、午后三時、その恒例の演芸は終った・さあ、明日から、又、仕事だ。全員は金一封ののし袋を貰って、三三五五、場内を出て、街に散って行った。池袋の駅前は正月で、ごった返す人波であった。人、人、人の渦、それは宛ら、人を糸に見立て、一陣の機織を機るが如くに―。

「佐伯さん、どうします。こんな人出の街中を歩いても疲れるだけですね。僕のマンションに行って一休みしましょうか―」

僕も、少し疲れていた。人のうづ巻で歩くのも面倒なくらいだった。

「うん、そうしよう―君の所へ行って見よう―店なんかみな休業で、喫茶店すら開業していない―」

僕等は、国電に乗るべく、駅構内に入って行った。何時かも、こんな場面があった。

そうだ。あの時は夏の日であった。

僕は、地下道入口の所に立って、練一の来るのを待っていた。あの時、午后八時、練一は鞄を提げて静かな足取りで近づいて来たのを―読者は憶えていられるに違いない。練一はその時、にっこり打ち笑んで云った。

「佐伯さん、僕、約束の時間に遅れないでやって来たでしょう。約束の時間にまだ五分ありますよ―」と、きらめき出した夜の世界は、ネオンの七彩の光美しく地上に落ちて、快晴な夜だった。銀の象眼のような星がきらめいていたのを！

「佐伯さん、僕のマンションに行って休みましょう。こんな人混みでは、歩いても疲れるだけですね―」

（お正月だし、彼のマンションで、ゆっくり休もうか」

僕達は異身ながら、同じような思いに馳られて、王子、西が原の彼のマンションに着いた。が、扉を開けたせつな、其処の椅子に待っていたものは一人の婦人―練一の母、菊江であった。菊江は椅子を起つと自分の方から僕に挨拶を送って来た。

「佐伯様、先日はわざわざ祖母のお見舞を頂き有難うございました。」「いいえ、どういたしまして、僕こそ、お邪魔致しまして―」

僕は返事を返しながら、

（此の人は何か用事があって、栃木からわざ／＼やって

来たのだ）と僕は思った。
「お母さん、いらっしゃい。何か東京に用事があっていらっしったんですか？」と練一——
「えゝ、一寸ね、母さんは、お前に用事があって——」
二人の会話を聞いて、僕は此の場合、二人から離れるのが妥当だと思った。僕は、又、再び、後で来る旨約束してマンションから帰った。菊江は練一と向き合った椅子に坐ると「お前、お手伝いさんは。今日はお休みなのかへー」「お正月でしょう。明後日、又、お手伝いに来ます。」
菊江は用件を云い出すのを待ち兼ねたように、
「お正月も迎えて、貴方、もう、二十五才になった筈ですね。」
「えゝ、僕、二十五になっちゃいました。でも、それがどうかしたんですか？」
用意しておいてくれた、茶の用意をしながら、練一はポットを傾けて茶を立て、母に推めた。
「有難うー　あたしヨウカンを持って来たんだよ。練一さんはヨウカンが好きだった筈だね」
菊江は既に、勝手にヨウカンを切り揃えて、会津塗りの茶器に和紙を敷いて、それを戸棚から取り出してきた。

母は、暫し考えてから「お前、木下暁子さんを知っているでしょう。あの人ね、母さんは気に入っているんだけど、暁子さんにも、それとなく訊いてみてね。お前を好きだとおっしゃるの——。お前、暁子さんと結婚する気はないだろうか？」
「え、僕、暁子さんならおさななじみですし、知ってますよ。だけど、結婚したいなんて、あまり突然な話ですね。」
「そりゃあ、母さんもね、手紙で前もってお前に知らせるのが、手順だったけれどー正月で、家の方、少し、閑なものだからね、一寸、上京して来たんだよ。」
「僕、結婚なんて、まだ幸えてもいないですよ。もう少し、一人でいたいなぁ——」
「でも、いづれは、お前だって結婚はしなければいけないだろう——。食べるには困らないし、財産だって、母さんが按分して、お父さんから、あゝして三分の一をお前に譲るように取り計らってやったんですからね。」

焰

母は急に、堰を切ったように、暁子さんは生れも旧家だし、環境から云ったって申分ないと思うんだけど——

それに、先方も乗り気になっているし、こんな好い縁談はないと思うんだよ。先方の御両親も、是非お前に貰って、もらいたいんだって ―」

練一は窓から射し込む陽の光りに、背をあづけて、しばらく黙っていた。

「― ねえ、母さん、僕、あまり突然で考えがまとまりません。少し、考えさせて下さい。」

「まぁねぇ、それはそうですよ。母さんの話もあまり突然で、お前には悪いんだけど。それは分っているんだよ。でもねえ、練一さん、お前だって何時かは結婚しなければならないだろう ― 暁子さんの事はね、母さんはね、ずっと前から、周囲の方から、それとなく人柄を聞いて廻っていたんだよ。ところがどうでしょう ― 皆、暁子さんの事をよく云ってくれて、あんな利口で、気質の優しい女は居ないって賞めてくれるんだよ。周囲の友達から推薦されるような方は、先づ人柄は大丈夫な方なんだよ。それが、友人の誰かが、暁子さんなんか駄目だわね人との交際は悪いしとか、そんな噂があれば、お母さんも乗り気にはならないんだけれど ―」

「― そうですか、そんなに好い人なんですか？　あの人は ―」

母は返事を得たように、にっこりとして、

「そうなんだよ。あたしは一番大切な事は、人間がしっかりしている事、つまり、人をそらさない、利口で優しい人、人間って、それが一番大切な事ではないだろうか―。母さんはね、長い人生経験から生きて行く人間ってそうした事が一番大切な事だと思うんだよ―」「お母さん、結婚って、只ぢそれだけで合格するんでしょうか？それは、僕の方も性格は暁子さんのようにありたいけれど、―その他に、若し、僕の方に何か欠陥があったとしたらどうします！女を愛せないような、暁子さんな対して申訳ないような欠陥が、若し、僕にあったとしたらどうします？　お母さん ―」

菊江は呆気にに取られたように、暫し、息子の顔をみつめたが ―。

「まあ、お前何を云うの。それは一体、どう云う意味なの？お前、まさか、暁子さんに対して顔向けの出来ないような、女性関係の過ちを犯したんではないだろうね。」

「いいえ、そんな、それは違います。そんな女性関係で過ちを犯すようなそんな事ではありません。

練一は、歯をきつと喰いしばって（こればかりは云いない。たとへ、どんな事があっても口外してはならぬ。

例え、八ツ裂きにされたって、歯から外へ出外へ出してはならない——」

練一は静かに起ってサイドボードの、塵など払いながら（自分は男を好きなんだもの——女だって好きだけど——女を愛せないって云う事は決っしてないけど、自分は、佐伯さんと友情以上のものをもってしまった。——」

つまずくように歩きながら、気にする方が、むしろ可笑しい。世間にはいくらもある事だし、気にする方が、でも、こんな事、世間に気にしないで、カラッとした気分でいれば好いのだ。良心的にくよ／＼悩んだところで何になるのだ。悩む事こそ可笑しな事で、そんな事気にしなければいゝのだ。佐伯さんとのホモ関係なんて、そっと、箱の中にしまって素知らぬ顔をしていればいゝのだ。

自分の、今後の長い人生、波乱ある荅生を共に力づけ慰め、励ましてくれるあの人、佐伯さん、自分の人生に躓きを憶えた時何時だって、飛んで来て励ましてくれて僕の精神の要になってくれる人——佐伯強さん。これで良いのだ。割り切って考えて、気にしなければ、それで良いのだ。

練一は、額を明るくして、母の方に向き直って云った。

「僕、結婚したっていゝですよ。お母さん、でもねえ、もう少し考えさせて。もう暫くの間期間を僕に与えておいて下さい。ねえ、母さん、僕だって暁子さんは好きです。だけど、もう少し——もう少し期間を僕に与えておいて下さい。」

暁子の訪問

新年を仰いで、その、九日の日、僕は池袋東京屋デパートへ電話をかけた。再び、会いたい旨手短に話した。此の前の一月三日の「月曜日」は、二人連れ立って、西が原の彼のマンションに行ったけれど、故郷の栃木から母が上京して来て待っていたので、僕は、自から、気を利かして帰ってしまった。母は、あゝして、わざ／＼練一の部屋で待っていたのだから、何か内密の用事でもあって、欠くべからずに上京したのに相違ない——やっぱり、あゝいう場合、自分は遠慮すべきが妥当であるかもしれないと思ったからであった。練一の声が受話機に元気よく響いてきた。

「あ、もし／＼佐伯さんですか。此の前は失礼致しました。折角、いらっして戴いたのに帰ってもらったりしてでも、僕、少しも構はなかったんですよ——」「そうだったの？　でも、君のお母さんではね。やっぱり——」用

件を云い出さない裡に練一の方が察して
「すみません。七時にデパートの正面玄関にいらしって下さい。今日はタクシーで帰りましょう。佐伯さん、きっと、七時までいらしって下さい。では――」彼は、店内に用事でもあるのか、そう云って電話を切ってしまった。

× × ×

七時に二人は約束の場所に落合って、それから練一のマンションに辿りついて、扉を開けて入ってみると、其処に待っていたのは、椅子に腰打ち下ろし後姿を見せている、令嬢風の若い女性だった。女性は、つと、椅子を起つと、こちらの方を向いて、恥しそうにお辞儀をした。一週間前には、此の椅子に練一の母が坐って待っていた。今日は、人こそ違い、同じような姿勢で練一を待っていた。
「練一さん。しばらく。あたくし、暁子でございます」
「あゝ暁子さん。土、誰方かと思いました。だって、すっかり変ってしまって――」
はにかみ乍ら、笑って、下さしうつ向いた暁子には、一個の女性としてすっかり成熟した、匂うが如く、つゝましい、美しいその美貌であった。
「僕、帰ろうかな――」僕はそこにいる暁子に対して何となく悪いような気がして、ひとり言のように云うと、暁子の方が、
「あら、構いませんのよ、あたし、あなたのお噂は練一さんのお母様から、始終お伺いしてよく存じておりますの――」と云った。傍から、練一も推めるので、僕は、次の洋室に這入って行って、ベッドがあるのを幸い、そこに潜り込んで寝てしまった。その時、境の厚い扉をきっちり閉める事を僕は忘れなかった。
「練一さんは、今年、二十五才におなりでしたわねー」
「えゝこのお正月を迎えてねー」
「あたしは二十二ですのー」
「そうですか、女にとっては、結婚適令期ですねー」
暁子は椅子から身を乗り出すようにして、「練一さんお母様からお聞きになりましたか？　あたくしの事ー」あたし、お伺いしたのは実は今日はその事でー」
「………」「あたくし、ずっと前から練一さんを好きだったのです。あたくし、はっきり申します。練一さんあたくしと結婚して下さいません！。あたくし、ずっと前から、あなたを、お慕い致しておりました。」
「僕が、暁子さんと結婚？　余り出し抜けで、僕、面喰

らってしまうなァー」
「まあー、出し抜けだなんて、あたし、あなたのお母様にお願いして――」
練一は、とも角、ポットと茶器とを用意して暁子に推めた。金と銀とで、菊と水流とを配らった蓋付きの茶器に彼は、玉露を仕立て、茶卓は、一枚抜きの、輪島塗りのだった。
「練一さんは、ヨウカンがお好きでしたわね。あたし、お土産にヨウカンを持って参りましたの――」
彼女は、その包み紙のを練一の方に押し出した。
「有難う。頂きます。」
暁子は、しばらく黙っていた。何か、自分の気持を整理している風であった。女性の方から結婚の事を持出す事は、何としても恥しい事であり、いざ、云おうとしても、その、勇気が言葉にならなかったのである。だが、暁子は、もう、怯まなかった。此の機会を逃がしたら、もう、チャンスは二度と訪れないかも知れない。
「暁子さん、結婚の話なんて、余り突然なので、僕、とまどいします、今すぐ御返事を迫られても、僕には、どう返事していいかー」
練一は、立ち上って、落着かぬように、歩きながら、サイドボートの、塵など払っている。
「それは、そうでございましょみ。順序として、先づ、お手紙を差上げてあなたの御意向をお伺いしてからー」
暁子は卓に身をもたせかけてよゝと泣き沈んだ。顔を覆ったまゝ、
「でも、あたくし、もう我慢が出来なかったんですの。ぐず／＼していたら、あなた、他の女性の方とー」と、彼女の泣声が高まった。「暁子さん、そんなに、此の僕をー でも、僕はあなたと結婚しても暁子さんを幸せに出来るかどうか不安です。僕には、そんな資格がないような気がする。」
暁子は、涙にきらめく瞳を見上げ
「いゝえ、そんな事ございません。あたし、悪いんですけど、あなたのお友達から、練一さんのお噂をそれとなく、お聞きしましたの、そうしたら、皆、あなたは気持がお優しい、人との協調性はある、上役の方からは、目をかけられていると、皆、あなたを賞める方ばかりー他人から好かれる方は家庭にあっても、良人として合格だって、これはあたし、婦人雑誌で読んだような気が致します。」
練一は反問した。「だって、そうした条件だけで、結

婚生活がうまくいくでしょうか。その他に、僕の方に何か結婚出来ない理由があるとしたら、暁子さん、どうします？」

暁子は、蒼白な額をみなぎらして、

「まあ、あなた、それは一体どういう意味ですの？　何か他に愛する女性の方がおありなんですか？」

練一は問い詰められて、心の中で思った。（自分は佐伯さんと友情以上の愛情をもってしまった。そして、此の愛情は今後も続くだろう。そうした性格で、どうして此の汚れない純真な処女の暁子さんと結婚することが出来得ようぞ―、でも、こればかりは人には云えない。例へ、八ツ裂きにされたって此の男の秘密は歯から外へ出してはならぬ。正直に苦しすぎれに打ち明けたところで、人からは笑者になるし、第一、相手を苦しめるばかりだ。此の性向は、永遠に自分の、心の奥底深くしまっておかねばならぬ。

「ねえ、暁子さん、僕は―」

「何ですの？　御遠慮なくおっしゃって下さいませ」泣くような笑みをつくって彼は、二秒、三秒、間をおいて

「もう少し、もう、暫くの間、此の結婚の事は、僕に考えさせて下さい。考える期間を与えて下さい。今の僕には、そうするより他に方法がありません」

と云って、それから自然らしくつゝけた「僕だって暁子さんは好きです。あなたは人間的にも総明ですし、僕は好きよりも尊敬しております。」

つづく

人々は、一様に結婚適令期になると結婚をする。練一も暁子と果して結ばれるのだろうか。次号、涙の頂点！

× × × × ×

心の波止場について、御意見、御感想をお寄せ下さい。「清心」の内容をより楽しくする為に―　拝手紙を下さいました方に洩れなく粗品を差上げます。

新宿区住吉町四二
すみよし荘　三宅一夫

&&&& ? &&&&&&&&& ? &&&&&&&& ? &&&&

会員は同好者の先導者たれ

毛　利　生

会員全員が同好者の先導者となって向上進歩を計らなければならない。常に申上げております様に同性愛者の存在がマスコミに依って好むと好まざるとにかゝわらず一般に知れわたって来ると我々同好者は今迄と異って常に衆人の注目をひくことになります。随って我々の日常の行動もその自覚の許に為さねばならない事は必然であります。然し乍ら甚だ口はばったい事を申す様でありますが会に籍をおく人と会員外の人とは可成りその考え方及び行動に於て異っていると私は考えます。つまり我々が常にこれだけ慎重に行動しているのにかゝわらずそれ等の同類の人達の心ない行為に依って物笑いの種を作っているとも言えるのであります。そこで考えました方法は会員外の人で会誌を購入した人にその時期に発表した追加名簿を同封進呈しその人がその名簿に記載されている人に文通を希望すれば一回金百円也の手数料で転送又は手渡しの方法で世話をします。この際に勿論、会員ではありませんから会員番号はなく事務所では「会員外」の判をおして取次ぎ致します。これを受けた会員の方は好みが全然異れば止むを得ませんから丁寧に御断りし、好みが合致すれば文通を続けられたら良いと思います。そうして文通交際をし乍ら本会の有り方や意義を先方に納得の行く様に徐々に知らせ出来得れば会員になる様に計らい、そうでなくとも前述の様にお互いに向上進歩し明るい気持で日常生活に胸を張って当る様にして頂き度いと思います。この場合に会員の方からの転送依頼は送料だけで手数料は不要ですが会員外の分はその都度送料を含めて金壱百円也を頂くことに致します。そして古い会員の方でこの方法を歓迎して自分も是非その名簿に掲載して欲しいと思われる方は入会時に記入されたカードに記入された同じ要領の事項を書いて（便箋でも結構です）掲載料金参百円也を添えて当会宛に送って下さい。次号の際に発表致します。但し会員番号は現在のものと同じです。以上の方法は会員が会員外の人に接して啓蒙することゝ広い範囲で相手を求め得られるの二点のプラスであり何れの場合でも当会では会員の住所や氏名は絶対に知らせないと言う原則はくずしませんから本人が充分に注意しておられゝば何の不安もないはずであります。

//////// ※ ////////

連載小説

星は夜光る（一）

東京都　三四一九生

嘆きと喜び

マサルと園田は緑陰のベンチに腰掛けて、静かな湖の水面を見詰めていた。真夏の太陽がさん／＼と降り注いでいたが、其処の所だけは湖の底まで見えるのであった。遠くで子供連れの観光客が、水につかってキャッ／＼とはしゃいでいる。

北国の湖

乙女らの　涙たゝえる十和田湖は
結ばれぬ　恋のまぼろし
春来れば　若草が萌え
花の香に　迷いさまよう
北国の海

緑なす　影を写して十和田湖は
穏やかな　夜にとけゆく
幾つかの　恋物語
秋が来て　風が散らせる
北国の海

雪が降る　櫛ケ峰から十和田湖に
訪れる　人もなくなり
戯れに　冬鳥うかべ
又春に　誰を招くか
北国の海

「どれ、そろ／＼帰ろうか。マー坊？」
「えゝ、すぐ行きますから」
そう言いながらもマサルは尚も湖面に目を注いでいた。夕日が深紅に染まり水面に一条の光の橋を掛けてくれた。やがてマサルはホテルは引きあげてみた、が、園田の姿が見当たらない。浴場、ロビー……何処にも。
「三つお連れ様？　だってお客様はお一人で……」
フロント係はキョトンとしている。マサルはそら恐ろしくなった。裸足のまゝ飛び出し辺りを見たが、目に入るのは知らない観光客ばかり。
「おじさーんっおじっ」

彼は道に敷き詰められてある砂利に足をとられ、もんどりうって倒れた。

海の四重奏

海は微笑み　僕達を誘い
愛を確かめた　舟を浮かべる
君のすべてを　感じた時に
かもめも飛びかい　花を舞う

海は静かに　流木を浮かべ
空の彼方まで　はてなく行くよ
君と二人で　生きるしあわせ
つかんで満ちてる　僕のよう

海は叫んだ　波しぶき高く
光る稲妻と　嵐を連れて
君よ行くなと　引きとめたのに
二度とは帰らぬ　遠い人

海は泣いてる　蒼ざめた色に
母に叱られた　子供のように
君を失い　喜びさえも
忘れてしまった　僕なのさ
海は呼んでいる……

―　おじさーん、おじさーん　―

左足をベッドから滑り落として彼は目を覚ました。

「夢だったのか……？　おじさんが居ない」

すでにベッドの温もりは消えていた。横の部屋を覗くと、下着姿の園田がデスクに向かって何やら書いていた。マサルは胸を撫でおろすと足音を忍ばせて近づき、そっと園田の肩に手を置いた。

「おはようマサル君。ちょっと待っててね、もう少しで終るから」

二人だけの朝食が始まった。園田の話では、週に二度家政婦が来て家事の面倒を見ているらしかった。無心に新聞に目を通している園田の姿を見て、彼はまぶしい物でも見るように目を細めた。

「おじさん」

「うん？」

「僕達はいつ迄……友達でいられるんでしょう」

「いつ迄か。君さえ僕に満足してくれたらいつ迄もと
思っているんだが……」
本当ですかと言わんばかりに彼は園田の顔を凝視した。
「僕は前から欲しかったんです、何でも相談にのって
くれる優しい人が・・・・父親の愛情というものを知らずに
育ったので。一度でいいから中年の優しい人に甘えてみ
たかった。だから今すごく嬉しいんです。おじさん僕を
捨てないでね？」
「何を言うんだ、そんな事する訳がないじゃないか。
さあ沢山おあがり、食欲の秋だ」
「えゝ」
ひとすじの涙がこぼれた。

あなたを信じて

この胸の重さは　どんな辞書よりも重い
この胸の熱さは　どんな光よりも熱い
苦しい仕打ちをされても
死のつぐない求められても
あなたを信じるわたしは
ただひたすらに　愛の山登ろう
その黒い瞳は　どんなあかしよりも確か
その澄んだ瞳は　どんな世界よりも清い
何かが昨日でなくなり
今涙が溢れ出るとも
あなたを信じるわたしは
ただ明日のため　あなたのもと走ろう

二人は散歩に出掛けた。外はまだ残暑が厳しいという
感じである。サンダルの音がベーブメントに心地良く響
く。抜けるような青空がマサルに北海道の空を思い出させ
せた。ポプラではないがプラタナスが風に揺れて息づい
ている。二人は渋谷公会堂へやって来た。
「マー坊が生まれた所は？」
「北海道です」
「いい所だね。僕は宮崎の都城という所なんだ。」
「それじゃ北と南ですね。北と南の人間がある日東京
でめぐり会う……」
「ロマンチックだね」
「二人は互いに目を合わせただけで何も言わない」
「しかし、北の人は一目見ただけでこの人は僕が求め
ていた人だと信じ、南の人はこの人こそは自分が捜し続

続けていた人だと分る」
と園田は言葉を継いだ。
「二人は黙って街を歩く」
「心地良い風が吹く夕暮れ時」
「ネオンが一つ又一つとつき始める」
「二人はようやく昼の暑さから逃がれられてホッと溜息をつく」
「目の前にくっきりと浮かぶ白い階段が現われた」
園田は意外そうな顔をすると
「二人はその階段を登り始めた」
とつないだ。
「手に届くような所に星が光っている。」
「まるでシャンデリアのようにそれは輝いて、優しくセレナーデを唄っている」
「二人は尚も登って行き星の上に出た」
「其処には夢のパラダイスがあった」
「・・・・・・・」
「・・・・・?」
「そのあとが分らないんですよ」
「ははあ The End という訳か、僕だったらこうやるよ。えーと二人がホッと溜息をついたんだっけ・・・・

二人はとあるレストランに入った」
今度は後手かと思いながらマサルは続けた。
「其処は一流レストランクラブになっていて外人も多かった」
「二人はワインとスパゲティを注文した。」
「やがて二人は上気嫌で其処を出た」
「夜空には星が今にも落ちそうにさざめいている」
「二人は車を拾った」
「車はハイウエイを快調に走った」
「二人はいつしか眠ってしまった。」
「車はハイウエイを空へ向って走った」
「?」
「ハハハハ」
「アッハッハ愉快だなあ」
太陽が幾分傾いてきたが、それでも容赦なく二人に暑さを感じさせていた。二人は日陰に移った。

愛という名の旅

それからのマサルは以前にも増して陽気になった。上司にも好かれ同僚からも親しまれていたが、ただ一人彼のガールフレンドである和田トモ子だけは冷たい目で見

るようになった。彼が以前のようにデートに誘わなくなったからである。

九月二十三日、マサルは園田の運転するマーキュリーに乗って三泊四日の旅に出た。仕事を済ませてから出掛けたので熱川のホテルに着いたのは七時過ぎであった。早速風呂に入り食事をした。そしてホテルのスタンドバーで酒を飲んでから、二人はそぞろ歩きに砂浜に出た。丸い月がこう／＼とさえ渡っているうえに、星も負けじと許りに輝いている。

銀河の流れ星

見上げてご覧　星がポツンと光っているよ
地上で唄う　愛の歌に震えてるのさ
遠くのあの星と恋人だけど
まゝにならぬ　星の運命に震えてるのさ・・・・

早く君の側へ行きたい
広い銀河の流れを渡り
待っててくれ　今すぐ行くよ側へ

銀河の流れ　空の彼方へ果てなく続き
夜空を翔ける　僕の前に鎖の河が
飛び込んでみたけれど遠く流され
君に捧ぐ　憂も空しく見つめるばかり

早く君の側へ行きたい
そして二人で仲良く生きよう
待っててくれ　今すぐ行くよ側へ・・・・・

見上げてご覧　星が離れて光っているよ
僕等が唄う　愛の歌に震えているよ
二つの星の禁じられた愛の物語

砂浜にはマサルと園田以外に人影は見えない。ただ打ち寄せる波と、空の住人である月と星の群れだけが二人を見守っていた。

「パパ・・・・・」

「有難うマサル、初めてパパと呼んでくれたね」

二人はひしと抱き合った。愛に言葉は要らないという。瞳と瞳が全てを語り合っているから・・・・・二人はその夜抱き合ったまゝ眠りに落ちた。

翌朝マサルは早く目が覚めたので一人で砂浜を散歩し

た。朝靄が立ちこめる波打ち際に海草が打ち上げられている。太陽はまだ昇っていない。朝なぎというのだろうか、風もなく波もそれ程たっていない。彼は深呼吸をするとサンダルを手に持ち砂を歩き出した。

　　海をたずねて
あてない心に夜の星が
どこまでもついて来る　僕のお供か
貝の子守歌　波のたわむれ
　傷ついた昨日を慰めてくれる
あしたが来たら僕は帰る
今夜だけ付き合って　夜の友よ

夜明けの風吹く浜に立てば
霞んでる白波も　やがて目覚める
　夜の置土産　青い海草
　水深きところの神秘の色香よ
朝日を浴びて僕は帰る
昨日とは違う道　振り向かずに

やがて太陽が水平線の彼方に顔を出した。マサルはその自然の美しさにしばし見とれていた。水面にきらびやかな金色の橋が掛けられ、マサルの瞳がキラ／＼輝いた。

　その日二人は更に南下して天城峠を越えた。

「さてどうしょう。今夜は山中湖に泊まるんだが、まっすぐ行ったんじゃ早く着きすぎるし、富士五湖巡りをしようかな？」

「いいですね、僕は行った事がないんですよ」

「よし、じゃ決まった」

決めたと言わずに決まったと言ったのがマサルには嬉しかった。

「田子の浦わ、うち出でて見れば真白にぞ、不尽の高嶺に雪は零りける」

　突然園田が浪花節みたいにうなったのでマサルはゲラ／＼笑った。吉原、富士宮を通りやがて白糸滝に着いた。

「わあっきれいだなあ」

「どれ写真を撮ってあげよう」

　その時側に居た女子学生のグループからつぶやきが漏れて来た。

「あら、あの子誰かしら、ねえ？」

「さあ、分らないわ。クラブ歌手か何かじゃない？」

「ねっあのおじさまもハーフみたいな感じね」
マサルは聞こえぬ振りをして、今度は園田をカメラに収めた。
「素敵だわ。あゝいう人と付き合えないかしら」
「あなたじゃ無理じゃないこと？　ねえ」
「何よっ」
マサルと園田はその場を離れた。
「何か言ってたみたいだね。君がクラブ歌手とか」
「そうですか？　僕には、あのおじ様ハーフみたいと言うのが聞こえたけど」
二人は笑いながらマーキュリーに乗り込んだ。
「天地の分かれし時わ　神さびて高くたふとき　駿河なる富士の高嶺を　天の原ふりさけ見れば　渡る日の、渡る日の……」
「渡る日の影も隠ろひ　照る月の光も見えず」
園田が助けてくれた。マサルも和した。
「白雲もい行きはばかり　時じくぞ雪は降りける　語りつぎ言ひつぎゆかむ　富士の高ねは」
「これも山部赤人でしたね」
「うん、良く知ってたね」
二人はドライブインで富士山を見ながらコーヒーを飲んだ。

マウントラブ

どこから登ろう　（マウントラブ）
考えこんじゃう　（マウントラブ）
廻り道をしてたら　消えちゃいそうな
愛しいあなた　（マウントラブ）
あなたが欲しい　（マウントラブ）
ときめく心が　はききれそうだよ
ラブ…気高き人よ
ラブ…届かぬ思い
横道それたら　（マウントラブ）
あなたが見えぬ　（マウントラブ）
いっそのこと岩場を　よじ登ろうか
悪戯よしなよ　（マウントラブ）
雨など降らして　（マウントラブ）
つれない素振りするのは　やめて欲しい
今日こそあなた　（マウントラブ）
好きだと言って　（マウントラブ）
じらしてばかりで　近づけぬあなた

ラブ……恥ずかしがって
ラブ……雲にかくれる
今日こそ登ろう　（マウントラブ）
あなたの山へ　（マウントラブ）
すべてを捨てアタック　あなたの山へ

富士五湖を巡りその夜は山中湖畔に投宿。次の日出掛けに園田はこう言った。
「マー坊、今日は何処で泊まるか当ててご覧。当たったら今夜は君の言う通りにしよう」
「さあて、何処かな……」
「三つヒントをあげるね。一つ、群馬県の温泉だ」
「ぐ・ん・ま……」
「二つ、そうだな此処には山があるんだ。丁度赤城山と相対してね」
「……」
「三つ、その山は春っぽい名前の山だよ」
「春ね…春よ来い、早く来い。分った！榛名山だ、伊香保でしょう？」
「当たーり」
「当たったんだな。さて夜はパパをこま切れにして食べてしまおう」
「おいマサル、変な事言うなよ、このまゝ山にぶっけちゃうぞ」
「楽しみだなあ、それともその体の毛を全部そって、つる／＼てんにしようかなあ」
「あゝ神様、あわれな私をお助け下さい」
「アハハハハ」
「ハハハ」
諏訪湖畔で一休みをして食事をした。松本から○川沿いに長野へ出て千曲川を見ながら一路榛名湖へ向かう。この頃からマサルはウト／＼舟をこぎはじめた。
「眠いのかい？　景色がいいのに。じゃ降りて冷たい空気を吸おう」
マサルは欠伸をした。とたんにくしゃみが出た。
「そら、やった」
「えへ、大丈夫」
「少し歩こうか、何だか僕も眠いんだ……ヤッホー！」
こだまが還って来た。マサルも試みた。
「ヤッホー！」
「ヤッホー！」

彼はびっくりして振り返り、にた／＼笑っている園田に顔を近づけて行った。
「今夜は……」
「分った、分った、ハハハ」
老いた農夫がやって来たので写真を撮ってもらった。
榛名湖に着くと二人は馬に乗り湖を一周した。
「パパが乗ったら、くたびれたって馬が言っていますよ」
「そうかな、七十六キロしかないけどね」
その時馬がヒヒヒーンといななないたので二人は大笑いした。その場に居た人達もゲラ／＼笑っている。
「こりゃけっさくだ、なあ馬ちゃんよ」
馬と一緒に二人は写真を撮ってもらった。
その夜二人は愛の思い出を作った。すや／＼と眠っているマサルの寝顔を見ながら、園田は今後の事を考えていた。
― この子が最も仕合せになるようにしてあげたい。僕の養子になってもらいたいが、何て言うだろう ―

　　けがれなき恋
おまえの涙のひとしづく
夜空に飛ばしてあげようか
悲しい涙が霧になり
ひんやりまぶたに触れるだろう
瞳をとじてそっとお聞きよ
天使のうたう歌　愛の歌を

ほたるの明かりが近づけば
スポットライトに変わるのさ
おまえの黒髪風に乗り
うなじにまつわり揺れていた
瞳をあけて空をごらんよ
天使が翔けてくる　愛を抱いて

愛する気持ちは同じだよ
きれいな運命とわかるだろう
手をとり夜に歩こうよ
天使の指す道　愛の道を

園田の唄う子守歌がいつ迄もマサルの耳元で続いてい

た。湖の夜は次第に更けてゆく……

東京で二人を待ち構えていたものは悲しい別れ、園田はアメリカへ渡ってしまいます。

—つづく—

次号をご期待下さい。

男色記

その一

大阪市　某生

精次が永年住み馴れた大阪、天満の土地をはなれて、福島の浄正橋筋と云うその頃はまだ今のようにさびれてなかって、商店街、映画館、カフェ、喫茶店等がずっと立ち並んで都心を離れているものゝ所謂繁華街として名を成していた処であったが、

その浄正橋筋を梅田の裏寄りにある、しもたや作りであるが、当時新興の極道として売出しかけて儀理人情にも厚く評判の高かった或組頭の経営する事業部の一員として住込むことになったのは世の中も帝国主義全盛とは云え、本当に暮し良かった昭和初期の精次二十一才の現在ならば成人式を終った年の夏の日の事である。勿論文字通り清浄潔白と云う言葉がそのまゝ適当していた二十才過ぎの好感と云うよりもまだ少年期の抜け切らぬ、然し毛深く色も浅黒く、きび／＼した動作の彼は所謂、極道としてごろ／＼し乍ら遊んでいるとしか考えられない数人の若衆にも、又事業部の先輩達にも、『精次』『精次』と呼ばれ、可愛がられていたものだ。遊んでいるとしか精次の眼には移らなかったその若衆達も、やはり組長や一家に事変の起った時にそれこそ、水火を辞せず親分の為、組の為、立向って行くだけの気構えのある者許りの集りだったわけである。

さてその若衆達の中に一人韓国人のとても喧嘩早く然し日本語の上手に話せる日本名を月中常吉、平常誰からも『常ちゃん』と呼ばれている、色は透き通るように白く右の腕に未完成であるが桜に竜の筋彫りがその白肌にくっきりと際立っていて妙な美しさを発散させて、結構女性からも、モテ／＼らしかった？　らしかったと思っていたのは精次から見た場合であって、その住みついて第二日目の夜、意外な現実に直面し、精次のそれ以後の人

生が大きく変化し、終生、否凡らく今生、息のある限りその宿命に刻印づけられて行くことになるのである。
最初に述べた如く住込として務めた以上、夜ともなれば八畳の間が三室あってその一室に四人宛ふとんを並べて寝るのであるが精次のような新入者は汚ない、かびか、しみのある、薄ぺらなふとんで、下座の方に寝させられるもので、いつものように寝る位置に位置に彼に与えられたふとんを敷き寝ようとしていると。断っておくが、極道の若衆と事業部とはそれぞれ室は違っていて、同じ家の中に住んでいても大体わけられてあった。
だが、どうしたわけか、隅の方で汚れたふとんにもぐり込んで寝に就こうとした精次に常やんが話しかけてきた。
夜に入れば他の者達は一日の勤労から解放され、毎夜、ほとんど外出して了って、夜中迄一人でガランとした室中で、その頃とてテレビどころかラジオさえ普及して居らず、好きな本を読むのが楽しみだった精次はこの夜も相変らずその本の頁を開いていたのであった。
『精次』と呼ばれて、それでも昼の疲れか、うと／＼していたらしく、ハッと目をあけてみると常やんが枕元に突立っているではないか？　務めだして二日目、ましてや、その片腕に入れ墨した若者の常やんには恐ろしさの気持を抱いていただけに、驚いて言葉もなく、うずくまって了った精次だった。
『そんな汚ないふとんで寝るより此方へ来い』と精次を誘った。誘われても精次は半信半疑で『そっちへ行ったら、みなに叱られる』と断ったものゝ、やはり常やんの寝ている、きれいな室で、汚れてないふとんで寝てみたい気持は精次にもあった。
『誰からも叱られへんか』と云うと、
『かまうもんか来い』と強引に誘はれるまゝ、常やん達若衆の寝ている室へ連れて行かれた。
『常さん、誰もおらへん、常さんも出て行かんのか』と恐る／＼聞いてみる精次。
『お前が昨日来た折から俺は辛抱出来ん程、精次が好きやった』といきなり常さんが自分を荒々しく抱きすくめて了った。
余りの事に精次はびっくりして了って、どうする術も知らずそのまゝ押しつぶされるかの如く、その場え倒されてしまったのである。
『精次、頼みがある』俺の言うことを聞いてくれんか』と云うなりそれこそ、何も知らぬ無論抵抗さえ出来ぬ精次を、うつ向けにさせると同時に、常吉は已れのズボン

を抜ぐのさえもどかし気に、かなぐり捨てたと、見れば○○○○の状態ではないか。

その怒り、おへている白い○○が、まるで、燃えたった炎の勢いで今は唯じっとして、この先どうなるのかと、息をつめている精次のうつ向いた姿勢のその下後方へと突進しようとしている。

　精次のズボンをさっと降ろした常吉のぎら／＼した眼に移ったものは、今と異ってその当時はブリーフあぞある筈もなく、その代り六尺の褌をしていた者が多く精次のその股下にも純白の布が彼の○○を、包んでいたのである。只でさえいきり立って興奮している常吉は矢もたてもなく堪えられなくなってその褌をつかんで外してみると、若いに似合わず精次の○○は、所謂○○○○と云うその種類であるものだから、気持とそれとは、裏腹に今ではおこり切って、黒光りしたその○○先からは早くも白く流れるものさへ溢れようとする。今は○○と○けも何もあらばこそ、常吉は自分の○○先をぐいっ／＼と強引にも精次の○○え○○○と突き入れて了った。

『あっっ』『あああ ―』と頭先から落番でも受けたかの激しい痛み、精次はそのまゝ気を失って了った。

数分後、気がついてみると、あの痛みはどこえ云ったのかか、常吉と精次は相対のまゝその行為をつゞけていた。

『精次、どうだ良い気持だろ』

『常さん、もっともっと、奥へ入れて、早く早く』

『之でもか精次― どうや之でも／＼まだ良いことないんか』とよがり声で腰を使う常吉。そこ／＼、常兄、あああ ― 行く行く』

今は無上の性行為に、あらん限りの声を出しきって、二人は抜きつ差しつ、数十分を費した。

常吉の喜び満ち足りた顔、あれ程恐ろしがった精次もこの喜びを知らされて、常吉とこのまゝ何処へでも行って了えたならばと、考えるようになったこの気持の変り方。

汚れた褌、恐らく後始末のために常吉が使ったためだろう。どろ／＼した○○をふこうともせず常吉にすがりつこうとして、とっさに褌で後始末したその六尺の布が何故もなく懐しくなって離したくない今の精次だった。斯して常吉と精次の男色で結ばれた友情は、戦争と云う大きな社会変動と共にゆれ動いて行くのである。

その一終り

背徳セクシュアリイ

（三角帽子）

島　浩　一

照哉がその真赤なスポーツ・カーに誘われて青年の別荘に行ったのは、昼をずっと廻って陽光に金色が交じるか交じらないかの時刻だった。

平家であるがおきな部屋があるらしく以外と広く、廻りを僅かの木々が囲んで、ぐるりと高い岩乗なへいが被っている。

別荘と言っても青年は毎日ここで暮していて、富豪な息子のアトリエか何かなのだと、照哉は直感した。

門の中、玄関のすぐ脇に車を入れると、

「遠慮し無くていいよ。どうせ僕一人なんだから……」

青年は車から降りながら、玄関の鍵をポケットから取り出し、言った。

青年は順二としか照哉に伝えてはいなかったが、表札に「田所」と記されているのを照哉は見ていた。

「……あそこで何故僕なんかに声を掛けたのです？　たまたま人違いで、僕が気を察したから良かったものの――」

玄関の扉が開くまでの間、青年の側まで行きながら尋ねた。

「ん？　うむ……。――開いたよ、入れよ」

玄関の中で靴を抜ぎながら、照哉はその間青年が暗い陰を秘そめているのに、気付きながらも凝っと観付めていた。

飾り立てた重厚さは無かったが、やはり芸術家らしい空間の仕切り方や、材質の色合いなど普通の住宅には余り見られ無い風が全体的に装われていて、照哉は通されて行く室内までまるで落着きの無いように振舞ってしまった。多分にそれは相手が一人である事と、自分と相手との心の通じ合いがある事との奇妙な情感からだった。

「へえ、何か芸術方面の仕事をされているのですか？」

青年は幼い様子をしている照哉を微笑みつつ、……

「ああ、アート関係の仕事を、マア色々とやってるんだ。――坐り給えよ。一人者だけどそれ程汚く無いよ、通いの人が一日置きに来てるから」

照哉は（やはり）とうなづいた。自分の最初ゐ察しがうまく当ったからだが、照哉はふと自分がそのような方

向に妙な才能が出て来たのでは無いだろうかと、先天性と言うべき已の奇偶から、空しく思った。

「どうした？ ― 今、何か飲み物入れるから待っててくれよなァ」

青年はその居間のような部屋から、すぐ隣の簡単な洋風のれんで仕切られているキッチンへ、入って行った。

静かな物音を聞きながら、照哉は部屋を見渡した。荒い感じの白い壁が妙に印象的で、清潔的圧迫感を感じさせる。恐らくすぐ側の幅の可成広い扉は、アトリエか何か、順二の仕事場に続いているのだろう。真青なカーペット、オレンジ色のソファ、モダンでいながら一人者の殺伐を感じさせる。照哉はこの青年の一人ぼっちの生活を思い浮かべた。

「君って、おとなしいんだね」

そう言う声にふと照哉は顔を上げた。

順二はキッチンからワゴンを押しながら、彼の側へ持って来た。

「何もないけど、取れよ」

順二はテーブルを挟んで照哉の向い側へ腰掛けた。

「気兼ねなどいらないから、ゆっくり休んでいっていいよ」

順二はコーヒー・カップに口を付けながら、両足を伸ばしてその先を重ねた。

小さな卓子の下で、順二の足と照哉の足とが打っ掛った。照哉は順二の言葉とその動作とで敏感に意味を感じた。

「―嫌、帰りたいのなら、送って行くからサァ……」

自分の言動が衝動的なのにせよ、どうも相手との意志を無視している事に不自然さを覚え、順二は言い直した。

「僕、貴方が嫌いだったらあそこ限りにして、ここに来ませんよ」

照哉は順二が年の割には純情であるのを知り、自分が年下にも掛わらず、妙な崩れをしているのに気付いた。

「……でも良かった。君が通じ合う人で」

順二は安心の色を目に写した。

「全く驚きましたよ。行成あのビルのサロンで僕を呼び止めて、連れの人は誰だなどと言うのですから……。―僕は貴方の友人兼恋人にそんなに似ていたの？」

順二は苦しみを顔に出して、黙ったままうなずいた。

照哉はカップを口に付けて、少年を求める純心な青年の心がひどく痛々しいのを知り、色々聞くのは止そうと思った。

「でも、僕とそんなに似てる子って、どんなのかなァ・・・・・」
　言ってしまってから、その言葉が順二を傷付けている事に、反省した。
「あの人、君の誰？」
　青年はむっつりと聞いた。
　照哉は青年が自分と似ている恋人とは関係無しに、自分に好感を持っている事を、知った。
「サークル活動の主任の先生。・・・疑うつもり？」
　照哉は真実の事を伝えながら、自分の瞳が澄んでいるのを感じた。
　順二は微笑みながらソファに寄り掛かった。
「あの、このドアの向こう、貴方のアトリエか何か？」
　順二は照哉の目に自分の視線を合わし、
「ああ。— 見たい？」
　照哉は相手の仕事の事を気付かいながらも、うなずいた。
「散らかっているんだ・・・・・」
　そう言いながら順二は立ち上がり、その大きい扉を開いた。そして暗い中に入ると、パッと明りが付いた。照哉はその扉の間から中を覗いた。
　十二畳程の部屋で、床の板の木目が美しい。隅の方にダブル・ベッドや、描きかけのキャンバス、本の山積みされた大きな机、長い本棚などが置かれ、彼の才の深さに照哉は少々驚いた。以外と売れっ子らしいようだが、妙え仕事が無くとも、家の援助で十分やって行けそうな感じを受けた。
　肩に何か熱いものを感じると照哉は、後に順二がいるのを知った。照哉は時間を決めて、振り返った。
「僕、素直になります」
　順二は眉を少し曲げて、少々微笑んだ。体をほんのわずか震わせたが、口へそっと手を宛行い、厳しい顔を、した。
「君、ほんものかい？」
　順二は歓びと言うより、自分の考えの中に許して良い人物かどうかを確かめた。彼は自分の中身を大切にする男なのである。それは固いと言うより、より良いもの、自分の中に共通するもの或いは無いがあこがれているものに、興味を示す事なのである。
「僕、貴方が痛々しくて、それが美しく見えるのです。すれっからしでは無いけど、僕は体を許した事があります。でも、僕は貴方が余りに素晴しく感ずるのは、その

経験があるからなのです。— 貴方が好きです。貴方が好きです。貴方は僕の気が移ぬと思われているのかもしれませんが、仕方無いです。….しかし僕達はまだ始まってはいないのです。燃えつきるまで燃えてみましょう！…..貴方の中に何か初めて自分を見付けた気がします」

照哉は良い家の子だった。格式の中に矛盾を感じつつ無事大きくなった、少年だった。

「君、もしその気持に偽りが無いのなら、僕は君に対して挑戦してみたい。— 僕の友人をここに呼ぶ。若い子が好きな男だ。無論彼とも関係が無い訳でも無いが、彼とはそのような物なしに、親友として結ばれている。君がもし僕を愛しているのなら、僕の中の一部である彼も共に愛せるだろうか？」

照哉は少し顔を蒼ざめさせた。が、直に強い力をほとばしらせた。— 照哉は大きくうなずいた。

勇んだ微笑みと共に、順二はその部屋にある白い電話に飛び付いた。

照哉は人の話しを聞くまいと、そのアトリエの中へ入り、電燈のスイッチを探した。そしてそれらしい入口の近くにあるプラスチックのボタンを押すと、室内は暗くなった。

ドアの隙間から居間の陽光が漏れて来る。隣の部屋で順二の声がする。が、照哉には聞き取る程の力も無い程高ぶりが生じていた。閉め切った順二のアトリエ。照哉は小さな溜息を付いた。

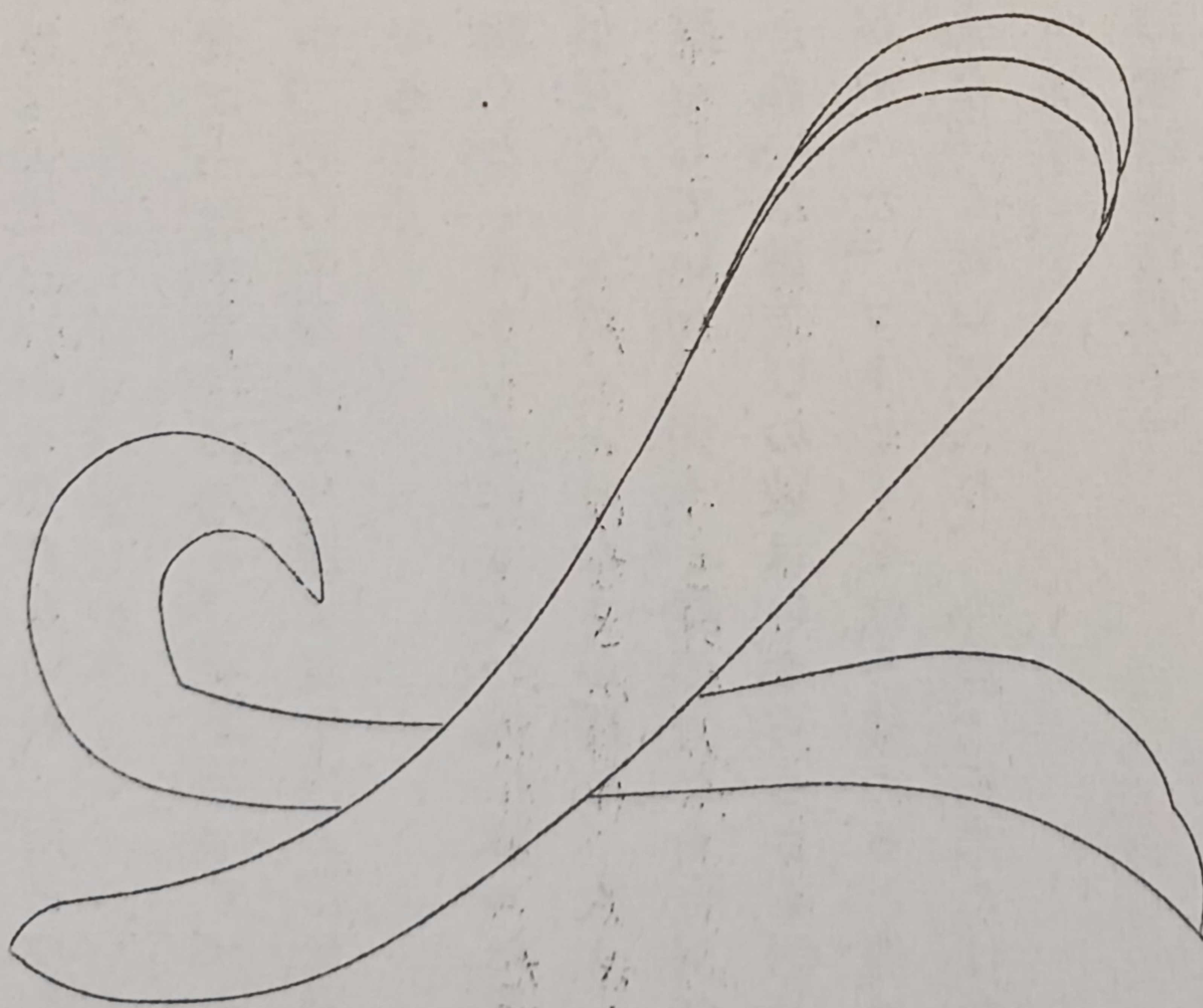
暫くすると、僅かの明るさを断つ影ばあった。照哉は視界の中にそれが入っても、壁に背をもたせたまゝ、動こうとし無かった。影は静かに忍び寄って来て、照哉の前に被い覆さった。熱い震えが体を通して染み渡って来る。ほんの小さなすゝり泣きが聞こえたが、何ももう分からなくなっていた。

順二の友人で彼の住まいに訪ねて来た富美男は、順二と大学で同期だった友人で、音楽関係のディレクトをしているが、暫々順二とは仕事の上で顔を合わせていた。

ふとした昔、学生の溜り場的喫茶店で二人は知り合いそれから恋の日々を重ねたが、別れる事ないまゝに付き合いをやめにした、二人だった。— 束縛の無い恋人達だった。

「ふっー。ああ、煙草がうまい。何か格別の味がするよ」

順二のアトリエ。部屋の隅に椅子が二脚と丸いテーブルが一つ、その側にベッドがある。
富美男は椅子にもたれている。片手に煙草を挟んで、もう片方の手をポケットへ突込んで、両足を伸ばして先で合わせている。
ベッドの中に照哉が埋まっている。そのベッドに順二が腰掛けて、煙草に火を付けていた。
「久し振りだな、君とは。……ふっ―。ああ味がいいよ―」
すでに陽は暮れて、室内には明りが輝いていた。
「何かと思ったよ、行成の電話で。でも、ビックリしたなぁ、君のような少年と知り合いになれるなんて。―気を悪くして無いだろうね？」
富美男はやさしく尋ねた。が、それは妙に大人としての少年の意識であった。
ベッドの中にいた照哉は半身を起こして、少し微笑んだ。
「良かったよ、君が全て分かってくれて」
順二が照哉の方を見て言った。
順二の手が照哉の片手を握り締めに、静かに動いた。燃える視線の中に、富美男の熱い吐息が近付く。煙草の残り香が部屋の中に漂っている。
トライアングルが軽快な音を響かせた。怖びえるように三本の金属は連鎖している。割り切れぬ数の中に相互の情を探し出す様子を見せながら……。

(了)

連載小説

中途半端な告白

（三）

陽　明　門

十二月二十三日、その日は朝から忙がしかった。年末も近づき後一週間もすれば会社も休みになり、今年の仕事は今年のうちに片付けなければならなかったし、忘年会の事とか、クリスマス・パーティの仕上げとか、一日中休みなく働いたのである。でも楽しみが一つあった。会のマスターが、若い子を、紹介してくれると云ってたので、七時にデート出来るのであった。今迄年上の人が多かったが、今日は若い子である。

Ｍ君と逢ったのは池袋にある喫茶店「白十字」であった。駅を降りて向い側に渡り、右へ行き左へ曲る角から二、三軒にある喫茶店である。

七時少し前に池袋駅で降りた俺は角のレコード店へ入る。時間つぶしに入ったのだが、そこで小林旭の「北帰行」と白根一男の「二十才の詩集」を買う。もう大分前にヒットした歌なので古いかも知れないが、何となく好きだったのである。

七時頃度、俺は「白十字」に入る。中は若いアベックで混んでいたが、席の中程に学生服に身を包んだＭ君が待っていたのである。

「Ｍ君？」と聞くと「Ｈさんでしょう」彼は整った顔立でわりと彫りが深く、まだあどけなさが残り、大きくはないが涼しい瞳をしていた。笑うと奥の方から金歯が見えたが、白いきれいな歯並びの彼はいやらしさを感じさせない清潔さがあった。コーヒーを飲み終えると俺はすぐ寮へ連れて来た。こたつに入り、今買って来たばかりのレコードをかけた。

「Ｈさん、この歌好きなの？」

「うん、古いけど好きだったので、君と逢う前に角のレコード店で買ったんだよ！」

「そう、顔を見てるとラテンが好きそうだけど」

「ラテンも好きだよ、トリオロス・パンチョスのＬＰ持ってるからかけようか？」

「僕ラテンも好きなんだよ」

「君、こう言う経験いつ頃からしたの？」

「会に入ってから」

「その人とまだ交際してるの？」
「いや、今は誰とも交際してないよ」
「本当の事を云うと、君と一回きりではなく、永く交際したいんだ」
「うん知ってる。マスターもそう言ってたし、僕もそう思ってるから」
ＬＰは「ラ・マラゲーニア」に初まり、もう最後の曲「ラ・パロマ」がかゝっていた。俺は早くこの子を抱しめて見たいと思っていた。でも彼の方も俺に好意を持ってたので、少しジラそうと思い話を続けた。
「君、明日早い？」
「うん、学校があるから」
「でも毎日行く訳じゃないんだろら？」
「三年になったら行かなくても良いけど、今一年だから毎日行ってるんだよ」
「そう、今日泊まって行けるんだろう？」
「泊まるつもりで来たんですよ？」
「そうか？　じゃあもう少し話そうか？」
「ええ」
「君クラブ何に入ってる？」
「吹奏楽、毎日ラッパを吹いてるよ」
「好きなの？」
「うん、将来、楽団のトランペット吹きになりたいんだ。有名になりたいんだ！」
「でもきびしいだろう？」
「僕はないけど、先輩の中には血を吐く人もいるよ」
彼はあるミッション系の大学である。地下鉄から見える学校は、ホモの多い所でも有名であった。
「うん、皆そう云うけど誰がそうだか解からない、そう云う人は夜、芝生で待ってるんだって、すると誰かが来るんだって、そんな事聞いた事があるけど」
「俺もそんな事聞いた、学生でなく一般の人も入れるんだろう？」
「自由に入れるからね」
そんな話をしてるうちに夜も深まって来た。
「今何時？　僕もう眠くなった」
彼の言葉に俺も眠くなって来た。彼の為にトランペットのムードミュージックをかけた。
若鮎のすべ／＼したなめらかな肌、あまり毛深くないすんなりとした、かもしかの様な脚、可愛いい腰、それに加え彼の積局的な態度、俺の無理な要求に答えてくれる、又相当経験してる様なテクニックではあるが、すれ

てる所がなく、素直な彼に俺はいかれてしまう。お互いに激しかったのか、一戦を終えるともう一時半である。俺は彼から離れて寝ると、俺のものをにぎりしめてるのである。浅い眠りに入った俺は満足であった。それは、今迄の不潔な関係とは対称的に思われたのである。

三時頃、俺はトイレに行きたくなり目がさめる。彼は俺のをにぎったまゝ、可愛いい顔をしてすや／＼眠っていた。その寝顔に接吻をすると静かにその手をよけて俺は起きた。彼は目がさめたらしく、俺が来ると「何処へ行ってたの？」と聞く。「トイレ」と、俺は答えて、優しく抱いてやると、しがみつくのである。

「今度また来てもいい？」

「いいよ！　なるべくなら土曜の夜の方がいいんだけどな？」と云うと。

「うんそうする。でも明日、静岡に行くから漸らく逢えないんだ」

「静岡って、君の田舎は静岡か？」

「うん、冬休みになるから家へ帰えるんだ」

「それじゃ、銭別でもやろうか？」

「いらないよ、別に、もう子供じゃないからね、お土産買って来てあげるよ！」

「悪いなぁ！」

「そんな事ないよ」

「いつ頃帰って来る？」

「まだ解らない、ゆっくりしてくるから」

「それじゃあ、漸らく君とも逢えないな？」

「そうだね、淋しくなるね」

「本当に淋しくなるな」

「でもHさん、もてるんでしょう？　マスターが云ってたよ！」

「もてるのは仕事だけでね……」

「なるべく早く来る様にするから、余り浮気しないでね？」

「浮気なんかしないよ、毎日君の来るのを待ってるから」

「でもＨＯＭＯの人は浮気っぽいんでしょう？」

「うん、一般的にそういうけど、俺は君の様にもてないから浮気も何もないよ！」

「ならいいんだけど……」

「君、遊んでないと云ってたけど、前に大分遊んだろう？」

「うん、一度だけ」

「そりゃあそうだよ、又全々遊んでない人はつまらない

しね？」
さっき少し眠っただけだっこが、目がさえて来る。
「あまり浮気しないでね？」と云う彼の言葉に、ある一種の情がわいてくる。もう一度可愛いがってやりたくなり、彼をひき寄せると接吻して、きつく抱きしめてやる。
「この会の事を何で知った？」と聞くと、「二週間前、雑誌で知った。」と云う、多分、風奇であろう。「風奇」と云う本がある事を俺は知らなかったが、前に逢ったTさんから教えてもらったのである。
彼は俺の股間に脚を入れて来た。彼のそこは硬くきれいなサーモン・ピンクであった。
「君の名前何て云うの？」
「会ではMと云ってるから、今の所Mにしておいて？」
と云う。
彼には未知のものがあった。それを一つずつ知るのも良いと思った。優しく口吻をし、首筋に顔を埋めた。甘い香りがしていた。彼のすべてをもう一度欲しいと思った。出来る事ならずっとこのまゝ、時が流れずに止まっていて欲しかった。少しずつ流れる時、せめてこの一分でも一秒でもいいから、永久に止って欲しかったのである。この青い果実を誰にも触れさせずに、少しずつ青い果実を咲かせてやりたかった。二人は燃えた。それは一回目よりも激しかった。
俺は又浅い眠りについた。彼を抱きしめながら。この時が俺にとって今迄で一番幸福だったかも知れない。
どの位たったであろうか、目覚まし時計のいやな音で目が覚める。七時三〇分である。彼はもう起きて学校へ行かなければならない。しかし俺は離したくなかった。昨夜知り合ったばかりなのに。それに漸らく逢えなくなると思えば、無性に淋しくなるのであった。彼が帰える後姿をいつまでも／＼見送っていた。でも銭別と一諸に俺のTEL番号と、本名を書いておいたので、彼が東京へ来たらすぐTELしてくれるだろうと思った。

（四）

クリスマスも終り、今年も終ろうとしてる時、会からTELが来て、大至急来てくれと云う。彼は一見土方風であった。コールボーイの様な事はもう二度としないと決めてた俺はマスターに頼まれて、いや／＼その人と目白の旅館で寝たのである。その様な俺の態度がわかったのか、休憩で三千のはずが、二千五百円しか払ってくれないのである。M君の事ばかり思ってた俺は「お金がな

たらいらないですよ？会へ千円持ってけばそれでいいから」と云うと「うっかりして持って来なかったんだ、ごめん！」と云ってる。次の日は大晦日であった。昨夜もらったお金をマスターの所へ持って行くと、

「悪いけど、今日も行ってくれないですか？」と云われる

「僕はもう、そんな事、いやなんです」

「まあ、そんな事云わず、もう頼まないから、今日だけ行って下さいよ？」と云う。

もういや気がさしてたが、仕方なく行く事にする。新宿松竹ピカデリーの前に指定された時間に行く。五十年輩の童顔の人であった。近くのホテルへ行き三千円もらい会へ千円持って行く。マスターは何やら正月料理を作っていた。

「十二時半頃、昔の友達が皆来るんだよ。良かったら遊んで行きませんか？Iさんも来るし」と云う。

Iさん、俺に色々教えてくれた人である。HOMOテクニックに付いて。しかし俺は別に逢いたいとも思わなかったのである。

この秋から冬にかけて、俺も色々遊んだものである。ほんの少しの間に全々と云って、女の子とはデートらしきものもせず、もっぱら男ばかりであった。彼らに一様にして云える事は、皆、孤独で淋しがり屋なのではないだろうか？そして又浮気っぽくて自分勝手な様に思われた。それにもまして、おしゃべりで、虚栄心が強く、見栄っ張りではなかろうか？それらは俺にも多少は当てはまる事は知ってる。だから俺は自分に忠実に生きて行こうと思うのであるが、それはなかなか難しい事にも思えた。

この様に一般社会から見るとアブノーマルの状態でこの年も過ぎて行ったのである。しかし俺は、後悔はしなかった。後悔するのだったら最初からこの世界に足を入れなければ良いのである。これの為悩む等と云う事は全々なかった。ただ恋愛で悩む事はあった。

新しい年を迎え、一月は会社も何かしら忙がしかった。俺は又一段とこの世界へエスカレートして行った。考え方も変り、大晦日の日にマスターと、色々話合ってから変ったのかもしれなかった。客をとってお金を貰うのもあたり前の様に思えた。好きでもない相手と寝て、お金をもらう、それがあとくされがなく、割切っていて、すっきり、するのではないかと思った。

そんな一月のある日、夜七時頃、俺はマスターからT

ＥＬを貰う。
「今日これからこっちへ来れますか？」
「はい、行けますよ！」
「じゃあ、なるべく早く来て下さい、紹介する人が待ってますから」
俺は行く、もし年輩の人だったら金をとってやろうと思ったのである。七時三〇分頃、会へ行くと年輩の人を紹介して貰う。彼は、Ｙと云い、四十二才、高校の教師であった。色が黒く長い顔、目がギラ／＼光り、それは頂度、ベトナム人の様であった。馬面の彼は、いやにすましていた。それが俺には少し骨稽であった。今迄逢った人は皆気さくであったが、何処と云って取得のない彼は、いやに取りすまし、おしゃれで見栄っ張りでもあった。
「食事した？」と話しかけて来る。
「いや、まだです」
「それじゃ、先に食事でもしましょうか？」
「はい」
「君は何が好き？」
「いや別に何でも食べますよ」
「ああそう、僕は洋食の方が好きだから、それでもいいね？」
「はい何でもいいです」
電車で新宿に行く事にする。駅を降りて、歌舞技町の方へ行く。この辺は、映画部、レストラン、喫茶店、ゲームコーナー等も多いが、旅館も多いのである。相変らず人通りが多く混雑していた。彼はＨＯＭＯ特有の、男の人で、顔が良いとか、スタイルが良い人が通れば、じっと見たり振り帰ったり、キョロ／＼忙がしく歩いていた。とある、きれいな、こじんまりしたレストランで彼は足を止めた。
「ここに入ろうか？」
「はい、きれいな店ですね？」
「何にする？」
「何でもいいですよ」
「肉は好きな方？」
「好きですよ」
店に入った。そこは食券を買ってから、席へ着くのである。彼が食券を買ってる間、俺は席に座って彼が来るのを待っていた。やがてウエートレスが運んで来たのはハンバーグであった。洋食が好きで、肉が好きな人がハンバーグなのである。少し情けない様な気もした。肉が

好きな人は大程、ステーキにするものである。ステーキでもハンバーグとは肉料理に入るのだろうか？おごってもらうのに、そんな贅沢は出来ないので、食べる事にする。でも腹が減ってたせいか美味かったのである。レストランを出ると喫茶店へ行き、コーヒーを飲む。次は旅館であった。俺はボーイしてる時は大程こんなコースであった。部屋に案内されて、女中がいなくなると、彼は俺に接吻しようとした。俺は余り好きでなかったので
「接吻て、した事がないから……」と云って断わる。
風呂に入ると彼はやせていた。同じやせていても、若い子の場合筋肉が付いてるので、何とも感じないが、中年のやせ過ぎた人は、余り感じ良いものではなかった。
風呂から出ると彼は鏡に向い顔にクリームを付けていた。彼は俺に、「〇〇〇〇をしてくれないか？」と云う。彼のあそこは、余り気持の良いものではなかった。黒ずんでいるのである。〇〇をしてやるとすぐ出してしまった。俺は起きて、風呂へ入った。そして体中をごし／＼石けんを付けて洗った。彼はもう着替えていたので、俺も早く着替えると「ダンス出来る？」と云う。
「ワルツやタンゴは出来ないけど、他のものだったら出来ますよ」
「ダンスホールへよく行くの？」
「うん、昨日、会社の友達と飯田橋松竹で踊って来た」
「ダンスしようか？」
「でもジルバが一番好きだから、こゝじゃ、無理でしょう？」
「君とタンゴかワルツを踊りたいなあ？」
「でも難しいでしょう？」
「難かしいかも知れないなあ」
「そうでしょう？」
「今度、いつ逢える？」
「別に、僕はいつでもいいですよ」
「じゃあ、今度の日曜日逢おうか？」
「はい、いいですよ」
「田端駅知ってるだろう？」
「はい、あの駅前に噴水のある所でしょう」
「日曜日、午后一時に噴水の前で待ってるからね」
「日曜日、午後一時ですね？」
夜も遅くなったので俺は帰って来る。
上野駅に来た時である。電車は割とすいていた。俺は中間のドアの所に立って、外を見ていた。後に人の気配がして、窓ガラス越しに見ると、あのIさんであった。

彼は上野の家具センターに勤めていた事は知っているがまさか電車の中で逢うとは思ってなかったのである。俺は知らん振りして外を見てると「そ・の・ご・げ・ん・き？」と、耳元でささやきながら吐息をかけて来たのである。

「これから何処へ行くの？」と聞くと、

「家に帰る所だよ」と云う、彼のアパートは大久保である。上野だと遠廻りになるのではないかと思う。余り変わらないが、「こっちだと遠くないの？」と聞くと「いや、いつもこっちを廻って帰るから」

「でも田端で乗換えなければならないでしょう？これ山手線じゃなく、京浜東北線だもの？」

「山手線が来なかったから乗ってしまったんだ」

「あゝそう」

「久し振りだね？…..君、相変らず遊んでるんだろう？マスターに聞いたら、何も云わなかったんだけど……」

「大晦日に会へ行ったんでしょう？」

「うん、皆集まったからね？　でも君来なかったね？マスターが来ると云ってたから…..。行ったらもう帰ったと云ってたよ。久し振りに逢いたかったのに。」

「そう、でもマスターが忙がしそうだったから帰って来たの、だったら待ってれば良かったね」

「そうだよ」

「でも、もう結婚するんでしょう？」

「うん、許嫁がいて、近いうちに来るんだよ、そしたらもう遊べなくなるしね」

「今日はこれからIさんの所へ遊びに行ってもいいですか？」

「いいよ、泊っても、そのかわり、朝が早いけどね」

俺は彼の所へ泊まる事にする。初めて、俺に悦びを教えてくれた人である。

（五）

日曜日、午后一時、気が進まないまゝ、俺はYさんと逢う。俺は前と同様、Yさんが好きになれなかった。喫茶店に入り、彼が、若い子が好きだと云う事を色々聞く彼の話によると、俺に逢う前迄、色白の可愛い男の子と交際してたらしい。その男の子はアパートに住んでいたので、彼は仕事を終ると、野菜とか肉とか、魚を買って行き、二人で食事を作って食べが家へ帰るらしかった。週二、三回男の子の所へ行っては、楽しい一時を過ごしていたが、男の子が急に田舎から手紙が来て帰ってしま

ったのだ験云う。それで、「もし君が、アパートに住んで見たいと思うんだったら、その様にしてもいいし。」とも云った。しかし俺は、その様な生活は出来なかったし、又興味もなかったのである。寮にいる方が友達もいて楽しかった。もしも、そうすると友達も連れて来る事が、出来なくなるのではないかと思った。彼に決って毎日いくらかの金を貰い、生活するのも良いが、会社勤務をしてる以上、色々な弊害も出て来るであろう。女に例えれば、俺は二号であり、彼はパトロンであった。今迄の自分中心から、彼中心の生活に考えなければならなくなるのでは、ないだろうか？まだ若かった俺は、自由が奪われる事に対して我慢が出来なかった。又抵抗も感じのである。

一月も、もう二十日過ぎてるのに、M君がら何の連絡もなかった。内心穏やかでなかった。とはいえ、俺も遊ぶのだから、彼も遊ぶのは当然なのである。これが、悲しい性とも云うものであろうか？

俺はとうとう会へTELして見た。

「M君から何か連絡がありましたか？」

「M君ねえ……」マスターは考えてた。何でもいい連絡があれば良いと心で思った。

「M君、今、勉強が忙がしいと云ってTELがありました。そのうちTELが来たら伝えておきますからね。それはそうと、今日誰か紹介して貰いたいと云う人がいるんだけど逢ってくれますか？」

その人は英語がとても上手なHさんであったが、俺はすぐ忘れてしまった。

それから二、三日して、俺は会へTELした。M君の事で。しかしまだ何の連絡もなかった。その時紹介してもらったのが、一つ年上のMI君だった。それは文通であった。この時から会は名前を変え、Kとなったのである。

MI君と文通して二度目、池袋の指定された所で彼と逢った。目が大きく短髪で、色が黒く、お洒落のスポーツマンタイプであった。お茶を飲んだだけで別れたのだが、マスターが彼について色々俺に聞く。変に思い問い返してみると、MI君は以前俺が逢ったIさんと交際してた人だという。

一月も終り二月に入ってもM君から、何の連絡もなかった。東京にいる事はいるらしいのだが。その間俺はワンステップで、何人かの人と会った。俺の場合、ワンステップと云うのは、お金を貰う相手だった。

二月の半ば頃、俺はＭＩ君に逢った。彼は代々木の津田塾の近くに住んでいた。アパートには所狭しとばかりに、沢山家具が置いてあった。沖縄から来たと云う彼は、俺にコーヒーを入れてくれた。

「土曜日なのに悪いですね？　何処かへ遊びに行く予定じゃなかったんですか？」と、俺が聞くと、「別に、何処へ行っても面白くないから、ここでレコードを聞いてた方が、楽しくていいよ」と云う。

「どんなのが好きなんですか？」

「オペラ」

「すごいですね？　僕なんか学生時代に聞いた事があるけど、何となくなじめなかったんで、全然分らないですよ？」

「そんな難しいものじゃないですよ、今かけるから……」

それは「椿姫」であった。

（六）

Ｍ君を半ばあきらめる様になった俺は、マスターにＹ君を紹介してもらう。

逢った所は新宿の区役所通りに近い喫茶店「シロー」で会った。彼は背が高く、にきびがまだ、残っている美術大学の学生であった。フード付のコートは、体に似ず可愛いく、又それよりも可愛い目をしていた。大柄な彼は又鼻にかかった少し女性的なふんいきがあったが、甘えん坊の様な話し方が俺の心をとらえてしまった。やわらかいそれでいて、大きな体付は妙にも覚えたが、悪い印象は与えなかった。俺は少しくすぐったく感じられた。

「シロー」のマスターがＨＯＭＯで、ボーイの良いのが入ると、皆、彼によってＨＯＭＯ化するとか、二十四時間営業なので、朝方になるとプロが集まって来る所だとか、彼に教えてもらう。

ＰＭ十時頃そこを出て「蘭屋」へ行く事にする。この時俺は初めてゲーバーなるものを知ったのである。ヤングから中年迄、色々な人が沢山いて、面白そうに話していた。カウンターなので皆の顔が、一面に見渡せるのである。二人が入って行くと客達は一斉に俺達を見たのである。彼は前に何回か来てるが、俺は初めてなので、恥かしさの為、帰ろうとすると、そこのマスターらしい人が「可愛子ちゃん、お二人、ここへ座りなさいよ！」と席をあけてくれたのである。「こういう所、初めてなので、何となく気まりが悪くて……」と云うと「そんな事ないわよ、早くいらっしゃい？」と云う。

そこへ一時間位いたが、隣の人、向うの人と、俺達は歓迎されて、ビール・フィズを色々と御馳走になり、すごくモテたのである。客の一人が「ここに来る人は珍らしがり屋だから、君の様に初めての人はモテるんだよ！」と云う。

もう帰らなければならないと思ってるとY君が、「今日、これからどうする？　門限は何時？」と云う

「門限はないけど、明日仕事だしそれに、もう大分酔ってるから帰ろうかと思って」

「そう、又逢いましょうね？　家はどっちの方？」

「王子の方、君は？」

「武蔵野の方、遠いね、君と僕……」

「そうだね、君は朝早くないの？」

「僕はいつも、昼頃迄寝てるよ」

「いいね。学校は？」

「行く時もあるし、行かない時もあるし」

「気楽なんだね？」

「まあ、でも何かある時は忙しいけどね。」

彼と友達になってから俺はゲーバーを知り、チャンスがあったら行きたいと思った。

次の日、俺はTA君と逢った。若い子で、すれてる所がなく、男っぽい感じのする子であった。彼を寮へ連れて来る。俺がいままで逢った人と彼は全部逢ってるらしい。正直な彼は逢った人の名前を全部俺に教えてくれる。その中には俺が口喧嘩をしたモテルの子もいた。そのモテルの子とは、Y君が、交際してるとかである。ゲーバーにもよく行くらしく色々知っていた。

三月に入りY君からTELが来た。

「これから上野へ行こうと思ってるんだけど、出て来る？」

「うん、どうせ何もする事がないから行くよ」

「上野だと君も近くていいでしょう？　そう思って上野のバンチャンに行こうと思って、初めてだけど」

「バンチャンって、ゲーバー？」

「うん、今初めてだけど、本当は今上野にいるんだよ、何分位で来れる？」

「二〇分位で行ける」

「じゃ、二〇分後に正面の銅像の所にいるから、なるべく早く来てね？」

俺が上野に行く間、彼はバンチャンを捜したらしく、「地下にあるから早く行こう」と、云う。

その店は上野地下道の京成電車へ行く方向で、ゲーバ

ーが沢山並んでいた。藤浪、三四郎、メトロ等、その中でもパンチャンは、若い子が多く行く所らしかった。カウンターとボックスがあり、俺達はカウンターの方へ座る事にした。店の上は電車が走ってる為、騒音がして、レコードが切れる時は一層騒がしかった。それでも皆、気さくな人達ばかりで、東北地方の人が多いせいか、言葉も東北なまりで、なじめる店であった。そこでも俺達はモテた。

しかし困った事が起きたのである。

それは、俺の働いてる会社に出入りする、宣伝の仕事をしてる人とパンチャンを出る時、バッタリ会ったのである。彼は京成電車の方から国電に向う途中で、俺を見ると、「やあ？　こんな所で何してるんだ、もう遅いから早く帰えれよ？」と過ぎ去って行く。

「君の知ってる人？」

「うん、会社へよく来る人、困ったなあ？　明日も来るんだよ！」

「こういう所だと知らないんでしょう？」

「奥さんも、子供もいるから多分知らないだろうけど、結婚してても、ＨＯＭＯの人は沢山いるし、俺をいつも可愛がってくれるんだよ、飲みに行ったり、映画を見に行ったり、あの人はトルコ風呂にも連れてってくれたんだよ」

「じゃ、君が好きなんじゃないの？　ＨＯＭＯでなくても、ＨＯＭＯであっても……」

次の日、思ってた通り俺は彼に云われる。

「Ｔちゃん、あそこに誰か好きな人でもいるのか？」

「いや別に、友達が行こうって云ったから行ったんだ」

「そうか、女のいるバーと違って、話題も豊富だし、安いからな？」

その日はそれで終ったがその次の日又、会社で、彼が俺を呼ぶ、

「Ｔちゃん、今度、うちの仕事を担当してくれないか、もし何だったら、社長に話すけど、うちの会社へ入ってもいいんだ。給料は勿論増すから」

「でも、考えても見なかった事だし、少し、考えなければ、課長や先輩に相談しなければならないし、僕がやめたら、今の仕事する人がいなくなるし……」

「それは、社長と相談して決めるよ、今、寮にいるんだろう？　そしたらアパートの手も考えておくし。」

「ま？　考えて見ます」

二、三日して俺は、会社の会議室へ呼ばれたのである。

うちの社長、部長、課長、それに彼の会社の社長、部長彼と俺を入れて七人であった。

　話はこうである。俺が、この会社に入って三年である昨年の末頃からこの話が出ていたのだが、それは内々で決めてたらしく、会社としては手離したくないのだが、本人次第だとの事で、のび／＼になってたとの事である。それが、急に彼がいい出したので、この際、俺の気持をはっきりさせ、その考えによって決めるとの事であった。もし、俺がその会社へ行くのであれば、勿論、寮を出てアパートを借りてやる。その費用は勿論出すが、これは本人の問題もあるが、会社としての問題もある。他社に引き抜かれると云う事はそれだけの何かを持ってるから引き抜かれるのだが、会社としても、これからと云う時に引き抜かれては困ると云うのである。

だから、今迄通りうちの会社にいて、その仕事を担当すれば良いのではないかとも云うのである。しかし、とに角俺を引き抜きたいらしいのである。

　たかが、俺一人の為、こんな事になるとは、思っていなかった。

　それにしても、彼が、強引に俺を引き抜く影には何かあるのではないかと思った。仕事の事よりもゲーバーで俺が出て来るのを見て、その関係もあるのではないかと思った。

　仕事の為引き抜くのなら良いが、ゲーバーに出入りするのを見て引き抜くなら問題である。俺はゲイに生きるか平凡に生きるか、そんな事、考えてもみなかった。ゲイに生きるのであれば、その話は別である。好きな仕事をして、アパート代は出してもらい、当り前に給料をくれる、それは好条件であった。しかし、俺はゲイはあくまで趣味として考えたかったのである。

※　※　※　※　※

相の回想

ぼくのポエム

蒼い生き物

接吻

小学校の校庭
飛び上がってやっと届く
体操用の鉄棒の所で
「ネェ、又キスごっこしようか？」
僕は皆んなに言いました。
これから飛びつこうとしていた
夏代ちゃんは
ふと嫌そうな顔をしましたが
ノリちゃんと
その妹の純子ちゃんが
「うん、やろう！」
そう言ったので
夏代ちゃんは
「・・・・じゃあ、ちよっとだけネ」
そう言ってしまいました。
夕方近くの校庭。
家へ帰り
又学校へ遊びに来た子供達の
楽しそうな声が
あちこちで聞こえます。

夏代ちゃんは
僕ん家の
斜め後の公団住宅の一人っ子
年上だけど
何でも僕の言う事は聞きます。
ノリちゃんと純子ちゃんは
隣のお金持ちなお百姓さん家の子。
いつか僕ん家の縁側でやって遊んだ
キスごっこを
今ここで又やるのです。
明るい光の中で
スリル満点です。
僕は
夏代ちゃんの唇に
自分の唇を尖がらして
押しつけました。
柔らかな弾力感が
割と気持ち良いです。
でも何となく汚ない感じがしました。

僕達が終ると
夏代ちゃんとノリちゃんがしました。
夏代ちゃんは
ノリちゃんとやりたくなかったらしく
ノリちゃんの唇の
少し脇のほゝにしました。
し終ると夏代ちゃんは
キスごっこが嫌らしく
鉄棒に飛びつきました。
夏代ちゃんの体が
僕達の目の上で
ブランブランと揺れます。
僕は
何となく愉快になって
赤い色をした空を
暫く見ていました。

交響詩「四月に」

I

二学期になって転校して来た
和彦君を
好きになってしまいました。
生まれて初めて
恋心と言うものを知りました。

夕焼けの中。
新しく入って来た和彦君の家へ
道草を兼ねて
級友達と連れだって行きます。
茜色を照返した雲が
いく筋も尾を引いてます。
僕は
その夕焼けの合唱の中で
和彦君を見ました。
白い面持ちの微笑みが
僕の顔の中へ飛び込んで来ます。
子供達のお喋りは
屈託のない
天使のソプラノみたいです。

II

親友の和之君と
土曜日の午後
和彦君の家を訪ねます。
彼も和彦君に夢中らしいです。
ところが

余り行った事がない街なので
一度案内されただけでは
記憶不充分
仕方なしに
彼と駅の方へトボトボ歩き出しました。
そこへ
タクシーが通り掛かり
生まれて初めて
手を上げて
車を止めました。
優しい運転手さんで
熱心に
細い通りから通りへと
表札を見てくれます。
でも
名字だけでは
なかなか分からないし
新しく引越して来た家なら尚更
仕方なく
何度もお札を言って
車を降りました。
二人で
又狭い通りを渡り歩きます。
いいかげん嫌になって来ましたが

彼の
美しい顔を思い出したら
疲れも何処かへ飛んで行きそうでした。
すると
ひょいとした拍子
角をちょっと曲がって
人気のない通りへ入った時
バッタリと
買物帰りの
彼と彼の母親に会いました。
嬉しくて
すぐ二人に
家へ行きたいと思ったが……
分からなくなってしまった事を
告げました。
そうすると
母親も
自分の息子に
新しい友達ができたと喜び
家へ案内してくれました。
お礼におこしを貰い
彼の家の庭で
三人で食べました。
幸せと言う文字を

肌で感じていました。
楽しい一日でした。
幸せを追い求める歓び……。
幸せを見つけた歓び……。
自分の何かを
無中になって捜し
それを見つけるまでが
真の幸せなんだと
小さいながらも
考えた一日でした。
だから
帰り道大雨に降られて
生まれて初めて
真暗になって帰っても
まだまだ
気持ちは高振っていました。

III

お爺さんが
田舎から出て来て
隣の町の遊園地へ
連れてってくれると言うのに
僕は
たいして嬉しくもなく
寝床の中で朝寝坊をしています。
「今日は体がだるい……」
そう愚図って
蒲団の中へもぐっています。
でも
とっくに目は開いていたし
何処も痛くもないのです。
だけど
僕は分かっていました。
こんな
妙に辛い気持ちになったのは
あの和彦君のせいなのだと……。
胸の中に
しみじみとした思いがありながら
心配するような
ハラハラとした気持ちがあり
それが
こんな
泣きたいような
ふっと笑いたいような
訳の分からぬ思いにさせるのでと
気づいていました。
寝床の中のぬくもりが
彼の

優しい面影を思い出させ
そっと
自分を抱き締めました。
誰に言っても
分かって貰えそうにない出来事に
悲しくなって
僕は
瞳が熱くなりました。

ソプラノと回転木馬

放課後
薄暗くなり始めた
下駄箱の前の洗い場で
友達のタクちゃんと
恵ちゃん
音楽の時間に習った歌を
斉唱していました。
恵ちゃんは
僕のボーイ・ソプラノが嫌いで
変声期になると
高い声の人程低い大人の声になると
僕によく言いますが

僕は
「ちっとも構い」
いつも決まってそう言っておきます。
今も
歌い終ってから
恵ちゃんがそれを言いました。
どうも
僕が
合唱部に選ばれたのが
気に入らないらしいのです。
「女の子の声みたいだナ」
ふいにタクちゃんが言いました。
僕は
少し嫌な気がしましたが
「僕サァ、君が女の子だったら
きっと好きになっていたよ」
続けて
僕の顔を見ながら
真面目に言ったので
前の言葉を忘れる程
ビックリしました。
イタズラッ子で
しんみりした事を
余り言わない子だったからです。

「・・・僕もきっとそうだよ」
恵ちゃんも
小さく言いました。
僕は
何となく
嬉しいような
恥ずかしいような気持ちになり
何も言えず
顔を赤くしただけでした。
「きっと、ラブレタァか何か
　書いて送っていたかも知れない」
タクちゃんが
尚も真剣に言ったので
僕も
洗い場の周りの
コンクリートのふちを
小さくハミングしながら
廻りました。
そうしたら
彼らも
僕の後について
廻りました。
クルクル廻る
回転木馬のように
僕の小さな胸は
歓びで
弾んでいました。

クラス・メイト

何故か
一緒に帰ろうと
僕を誘ってくれる彼。
別に
これと言って
親しい間柄ではないのに
帰り道は大体一緒
降りる駅が同じだから？
小学校が同じだから？
―分からない。
でも
満員電車で
決まって席を取って
坐わらしてくれる彼。
そして
必らず僕の前に立って
両足で

僕の片足を挾んでくれる
熱い熱い彼。
サージの布を通して感じる
彼の脚の肉感触。
それなのに
彼は
いつも
僕に
嫌味を言って
辛い思いをさせる。
頭の良い彼。
大きい体の彼。
余り美男子でない彼。
近づこうとする気持ちが
鋭い嫌味で崩される。
全てに劣る弱い僕を
どうして責めるの？
君の
一身上の秘密を
そっと教えてくれたのに
何故か
恐い恐い彼。
君は
果して僕が好きなのだろうか？

幼い割に
大きなブリーフをはく彼。
脚の毛深い彼。
君の部屋に連れてって
僕の前で
平気でズボンを取り変える彼。
君は誰を愛しているの？
理科の第二分野の時間
生殖器の講義になると
ニヤニヤしている彼。
早熟な彼。
君は誰を愛しているの？
そっと
君の家の庭で
性の本を見せてくれる彼。
思い出が
僕の
或時期を埋めていて
何故か
淋しく甘く
そして忘れたい気にさせる彼の事。
もし
街角で会ったら
又僕に

思い出をしてくれる?

たて琴

三学期に転校して
余り学校に慣れぬまま
上級生を迎えました。
そして
一学期の初め頃
彼の存在に気づいたのです。
S君……。
名前を言うのも狂おしい
S君……。
来年は受験だと言うのに
僕を翻ろうした彼なのです。
ハンサムではないけど
知性と
オシャレのセンスとから来る
初々しさが
僕を
捕えて離さないのです。
クラスが違い
休み時間にしか見る事のできない
彼だけど
彼が
同じ校内にいると思っただけで
僕の胸は
張り裂ける情熱で埋まるのです。
彼は
メランコリックと言う感情を
いつも僕に与えて
夢の中にいるのです。
S君……。
君の家のある方を
そっと屋根に登って
涙する
近頃の僕です。
S君……。
僕の顔だけでも
覚えて欲しい……。
S君……
S君
S君
S君S君S君S君
S君S君
—僕の
この思いを

救って下さい！

出逢い

映画を見ての帰り
マーケットの中の
大きな本屋さんに
入りました。
ブラブラと歩いて見てから
文学の所で
暫く立ち読みしていると
「今、何時？」
後から声が聞こえました。
振り返ると
濃紺のジャンパァに
同じきれのネックスの
目の細い少年が立っていました。
片方の手をズボンのポケットに入れて
モゾモゾさせています。
素足にゴム草履をはいて
余り感じの良い風体ではありません。
「……三時十五分前」
ドキドキしながら
僕は答えました。
でも
少年は
まだ何か言いたそうに
片手を
並んでいるたくさんの本に掛け
体をもたらせ
「――君とどっかで逢った事ない？」
聞きました。
頭の中で
ドラが鳴り
足が震え始めました。
「――中野に行った事ある？」
僕は
それでも
さり気ないように
「……ない」
そう答えました。
でも
少年は
僕の前から遠ざかりません。
「――違ったかなァ」
「十日程前」
「中野駅前の広場だよ」

僕の
熱くなった頭の中に飛び込んで
スリルを感じさせます。
僕は
怖びえた小犬のように
それでも楽しみながら
少年の問いに答えます。
「ー行った事ないよ」

「でも、逢った事あるかな？」
「変ったカッコーしてるネ。
レーサーみたいだナ」
「え？　何処か行かないかって？
ー別に、構わないよ」
「ー恋人いるかって？　フフ……
ご想像にお任せします……」

＜了＞

白い旅立ち

岐阜　三二七二番　足立

真夜中、午前〇時、苦しみの一日は終る。まるで
冬の浜べのように、お前のいない部屋は広すぎる。

お前の座ったこの椅子も
お前の好きなレコードも
お前の眠ったこのベッドも
それらが、今も俺を苦しめる

いったい、お前は、どこへ行ってしまったのだ。

朝日は窓にのぼるとも、青い鳥は、再び帰らない。
人の幸せそうな語い、大きな笑顔、それらはす
べて、俺の心にうつろにひびき、俺の前を通りす
ぎる。

二人ですごした、ロッヂの赤い屋根
二人でえがいた、白いシュプール
二人でかなでた、ギターの音色
それらが、今も俺に呼びかける

お前をうばったあの山の、白く輝く夢の世界で、
俺は旅立つ、まだ見ぬ国へ。

再会

広島県　二八七四生

祐介は二男一女の親として表面家族円満愛妻家としての日々の生活ではあるが学生時代のホモの事を秘めたまま結婚した彼は妻のひた向の愛情の為今は三児の父親として良きパパとして生きている。長男はそろ／＼思春期に至る中学三年ではあるが、彼、祐介は独身時代より女性に興味のない男性で心の底にはいつも人には云えぬ寂しい寒い風が吹いて男性恋しい同性恋しいその気持ちがいつも炎の様に燃えている。ホモの人の多数の人々が蝶の様に花を求め次々と相手を探し求めるのが常だけれど祐介は八年前愛し合った久男の事が忘れられずホモの世界に珍らしい純情さで彼一人を守り浮気もせず遠く離れた久男と唯文通により苦しい毎日の凡々の情を通じていた久男も今は結婚し二人の子の父となっているが祐介との文通はいつまでも／＼独身の気持ちで愛し合った昔の思い出が綴られていた。只いつも／＼逢い度い／＼兄さんのあの裸のたくましい腕に抱かれて愛して欲しい。舌の抜ける様なキッスの味、美味しい／＼あのミルクの味いつ実現するか早くその日の来る事を祈っているとか、祐介としても昔の楽しかった夢を追い月に幾度か恋しい久男の写真を前に置いて一人でマスタベーションで楽しむ事など自分と久男の○○の画など書いて手紙で送り淋しい気持ちをまぎらせていた。仙台の久男へ便りを書いたのは一ケ月も前であった、久男から返事が来た。

兄さんの事一日も忘れた事はない。あの大きく太い兄さん○を握りしめ美味しいミルクを飲みたい。熱い思い出の数々が書かれ、儀式的に結婚し父親となっていても結婚生活の不満の数々が並べ立てゝあった。それは祐介にも良く理解された。彼も同じ思いで暮しているから、祐介自身青年ではなく、もう中年男になっている。海水浴場で、町かどで、映画で、テレビで好みの男性の肢体は輝くばかり戦慄で祐介を悩ませた。

妻を抱く○にさへ幻影のように久男の肢体が身をくねり圧倒的な迫真力で祐介を支配したその幻影に祐介は取すがり自分を燃焼させた。久男からの返事で一ケ月後に必ず兄さんの所へ行きます。三日間滞在するとの返事で祐介は独身時代の若やいだ気分を押へられなかった。その意欲は仕事の面にまで発揮されて、それはプラスになって気力がみなぎり投げやりで怠惰な処理をしなくなった。

その充実した仕事振りに社内の人々も目を見張った。
「近頃馬鹿に張り切っているじゃないか」皮肉めいた同僚の言葉にも真実を語る事は出来ない。久男が下関の駅に降り立ったのは初秋の十月の初めの土曜日であった。駅のホームまで祐介は出迎へた。幾年振りの再会であった。
「やあ」さりげない祐介の言葉にも熱い感動があった。
「よく来てくれたネ」祐介は久男のバックを持った手を握りしめ見上げた目に深い情愛がこもっていた。そのまよりそって改札口まで二人は何も云はなかったが祐介は青年らしい久男の横顔を無量の思いでながめていた。
久男との知り会いは久男が大学二年の頃喫茶店で会った。やはらかい髪を波うたせ細面の色白で切長い黒いひとみ引締った口元一目で強く引きつけられてしまった。それは二人がホモである事を確認しあってから会ったのではないことだ。Aと云う独身の男優がそれもホモだと噂のスターが二人を結びつけたのだからそれらしいふんいきはあるのだが、お互い云い出しにくく仲々そんな話題に切り出せなかった。
「おじさんも美男子ですね、女の人がさわぐでしょう」と久男の方から云って来た。
「いや僕は女性には興味がないのでね」「本当ですか？‥‥それでは僕と同じだ」「ホ‥‥君もかね、この様な気持ちは僕丈かと思っていたが君もそうかそれは不思議など縁だねよろしく頼む」「いや僕の方こそ」
「でもおじさんは結婚しているのでしょうどうしてですか‥‥‥」「おい／＼おじさんはひどいよまだ若い気持ちだぜ」「失礼しました。」「いやあやまらなくてもいいがネ、結婚は周囲の人達がやかましくてね、世の中の常として結婚した丈だよ、でも本当に女を愛せないんだよ」
「そうですか、でも僕おじさんの様な人が好きだナ清潔な感じで‥‥‥ごめんなさい、おじさんでは悪かったですネ‥‥‥どの様に云ったらよいんですかネ」
「兄さんではどうだい」「そうですね、兄さんと云っても良いんですか」「とても嬉しいよ、ところで君の名は何と言うのかねとてもいい顔しているね‥‥‥身長も七〇位あるんだろう」「エエ一米七〇です。名前ですか、岩間久男です、よろしく」案ずるより生は安しと云うかその夜二人は酒場で時間を過し明日は日曜日なので祐介は家の方へマージャンで友達の家で今夜は帰れないからと電話しておいて久男の下宿へ立寄った。「君は可愛いいネ」と甘くさゝやくを合図に久男の方から祐介の胸に

顔を埋め「兄さんだってステキだ、大好きです」としがみついて来た。簡単に障害を乗り越へる事が出来た。その夜の二人はそれこそ命のつきるまでもと激しい炎の様に燃え上った。朝になり昼になっても愛欲の練獄に身を焼いた若い久男は二回も三回も精をやり今はすゝかり疲れ果てゝしまった。

祐介が妻との生活にあきらめ得られたのも久男との充実した愛の生活があったからだとも云へる。久男は祐介の理想の青年であった、こうして再会した二人はいつか妻も子もある身の上であった。

前日旅館を予約してあったので二人はそこに落着いた。秋の日は早く暮れ、五時だと云うのにもう室内は暗かった。二人は早速風呂に入った。

「そのまゝそこに立って見てくれないか……君をみたいんだ」

裸身となった久男に祐介はそう云った。幾年振りに見る久男のからだだった。若いからだを祐介の指も手も知っていた。祐介の愛撫が熟させた果実であった、妻との夜のしじまの中で熱くよみがへるのは久男のなめらかな肌ではなかったか……今旅館でやっと二人になった時、二人の間には長年の空白が気恥かしい思いで流れた。……会話もとぎれがちであった……そのよどんだ感情をふりきる様に「汗を流しましょうか」と云い出したのは久男であった。シャツやズボンを脱ぎ捨てた久男のからだはよく日焼して胸に男盛りが盛り上っていた。服を着ている青年らしい表情が消へて男盛りの充実した裸身が祐介には新鮮な美しさに由はれた「立つの何だか恥かしいな……僕の身体なんか見あきているだろうに……」恥らう顔にはあのなつかしい青年らしさが浮かぶその顔にはあのなつかしい青年らしさが浮かぶ、その顔は祐介の忘れた事のない顔だった。そう恥らいながらも久男はすっくりと祐介の前に立ち身に付けた最後のものも脱ぎすてた、かって祐介の熱い指先で成熟させた久男の〇〇は久男の両手でおゝはれながらも幾年の抑圧を伝へるかのように、おゝしく息づいていた。そして祐介にももん／＼の日々がいま激しく欲望となってほとばしった。

「兄さん逢いたかった……夕べなんかうれしくて眠れなかった……」

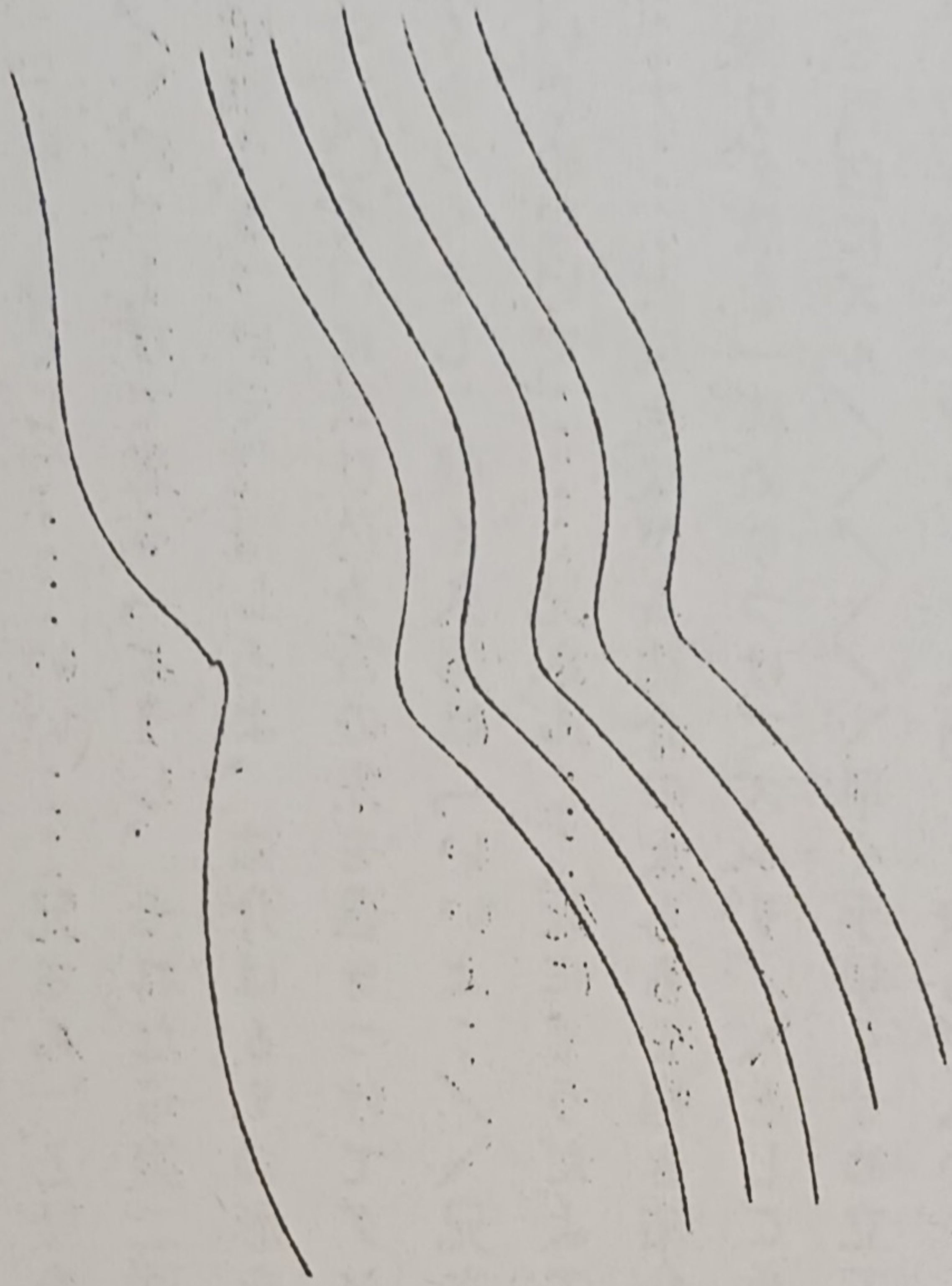
「久男…僕だって…うれしくて…」二人は裸のまゝ固く抱き合い唇を重ねた。ウウン…息のつまる思いであった。二人の息づいた〇は固くそり返りお互の下腹につきさす様にコリ／＼とあたる……やっとの事唇を

離した祐介は、そこにしゃがみ込んで久男の○を右手に握り二、三回ゆっくりしごいて口の中に一気に根元まで吸い込んだ舌の先と唇とで軽くきつくしごく毎に久男が泣きそうな声で兄さん／＼と呼ぶ、祐介はもう夢中になり口をはなすと、今度は手にダ液を一杯ぬり久男の○をズルリ／＼としごくそのたび毎に玉水がだら／＼と流れダ液と一諸になり久男はもう泣き出した。やめて／＼兄さん‥‥ア、、‥行くよ‥‥行く／＼兄さんの声も共に強い勢いで射精してしまった‥‥ア、、としばらくガックリとしていたが今度は兄さんのを飲ませて‥‥祐介が立上がると久男がシャがみこむ、久男は祐介の○○を右手に握りア、、良い気持ちだ、兄さん、兄さんのこの大物見たくて／＼ア、夢の様だとグン／＼しごく兄さんいきそうになったら教えてネ‥‥と口を開けて○○を吸い込みグン／＼しごいて兄さんの大きいから口一杯になるネ、とても美味しいよと云いながら右手で○○の皮を根元まで引張り○○に舌を巻きつけなめ廻す、祐介は天国に遊ぶ心地してウン／＼溜息つきながら久男の頭をしっかりかゝえ込んで横になってしまった。久男は口を離さず吸い込み／＼右手で○○をグン／＼ズル／＼としごく祐介の頭を自分の左手で枕をさせ唇を重ね舌を口の中に差入れてグン／＼吸い込む右手は休まづ○○を握り人差指と親指で○○をズル／＼とせめる。なんでたまろう祐介は腰を振り立て久男々々いきそうだいくよ‥‥待っていたと久男はすわり直し祐介の○○の○○を口に吸い右手でグン／＼しごくので祐介はア、、‥いく‥‥‥おびただしい量の涎をはき出した久男はさも美味しそうに飲み干してしまいまだ息づいてビク／＼している祐介の○○を横にしたりおこしたりしてながめ／＼次第にほれかかって来た○○を又口の中に吸込んだり出したり「兄さんのいつ見ても立派だ○○ががん首がマツタケの様に開いていてすばらしいア、、と又吸込む「久男少し休もう湯につかってから今度はベットへ行こう」久男をうながし湯舟に沈む久男は湯桶で二三杯ザッと湯を体にかけて流しタオルで拭きながら「兄さん先にベットへ行きますすぐ来て下さいね」祐介も急いで風呂から上り裸のまゝベットへ来た。「兄さん抱いて下さい」「ア、いいとも今日の日を随分待っていたんだもの」二人は上になり下になり唇を重ね舌の抜ける様に吸いつ吸はれつ下の股の方でも又息づいて固くなった○○がコリ／＼と当る久男は若い‥‥‥「僕もうたまらないよ‥‥‥早く‥‥兄さん‥‥早くやって‥‥‥‥‥」祐介は久男の○○を握り

石の様に固くなっているのをこすり／＼手をはなし「久男今少し我慢しろよ…ナ…こうしてキッスして」と唇を重ネる唇を吸い舌を吸い顔、耳と次々にキッスする。久男は泣きながら「兄さん……いい…我慢出来ないよ……早く早くして…いい…兄さん」と腰を使いグン／＼持ち上げて来る「ようし、それなら第二回戦だ、二回戦はきついぞ覚悟しろよ、祐介は69の形を取り久男の○○を口に吸ひ込み舌の先を巻きつけてグン／＼しごきつくそして軽く久男は「いいよ…／＼兄さんいいよいじめないで……兄さん…死にそうだよア…ウ…ア…と泣きながら祐介の太ももを抱き祐介の○○を握りダ液を一杯ぬりつけてズルリ／＼としごき○○○○を目白にズル／＼／＼／＼早く手早くせめ立てられ祐介も泣き声を上げウーン久男…俺も／＼いい……ア、ウン…久男…」久男も声を上げてよがり泣きする「兄さん……吸って……いいよ…いく…いくと声を上げると一緒に祐介の口中に飛ぶ様に出した「ア……アア」

祐介も「久男…俺も…いく…いきそうだ早くしてくれ…アア…いくいく…いく」腰をふるわせドクドクと多量の精を出してしまった「ア…アいい」69の形を直し二人は又舌を吸い合い抱き合い祐介は久男の体を足ではさみながら右手は又久男の○○の上に乗せゆっくりさすり「久男君のも立派になったね、太くなったよ、僕のに負けない様に立派になったね」静かにやさしももて遊ぶ久男は嬉しく「兄さん好きだ離れたくないですよ」「なぜ二人一緒に暮す事が出来ないのかと考えると残念です。たまりません」「そうだね愛し合ってる二人の男同志が一緒に暮す事が出来ない世の中のならわしだね」「久男又固くなったね君は若いから続けて三つ出来るだろう」祐介は久男の○○を三回目のコースに入って行く「今度は手でしてやろう」と二本の指で軽くしごいたり握ったり○○をさすり軸をさすりダ液を一杯ぬりつけズルリ／＼と……」久男は「兄さんいいよ死にそうだよいいよいいよ……」と又泣き出すズルリ／＼ズルズルと大きく早くしごいていくと久男は顔をゆがめていいよと泣きながら早く早くして…泣きながらア…ア…兄さん…と三回目を終った「少し疲れたから少し寝ようよ、祐介は久男を抱きしめ二人共眠りにおちた。その夜の愛撫が激しかったのは胸のよどみを忘れる為でもあった。幾年の空白を埋めようとする抑制されて来た欲望もあった。知りつくした肉体の快楽をむさぼり合っ

た夜のしらむまで祐介の腕の中で久男は歓喜のさけびをあげ、久男の充実した肢体を祐介は心ゆくまでだきしめた。後丸二日の逢瀬に命をかける積りだろうか？　幸なるかな二人‥‥お互いかくの如く信じ合って信頼してゆきたいものだ、この二人年令こそ違へ身も心もとけあって一身同体信頼していや信頼し合って行く二人だった。

※　※　※

新春パーティ

事務局

かねて会誌に発表致しておりました、新春パーティは参加申込者三十六名、当日出席者三十一名、当会の事務所の近くのグリル「インペリアル」で一月九日午後三時二十分より開催、毛利の簡単な挨拶のあとビールの杯をあげ食事と共に大いに歓談しビールの酔いにつれ次から次へと隠し芸の唱が飛び出し、半数以上の人が自慢ののどを聞かすと言う、至ってなごやかなふんいきの中に延々と三時間近くも騒ぎ、和気あいあいの中に閉会しました。遠くの地方の会員の方にも参加され大変に有意義だったと思います然し今後斯る催物については出来るだけ振って参加して頂くことと、出席欠席の意志表示を出来るだけ早い時期にして頂くと準備等について万全を期し得られ尚更に効果を挙げ得られると思います。

危険なホモ写真

鹿児島才八郎（三一八六）

座居の体位で、その投出した足深くで、からみ合い、私を抱きしめて、裸形になっている、筋肉質の浩さんは、幾分からかい気味に、私をじらす風に微笑し乍ら、浅黒い、とてつもなく、大きな〇〇〇をふり立てゝ、斯う云っていた。

「かすがい型ダブルこけしを使うぞ」「え？　何なの……それ」「ん…．今に判るさ」

〇に鍵の開いた、かたえの大きな手文庫から、とり出したのは、見た丈でカーッと興奮しそうな、十cm、直径一cm程の、ゴム製〇が、両端にとり着けられた。高価な芸術品を思わせる。白い、三十cm物、かすがい型塩化ビニール管だった。

それ迄、あんなに激しく、興奮させられ、今にもはじき飛ばされん程、燃え立たせて於て、今更何をどう、その器具で刺戟しようと、云うのだろう。

不安とおのゝきで、ぼーッとうるんだ眼を、浩さんに向けると、喰べ掛りそうな、ギラギラ光る浩さんの目が私を射すくめて、ぐな／＼私を浩さんにしなだれ懸らせる。

「今夜の事は総て、膳立てされ、こけしの頭には、ワセリンが一杯、詰めてあるんだ。ナイロンシーツも引いてあるから、畳もよごす心配はない。灯、消すぞ」

カチッ！スイッチの音がすると、部屋全体を、ぼんやり照らしていた。淡い照明が消え、代りに真紅の燈が、うす暗くとり残されると、部屋全体が異様な程、赤黒い世界に変った。

「さあ……。装填だ。お尻を少し上げて」―浩さんの言葉が、優しくなり、声がもつれる。おそろしい様な…．俳優、〇〇〇によく似通った浩さん…．。

急に、サッと自分の人差指につばをつけると、すっと私の〇〇〇〇にもって来、とって返して次の、中指につばをつけると、私の〇にどろりと塗りつけ、も一度、薬指につばをつけると、又、素早く私の〇に塗りつけた。

そのやにっこいぬめりと、手ぎわよさ…．。私は恍惚となり、抵抗も否やもありゃしない。―うっとり目を閉じる間もなく、鈴口から押出された。薬用ワセリンにGランスをギラつかせた。例の、かすがい型ダブルこけしの片方が、浩さんの手に依り、ぐぐッと私のぬれた〇

にさし込まれた。
「あ。痛ッ」私は叫ぼうとしたが、実際には痛いのではなかった。なめらかな異物が、〇〇〇の内深く突ッ込まれる。感動と恐れ、それに、何とも云えぬ好ましい感覚が、つい、手当り次第に言葉を選ばせたに、過ぎないのだ。
「あゝ……」と安緒と喜悦のといきを洩らす。……
「どう。……痛くはなかろう」浩さんも、おかしい程激情に震え乍ら、自分の爆発寸前の、その大きな〇を、左手に持ち上げ、尖端に流れてキラ／＼光る、前垂れを人差指にすくいとると、自分の〇になすり付け、私の〇もつかみ上げて、その怒張した、Gに光っている、一筋の前駆液を、断わりもなくぬらり、すくい取ると、
「こいつの方は、よくきくから、……少しでいいんだ」―そう云いながら、自分の大造りな、ほゝずりでもしたい様な、色黒い、Aにぬりつけた。
そして……私のと同様、つまみ出されたワセリンで、赤黒く光っている、かすがい型パイプの、片われこけしを、わしづかみすると、見てゝ痛そうに、でも、快よさそうに、〇〇〇、自分のAに差込んでしまった。
と、その震動が、三十cmも屈曲して、へだたらない、パイプのこちら側、先端のAのゴム製、こけしに伝わるから、気持良さったら、堪えられるものではない。絶妙な感動が、私の脳天をゆさぶる。―その間隙を自動シャッターが作動、摂ったのが、この写真なのだ。
ダブルこけしに、AとAを締め付けられ、ひき寄せられた、二つのPは、下腹の茂みで、X字印に上向いて押しつけられ、最も感覚するどい、Pの腹面は、腰の部分で相擁し、力む度に、相手の下腹でぐり／＼ともまれる。その心地良さ！ホモの私等が、正常な体位でも愛し遂げられる。ゆえんなのであろうか。
あとひと揺すりで「おゝ。……出」と思わず、私が上づった時だった。
それ迄、ソフトタッチだった、浩さんが、元に返ったいかつさで、バカ！とどやすと、私の背の一番痛い処を、キリ／＼とつまみ上げ、私の舌を激しくついばみ乍ら、
「出しちゃいかん。……承知しないぞ。これから改めて、可愛がってやろうてのに、……動くな」―そう声をつぶして叱ると、無茶苦茶に、二度、三度、自分のAの中のこけしをゆさぶった。
その不思議な伝導の刺戟、背の疼痛、それにキスの息

詰まり等で、私の微動が止まりそうだった。Ｐの緊張の限界が、漸らく、退潮に移った。

それを、下腹部で感知した浩さんは、ほッと安心し、ほゝ笑んで、何気ない風に、今度は、おもむろに、左手をのばすと、それ迄、ドアの前の衝立てとばかり思っていた。でっかい置き物の、おゝいに結びつけてある、紐を引き、それをさらりと取払った。

そこから現われたのは、身の丈程はある三面鏡で、その鏡面の反射は、幽玄な暗赤色光を、更に室内に錯綜させ、私は夢の桃源境えと、さそうのだ。

こんな備品が、裕福とは云え、浩さんの部屋にあったか知ら……。私は魂も消え去る、驚きと喜びに、ふと鏡の中の陶酔境をかいま見ようとした。

それを待っていたかの様に又、スイッチの音がして、浩さんは、これも仕掛けてあったらしい、入口の隅から、一条の青い燈をともすと、それをスポットにして、二人の位置に、横合から、舞台の如く照射した。

その青黒い光と、天井からの赤色光……。神秘なあやをなす、光の陰影は、二人の汗ばんだ白い裸像を、鏡の中に浮きぼりにして、一層燃え立たせ、….之も云われぬ愛情の熱気う、下半身の懐かしい匂いは、相擁した二人を、幸福の絶頂えたゞよわせた。

私はこれ以上、快美な狂おしい欲望や、香り、色のムードに、堪え忍べなかった。

「何とかして….」半ば、べそをかき乍ら、懇願すると、浩さんは、自分の意企した今夜の成果が、満足そうに、にっこりし乍ら、思わせぶりに又、ぶるゝふと、Ａのこけしを使い、私の息絶え／＼な盛り上りに、いやが上にも拍車をかけ、

「いゝか、おとなしくするんだぜ」耳朶につめこむ様に、命令すると、先刻のピンクのおゝいに結んであった細い紐をたぐり寄せて、私の抱擁した手を離させ、ふりほどく間も与えず、手荒に私を、後手に縛り上びて了った。

「何うするのよ。僕を….」「いゝから……。お前が、こらえ切れずに、自分で、自分の○○をいじくり出しちゃ、全てがおじゃんになっちまうからな」

浩さんは、決めつけるように云うと、片方の手を二人の下ッ腹に突込み、ぎゅッと、私のＰをつかんで、判ったか！と云う様に、ひっぱり上げ、こする様にしごいた。

「あッ…..然うして….」ー躍り上らんばかりの良さに、私はこゝぞとばかり、泣訴すると、浩さんは、

そんな私を冷たくつっ放し、阿呆呼ばわりをして、
「バカモン。絶対、出させないぞ」「だって……」
「いゝんだ。お前が良がって、気絶しちまう迄、こすっては○○を攻め、○○で留守になったら、こいつ（P）を攻め、○○でこいつが留守になったら、又しごく……それでもお前は、液は出させねえんだ」
「それはひどいよ。死んじまう……。浩さんはサディストか」「そうさ。今夜から……。お前となれそめてから、俺ァ。サドで行く事に決めたんだ。お前が、可愛いゝからなァ。マゾの良さを、浴びる程、験めさせてやる」
こんな憎い浩さんに掛って、一体、私は何うなるのか……。タフで、愛戯には冷静、然も、情熱的人がいるものだが、私は浩さんに、迸しり出す事、許される迄どんなにせつながり、もだえねばならぬか、これからの情態が、予想もつかなかった。
催○の光と情熱の影……。二色の、光の中に緊縛せられて、私は何も云えず、なし得ず、只、畏懼と法悦の境裡にあって、総ては、浩さんに任かすより、他ないのだ。
然し、何とかして、出したいものを、出せられない、焦燥感。……満足の寸前までしか行けない、彷徨の恍惚感は、このまゝでは、本当に神経が参って了う。まして両手の自由まで、奪われて、了った上に、だ。
……私は、構うものかと、そッと浩さんに悟られぬ様、Aに力を入れてみた。すると、Aの中のこけしが、括約筋で外に、押出され気味で、半ば、こする感じ。あわてゝ、力を抜くと、座居の重みで、ぐぐっとこけしがAをこすって、腹こう内にえぐり上る。
「ほゝう……」と、その微妙な快絶感に、私はあわや、仰向けに、のけぞりそう……。
途端！「こら！。勝手に動くなってのに……。パイプは、一心同体に、つながってんだぞ。俺だって、行きやがりそうじゃないか。アホッ」
浩さんも今に泣き出しそう……。然し、浩さんは気を取り直した。そして、怒った様にぐッと、又して、私の口中をすい上げると、私の両ほゝをなで〳〵、……でも、優しい。男の子を愛する。あのきらゝかな眼差しをして、―私のPで、浩さんのPを、今こそこする様アゴで所作した。
その長い腕の、スマートな、抱擁のポーズ。鏡の中のたくましい男性に、鏡の中の私は、色彩もあやしく身もだえ、よがり声を出しつゝ、映っている。
おゝ！ その私は、ギリシャ人種の様な、男性美あふ

れた、浩さんのPが、又、何よりもまし、好きだった。
浩さんのは、黒人のにだって負けない、大きさと長さの、つかみがいのある。嘗めたら食べたい程な、甘い物だった。
浩さんは、それを知っているから、およそ、生殺与奪の権を握った。嬉しそうな面持ちで、意地悪気に、又して、HのAをぬくぬくッと使う。
今夜は、死ぬだろうと思った。そして、……しびれる
「もう止めて……」私は、手首のしばり紐を、ふりほどくにもふり切れず、焦燥と、快感に狂って、本当に今夜は、死ぬだろうと思った。そして、……しびれる様な、頭の片隅で、この二、三日、浩さんが、強引に、私に近づいて来た、理由が、……その愛の企画が、判った様な気がした。──私はもはや、何んな誰より、実のお父さんやお母さんより、浩さんが好きだと思う……。そして、之れで、自分の家に帰られない、関係が……魅せられた、愛のしがらみが、出来上ったのだと思った。

終

（或、写真資料より）

☆ ☆ ☆

☆ ☆ ☆

私は思う

毛利生

金銭では買えないものそして誰にも盗まれたりする危険のないものいやそれとは逆にいつも自分を安全な場所に置けるものそしてそれは決して使い切ったり、終ったりするものではないそれでいて人間生活する上に最も大切で偉大な力を有するもの、そんなもの、それは一体何んであろうか、それは愛でありましよう。私は自分でもそう思っている。
私は普通の人以上に愛を持っている、だからいつも心が豊かであり、生活も満足している。心が豊かである事は身体も常に健康を保持出来る。そして他人の言を素直経聞く事が出来て、他人の行動も素直にながめる事が出来る。

長編小説　前編

地上の星座

東京都　三宅一夫

転身

あの手紙を投函してから、一週間経った。

その日の午后、金丸氏から電話があり、今朝早く、金丸氏は朝夫のアパートを訪づれると云う事を云っていた。

朝夫は、九時頃床を離れ、ミルクとコーヒーとパンとで軽い朝食を済ませた。金丸氏が間もなく、此処を訪づれる事を考えると、胸が弾み、心躍。

が、一方の、金丸氏は昨日は浜松まで、社用で行って昨夜遅く帰京したのだった。

来年度から始まる、浜松市の北側を宇回して、名古屋へ通ずる、三千二百米の直線道路を新設するに際して、その視察に行って来たのだった。その道路の総監督や技師、資材、その他、細かい事など監督と浜松ホテルで打合せをして、すぐ、新幹線で戻って来たのだった。仕事も大事だけれど、生田朝夫との面会も、仕事と同等に大切な事なので一。

いやはや、人間は色気は死ぬまで、灰になるまであると云うが、これは、本当の昔からの伝説らしい。扉の硝子窓に人影が映った。

朝夫は、椅子から身体ごとねじ向けて視線を遣った。ノックと同時に、扉が押されて、金丸が姿を現わした。

「あ、金丸さん、よくいらっしゃいました。どうぞ一」

「約束の時間に遅れないように来たんですが、やっと、間に合った」

彼は靴を脱いで上った。「ねえ、生田君、マンションの方ね、登戸に見付かったんだよ。如何です！」

「はあ、小田急沿線ですね。いゝですね。あの辺は、閑静で、それでいて都心から近いですし。」

「そうですか。気に入ってもらってよかった。実は、電話で内諾を得ておいたのだが一」

と、彼が手短かに話すところによると、売値は、三百五拾万円、六帖、四、四帖、洋室の六帖、キッチンの四帖の広さだと云う一。

それに対して、朝夫は軽く頭を下げて感謝の意を表しただけで、細かい事は何も云わなかった。

「金丸さん、お忙しいんでしょう。会社のお仕事で一」

「会社が忙しくなったら、僕の仕事はお終いですよ」
カシミヤの黒の背広に、金色のネクタイが一種の風格を漂はせて、彼は胸張って椅子に坐っている。朝夫は、パジャマ姿なのを、好機会に、金丸氏を誘う。期日はついこの間、逢ったばかりなのだが、と、戸惑いながらもー、彼は、さり気なく云った。
「金丸さん、少し、お休みになって行って下さい。汽車の旅は疲れたでしょう！」僕も、まだ眠いんですよー」
朝夫は、現はに愛を披歴しながら立つと、その入口の扉を、カチリと鍵をかけた。
二十分、四十分、静寂が世界を占めて行った。外は、吹く冬の風に、舞い散る病葉の音も異様に声高く聞えるかのようー此の、急に沈間が落ちた朝夫の部屋の様子を隣人達は誰も気付かない。勤めの多い、このアパートは、朝は皆出払って、殆んど無人の家屋に近い。朝夫の優しい、技工を凝らした愛撫に、ベットの上に転々反測しながら金丸氏は、暫しの法悦境に浸った。好きなればこそ、その好きな人に接して愛の奉仕を行うのは、朝夫も、こゝろうかれる思いだった。
「金丸さん、二十日に一ぺんなどと、おっしやらずに、十日に一度位づついらしって下さいよ。そうしてもらう方が、僕としても嬉しいなあー」一瞬の情事が終った後けだるい思いのまゝ、朝夫が心中を吐露した。金丸は、社長と言う激務にあり、その寸暇をさいて訪づねて来るのは可能か、又は、不可能かー一寸、考えてから、彼は、「そうだね。なるべくそうしよう。昼間は無理かも知れないが、夜は暇もつくれる。
「うれしいな。なるべくそうして下さいな。僕、お待ちいたしておりますからー」

日記帳

多摩川の岸から少し離れた小田急沿線に、あおいマンションが冬の陽射しを浴びて、白っぽく輝いていた。冬に近い、氷雨がよくパラつく寒さがかけ足でやってくるようなこの頃である。厚い暦も何時かめくり剝がされてもう、かゞなべて数えて見ると、今年もあと僅かで来年を迎えようとしている。今年の、暦の数を数えるのにももう、幾ばくもない。ー
朝夫がマンションに引移るについて、彼は何も手出しなどしなくてもいゝのだった。
金丸氏が、全てに手を打って、人夫を三人も派遣してくれて、荷物もバタ／＼と運んで、思い出多い新宿のア

パートを引き払い、朝夫は間もなく、登戸に移転して行ったのだった。
今迄のごみごみした狭い塵屑の出そうな畳の、柱など手アカで真黒に汚れた部屋から較べると、登戸のマンションは、全てが新しく、建材も凝って、柱など総桧造りである。天井の横木の棧は皮つきの桜材だ。まるで一変に、昔流に云えば、仲間奴から殿様に一大飛躍した出世振りである。廊下は防音装置が施工されてあるので、歩く靴音もだ部屋までは響かない。
朝夫は、椅子にくつろいで朝刊を読んでいた。突然、ブザーが鳴った！ こんな早い時刻に ― 誰だろう ― 立つのも面倒なので、彼は大声に、「どうぞお這入りになって下さい ―」と答えた。扉が、細目に開いて、ちょこ／＼と這入って来たのは、一人の小柄な老婦人―
「ごめん下さいよ。あたしは金丸の母でございます」と入口で彼女は、短かく自已紹介し、そのまゝ朝夫を無視したかの如く、傍なる椅子へ―自分勝手に腰を掛けた。
「金丸さんの母君が、―一体、何の用事だろう―」
朝夫ゐほゝに不審の色が走った。が、彼は、一先づ茶の用意をして、初枝に推めた。
「朝夫さんとやら、あなた、豊とはどういう関係でございますかの？」
初枝は訪づれし用件の本題に直入に切りこんで来た。はっとする驚きが、彼の胸を走った。
「どういう関係って、それはおばあさん、どういう意味ですか？」
「さあ、生田さん、あなた、それは―」
実は初枝は、伜の書斉に入って、昨夜、彼の日記を見てしまったのだ。親子の間柄とて見てはならぬ人の秘密机上に無造作に置き忘れられた日記帳 ― それには ― 十一月十四日（日）生田は不思議な若者、僕の精神をいやし、僕に快楽を与へてくれる。と、
頁を繰ると、十七日には、「生田は宝石のように輝く美しき相貌 ― 性格、青い真珠の如き高貴な若さと、やさしさとを具備している。
彼は、僕の好きなアイドル！」初枝は、伜のその記された記事から目を離し、あらぬ方をきっとして見凝め、口中に叫んだ独言 ―
「はて、面妖な―一体、これは何を意味する事であろう」
雲の如き暗い疑惑が、初枝の脳裏を押し包んで ― わけのわからぬまゝ、こうして初枝は今朝早く自動車を駈って、朝夫の住む葵マンションを訪づれたと言ういきさ

つなので ―
初枝が、豊の書斉の棚の隅から隅まで、会社関係の帳簿を調べたが、その何処を探しても、朝夫の性名を発見する事は出来なかった。かと云って、彼女は、会社の方へへ電話をかけて聞き正す、それ程の執念もないのだった。初枝は出された茶を一服飲んで、改めて朝夫をみつめた。朝夫は人を喰った顔で、豪然と紫色の煙を傍に人無きが如く、吹き飛ばして、表情一つ変えないでいる。とても駄目だ。てんで受付けてくれそうもない、今日、自分は一体何しに此のマンションまで来たのだろう ― と自から訪づねし、自分の用件すら、判然としない初枝だった。

此の人の生活

初枝は、今、改めて見直すように、部屋内を見渡したのだった。キッチンの隅に、黒檀の支那からでも輸入したのであろう。欄干風の飾りのついた大型の茶ダンスが豪華なふんいきを放って置かれてある。値ぶみをすれば四、五万円はすると思はれる。王室でも採用するが如き贅沢な代物―。

金で縁取った、ミレーの落穂拾いの額―、初枝は、驚異に打たれつゝ、

「まあ、御立派な家具調度です事。お部屋がとても引立って、まるで貴族の方の住むような―」

「そんな事はないでしょう ― こんな部屋、お宅様から比較しましたら、粗末で物置きにも等しい―」

「御謙遜をおっしゃいますな。お若いのに、これだけの生活をなさるのは、よく／＼の収入がおぁりになって―」

「僕は頭を働かせ、収入をはかるようにしています。肉体を提供して労働なんかしたって、収入なんか、たかが知れているでしょう ― そうだ、僕は頭脳を働かせて、うんとお金を儲ける。世の中って万事、金ですよ。お金さえあれば何でも自分の思うように出来る。―」

そう云って、朝夫は〇〇するように初枝の方に眼を向けて面白そうに笑ったのである。

初枝は肘椅子に身をもたせかけて、

「朝夫さん、貴方、うちの会社でどんなお仕事をなさっていらっしゃるの？　お仕事をする会社の場所はどこですか？」

上の空で聞いたように、朝夫は豪快に笑い飛ばし、

「初枝さん、僕は昼間は別の会社で働いていますよ。金丸さんにやとわれているのは、詮じつめればアルバイトですよ」と云って、彼は腰を浮かし、

「僕は、これから会社へ出勤しなければなりません。今日はこれでお引取りになって下さい」と、にべもない語を継ぎ、仕立下ろしのスーツをさっさと身につける。
「さようでございますか。御出勤とあらば、仕方ありません。それでは、あたしはこれで—」と彼女は椅子を立つと入口の方に進んだ。ジュータンが、足を沿しそうにやわらかく沈んで何とも、隅から隅まで贅を極めた彼の部屋である。よろめくように、掻き進み乍ら扉に手を掛けて、「此の人は一体、職業は何をしているのだろう。普通のサラリーマンなら、これだけの驕った生活が出来得る筈がない。先刻、自分には「小母さん、僕は頭を働かせてお金を儲けていると云ったっけ—」
彼女は扉から外へ出ようとして、ふと、朝夫の方を振り向き、
「あなた、会社へお勤めって、只の、普通の会社？　何か、特別の技能を具いた技師の方なんですか？」
「いゝじゃありませんか、そんな事、僕の仕事がどうだって、あなたには、何の関係もございません—」
朝夫は、入口に迫って来ると、宣告するようにそう云って、初枝を外へ押し出した。早く帰ってくれと云わんばかりに—。

その日自邸へ帰った初枝は、夕方、豊が何時ものように帰宅したのを見ると、早速つかまえて、
「豊さん、今日は珍しい事がありましたよ。お前さん、あなたは生田朝夫という子供を御存じだろうが—」
「え、知っていますよ。朝夫がどうかしましたか。いやどうして、あの生田をお母さんは御存じなんですか？」
豊は、言葉はおだやかながら、朝夫の事を持出されて一寸、言葉がけわしくなった。
「朝夫をお前さんは会社で使っていなさるそうですね。大層、美しい子ですが、あの人には一体、どんな仕事を与えているんですか？」
初枝は、好きな朝日を一服、うまそうに吸って、ゆっくり吐くと、そう云って、豊に質問の矢を放って来たのである。

つづく

徒らに自已の性向、ホモを嘆くなかれ、朝夫は已がホモを利用して、どんな華麗な転身、出世をして行くか、号を追って、朝夫の目くるめくような一大出世絵巻が展開されます。

次号をお楽しみに　作者

「夜ってなあに？」

（暗りの足跡）

森　信一郎

昼間の快活として妙に明けすけでいて、それでいて何か厚い仮面で被われているような感じから一変して、夜は冷たいながらも一種の解放感と言うか安息のような解消された満足感があった。

片桐勇作は昼間の仕事の疲れを癒す為に、二、三回行った事のある渋谷付近のバー「水の森」へ足を向ける事にした。無論、片桐勇作の唯秘そかに隠されている内面に通ずる処の、特殊な酒場で、彼が偶然会社の同僚と酔いが廻った遊び半分で入った、ふと期待に答えた処だった。

タクシーの中から淋しいイルミネーションを瞳に写しながら、彼は何か満たされぬ思いで一杯だった。

彼はその秘密の中に足をふらつかせながらも、結婚と言う問題を抱える年齢は、当然のごとく来てしまっていた。ふと知ったこの世界に自分の不思議な感情が存在している事に気付いた今、彼に取って正しく苛酷な主体性の試練であった。

ズボンのポケットから煙草の箱を取り出すと、中から一本抜き取り、そっと火を付けた。一筋の煙が先の方へ行って暗い空気中へ拡散した。そっと目を閉じて頭の中にあるモヤ／＼とした倦怠感を晴らそうとしたが、痛みのような苦しさが襲って来て、何故か恐しさを感じてしまい、煙草をふかす事に専念した。

夜のネオンと共に行きかう車のライトが、闇の花々となって偽りの色を様々に見せ付けている。都会の夜。静かな音楽が車内に流れ、ささやかなりとも彼の憂愁は取り被うことができた。

――の煩悩も悩ましい夜の中へぬめり込んで行ったのであった。

「あ、ここでいいよ」

広いが余り人通りの無い通りの、ビルの地下に「水の森」はあった。

少し前で車を止め、その車が走り去るのを待ってから彼は階段を下りて行った。

白に黒の装飾品で飾り立てた扉を開けると、中の人息

と煙草の煙とではちきれそうな圧迫を感じた。一早く気付いた店の子が、
「いらっしゃい！　あーら、この間いらしたハンサム・ボーイじゃなくって？　マア、嬉しいわあ、私の為に来て下さったのネ、感激よ！」
身をくねらせて来た。少し長めの髪を栗色に染め、アイ・ラインを上手に入れて紫のシャドウで色気を出した男性的骨格の子である。
「何言ってんのよ。私の為よネェ？」
つかさず別の子が割り込んで来て、口を尖らせながら勇作をカウンターに案内した。セシール・カットで美少年を装っている妙に細い子で、二枚目歌舞伎役者的な化粧をしている。
カウンターに椅子が六、七脚、ボックス四つの、それ程大きく無い処である。全体を白と黒とでうまく飾り立ててある。今日は以外と混んでいてボックスは満員で、彼は二つ三つ空いている止まり木の方へ坐ったが、元々カウンターで一人になって飲みたかった。
「何になさいます？」
肩から腰までの線を一くねりさせながら、栗毛の青年が尋ねた。
「……うむ、ビール──」
彼は店の子をうとましく思いながら、答えた。事実彼は完全に異性的な人格や観光的容姿などに対しては余り興味なく、ややモノ・セクシュアリィ的な子に少し感情が騒ぐのであった。
「マア、こちら素っ気無い事?!」
さも自尊心を傷付けられたかのように、上眼加減にらみ返しながら、美少年気取りの少年的青年は言った。
二人の少年は彼の左右にべったりと坐っていた。店の中には他にも奇妙な子が何人もいて、皆不思議な言動を起しながら、極めて陽気に振るまっていた。
ビールが彼の手元に置かれ、美少年気取りの子が酌をする。栗毛の子は今しがたボックスの方から声が掛かり「はーい！」と妙にガラ／＼と太い声を上げ、「じゃあちよっとね」軽く勇作の膝に手を当て、立って行った。彼は別になんとなくその子の後姿を見送りながら、店内を見廻した。
と、すぐ近くのボックスに、今までここで見た事の無い子が、いた。緑色のボディ・シャツに同系のジイ・パンツ、膝までの茶のロング・ブーツと、細い白い首に巻いている緑と黒のスカーフで、装飾している。

彼は逸そうとした目を、彼に凝っと合わせた。

「あら、どうかされて？　ああ、あの子？ニューフェイスなのよ、御存知無かった？　そうねェ、一週間程前から来ているかしら。売れっ子なのよ……若いからネェ」

側の少年的青年が溜息まじりに語った。

「――呼んで来ましょうか？　私とチエンジするわネ！」

売れ無い事を察してか、すぐ立って少年の処へ飛んで行った。片桐勇作はビールのコップを握り締めながら、後で起こっている事に対して胸を騒がせた。

暫くすると、「宜しく、初めまして……。あの、トントンと言います。」との細くそれでいて低い声が掛かった。

彼は一発の衝激を胸に受けた思いとなり、グイッとビールを飲んだ。そして、「君、いくつ？」と素気なく聞いた。自分の恥にかんでいる事が逆にこの子との間を崩していると、勇作は痛い程分かっていた。

「あの、十九……でも、ほんとは十七――」

まだ商売っけのない怖ず怖ずとした態度で、妙に生々とした植物的な感じを受けた。

「ふーん、注いでくれないか？」

少年はうっかりとしたと言う態度を見せ、軽く坐っていた椅子に、深々と腰掛けた。

「君、どうしてここにいるの？」

勇作は客であると言う優位な立場を利用して、可愛らしい少年を少し痛打ってみた。

「あなたはどうしてここに来られるようになったのです？」

少年の唐突とした答えにふと勇作は不機嫌な思いを生じた。が、酒場での駆引きである。彼は自分の思いを潤滑に働かせようと思った。

「教育ママのせいだよ。一人っ子でさ……分かるだろ？」

少年は手をちよっと口に宛がい、笑った。

「僕、映画館で誘われたんです。中退しちゃってさ、ホテルのボーイしてたんだけど全然オモシロイ事が無かったから……」

勇作は二人奇妙にも偽りを語っているのに気付き、勿論少年もそう思った。

どちらからとも無く薄笑いが漏れた。それが次第と大きくなって行き、二人は本当に笑い出した。勇作の頭の中で何かが空しくカラ／＼と廻り出した。崩れかけている風車が空風に吹かれているかのように、だった。

「おい、今夜俺とどうだい？」

勇作は自分の大担さに少し驚いた。
少年は行成の事に少し顔を赤らめ、（嫌だなあ・・・・）と言うかのように体を捻った。しかし勇作が凝っと見付めているので、少年はふと神妙になってしまった。だが内心では悪くないとでも言うような愛される歓びを、感じていた。
「嫌と言ったら？」
少年は勇作に挑んだ。
「ママに頼んで、金で話をつけるさ」
少年は明るく陽気に笑い、
「付き合いましょう・・・・どうせ逃がしてくれ無いのでしょうから、ネ？」
片手をポンと勇作の膝の上に乗せた。
勇作は少年の手が膝の上で熱い烙印となっているのを感じた。
「お店終るの何時？」
心の中で妙な騒ぎを起こしながら、少年を自分の物にした快感に酔っていた。
「途中から、出ますよ。ママに言っていけば平気―」
そう言って少年は小さく笑った。そしてビールをコップに注いだ。勇作はグイッと飲み干した。―心の中に熱いようで寒い、湿っているようで乾いている風が吹いていた。
「僕、飲んじゃおうかしら・・・・・」
勇作は自分に用意してくれる少年の行為をふと嬉しく思った。コップの残りを軽くカウンターの下で払うと、少年に渡した。
彼はニッコリとそれを受け取ると、勇作の酌を待った。勇作は緩やかにビールを満たして行った。
「じゃあ、頂きます」
そう言うと少年は、グッと〇った。小指をやや曲げて弱い手付きで飲んでいる。白い透けるようなほゝが微かに動く。
「あー、おいしかった。― そろそろ出ましょうか？・・・・・・」
勇作は少年のペースに圧倒されて、妙に気恥ずかしかった。
「うむ、そうしようか・・・・・」
少年は勇作の肩へ手を掛けながら扉の方まで送ると、
「ちょっと待ってて、ママに言って来るから・・・」と言って店の中へ入って行った。
勇作は扉を押して外に出ようと、階段を上がった。二

三段づつ飛び上がりながら、駆け上がった。地上に出ると、まだ少し寒い街路で息を弾ませた。白い吐息が夜に溶ける。

彼は自分の弱さに対してどうにかなると思っていた。何故なら長い不満の満たし方を知ったようであり、これからその為に全ての生活を犠牲にしても良いと思ったからだった。彼は煙と笑いと奇妙の中で、唯一筋の内在の真実を見極めた。悲しい酒に溺れながら、自分の生きて行く果敢さを知ったのだった。だが彼はその辛さをどれだけ耐えて行くか、彼自身疑わしかった。

ポケットから煙草を出すと、火を付けた。一服吸うと、少年が下から上がって来た。

「ゴメンナサイ……………」

少年は男仕立ての薄い緑色のコートを着ている。勇作の腕に絡みついて来た。

二人は街の明りと反対の、緩い坂道を登って行った。暗い夜の足跡が残り、二人は闇の中へ消えて行った。

（了）

思い出

名古屋市　二七〇七番

もう二十何年前になりますか。私の家のある北陸の小都市の本屋でカストリ雑誌を拾い読みしているうちに、ザラ／＼した仙花紙の上に読みにくい活字で、東京新名所という記事でしたか。当時性の自由化に伴なって、ボチ／＼と顔を出しかけたホモ記事の中に発展場が、いくつか書いてありました。買って帰るのも気がひけて、人のいぬ間に場所だけ自分の手帳に記して帰りました。

それから数日たって、偶然にも東京出張の用事が出来たではありませんか。終戦直後の満員の汽車、しかも窓ガラスもろくにない、すしづめの列車に乗って私はようやく東京に着きました。昼のうちに会社の用事だけすませて、うす暗くなったのを幸いと、そのうちの一つ万代橋のたもとに出かけました。

まだ焼跡の空地だらけの道を歩いて行くと、後ろから「叔父さん、急ぎの用でもあるの」と呼びかけられました。後ろを振り向くとまだ大学へ入りたての学生でしたのでほっとした気持で「いや、別に」と答えると「じゃあ少し僕と付合ってくれる」「……………」二人はその道をしばらく歩き続けました。

「叔父さんいくつ？」「四十五才」

「何処から来たの」「北陸の方から」

「ふーん」とつ／＼とした会話が切れた頃、昔公園のあった跡だが、随分雑草の生えた広場へ来ていました。「一緒に来て」といったかと思うと、しなやかな手で私の手を握り、その草むらの中へ入って行くではありませんか。「僕を愛してくれる」「……………」私は声にもならずうなずきました。すばやくズボンを下ろすと「早くしてよ」と指し示します。私も思い切ってズボンを下げ後ろからだきかゝえ入れようとするが、どうしてもうまく入りません。やゝじれったいのか「叔父さん、初めてだね」そういうとしばらく考えていましたが、さっと上衣を脱ぐと地面にしき、あお向けに寝て「奥さんとする時と一緒だよ、早く乗りなよ」と言います。私は夢中で脚の間へ割って入りますと、両足を私の肩にかけ身をかがめちょっと、だ液を自分につけると私の⦿⦿を軽くつまんで当ててくれました。ぐいと推すとはじめはきゅっと、せまい所を推しこむ様な感じでしたがするするとうまく入りました。とたんに私は思わず溜息をついてし

まいました。

　こんな具合の良い事が、世の中にあったのだろうか。本当に泣きたい位の気持で○○○○とありったけの力で腰を使いました。彼の柔かい身体は完全に二つにたゝまれたまゝで、盛んに腰をつかい玉門で私の○○○をしめつけます。もういつ死んでもよい。本当に夢うつつでした。やがてこらえ切れなくなった肉体は一声「フーッ」という溜息と共に熱くなった身体の奥深く○○○○と熱湯をそゝぎこみました。一瞬ぐったりと前のめりになった私は、もう感激で一杯で彼の口を求め、舌もちぎれよと吸上げました。

　身なりを直すと、幸い近くの水道管の破れから、チョロ／＼出ている水で手を洗いながら、

　「叔父さん、又きてくれる」「うん、きっと来るよ」「うれしい、じゃあ来週の同じ時刻ね。今度は日比谷公園のトイレの辺りにきててよ」

　いゝという彼に何がしかの金を握らせて、東京を後にしました。

　帰宅した私は、夢遊病者の様でした。それこそ、仕事も手につかず会社の連中から変に思われた事でしょう。約束の一週間後の日が気になって寝むられず、とうとうもう一度上京する決心をしました。妻には「先日泊った温泉が余り良かったので、もう一度行って来る」と理由にもならない事を言ってとに角家を出ました。

　合いも変らぬ、ヤミ物資を満載した満員列車にもまれて、ようやくついた東京。不案内な私は歩いて指定の場所へ出かけました。暗くなると変な男が通り過ぎますがなるべく知らぬ顔をしていました。

　約束の八時が少し過ぎた時、あの青年が来たではありませんか。少し手前で立ち止まって本当と信じられない様でしたが、ハッきり確かめるとスタ／＼と近寄って来て「本当に来てくれたね、叔父さん」「そうさ、約束したじゃないの」「叔父さんきっと、東京の人でしょう。北陸からそんなに度々来られる筈ないじゃあないの」「いや本当に今、東京駅についたばかりだよ。これをご覧」と周遊の切符を見せてやると、ビックリした様子でふさぎ込んでしまいました。そしていきなり、私の手をとると「行こう」といって飛び出しました。

　何処をどう歩いたのかわかりませんが、通りから細い道を入って行くと、暗い木立に突き当ってしまいました。「こゝから入れるよ」と見るとそこだけポッカリと丁度人が通れる位の穴があいているではありませんか。身を

かがめて抜け出ると、そこは昔花壇でもあった跡か、ところ／＼敷石があり草もそんなに深くなくて、フワ／＼とした原っぱでした。足を投げ出して腰を下ろした彼は自分が東京の大学へ行っていた事。途中からバックをおかされてその趣味になり、毎日ブラ／＼していること。そして、郷里の親元でも初めは仕送りをしていたものの もう途絶えてしまっていることなど話してくれました。

「こゝは誰も来ないから安心だよ」というと、彼の方からしっかりとだきついて来ました。柔かい彼の舌がするすると私の口の中へ入って来ると、くるくると口の中を動きます。たまらず私は力一杯吸上げました。痛かったのか「ウッ」と声を上げましたが、そのまゝされていました。

二人の硬直した肉体は、ズボンを突き上げて苦しそうです。彼が私のベルトに手をかけて下ろしかけました。私も同じ様にしました。そしてしっかりとお互いのシンボルを握ったまゝ、だき合っていました。私のは自分で言うのも何んですが、大きさはまあ／＼ですが、〇〇の大きく開いた形は、誰にも負けない位立派なのです。少し皮をかぶっている彼のは推すと、するりと露出しました。ピンク色のきれいなシンボルがピク／＼と震えているではありませんか。彼は私のものに口を当てると、スッポリと含み、柔かい口びるを上下させたり、鈴口の当りを舌でなめまわしたりしました。私はたまらず何度溜息をもらした事でしょう。鈴口からは透明の液体がこぼれんばかりです。たまらなくなった私は、彼を四つんばいにさせて、後ろから突き上げました。痛かったのか「うん」と言いましたが、そのまゝの姿勢で盛んに腰を使いました。あまり前へ移動するのか、顔と手を地面につく位にして、尻だけをもち上げ、さゝえていました。私も段々よくなって、もうたまらないのです。彼も気持よさそうに、声を立てかけました。「〇〇〇」といって腰を激しくすると、彼もうんと尻を持ち上げました。私も彼の〇〇からは白い若い命がふきこぼれました。私も思わず放出してしまいました。

しばらくは星空をながめて、じっとしていましたが、彼が横になって後ろを向くと形の良い二つのふくらみを見て私のものは、むらむらと又、おこってきました。横向きのまゝで入れようとすると、彼も調子を合せて腰をゆすりましたので、うまく入りました。本当になんとも表現の出来ない心地良さなのです。私は彼の口を求めますと、柔かい上半身をねじって上を向きましたので、私

もおゝいかぶさる様にして、口を吸い合いました。私は彼の可愛らしい肉体を右手でもって、上下しました。もう行きつくところまで、行ってしまった二人は「もういゝ」「たまらない」「すきだ、すきだ」と叫びながらいいきたえてしまいました。

しっとりと夜つゆでぬれた草原にいつまでいたのでしょう。それから駅まで送って来てくれた彼と別れるのです。これが私のホモ辺歴のはじまりなのです。しかも、これで二人が会えなくなる最後だとも知らずに……。

☆☆☆　☆☆☆　☆☆☆

☆☆☆　☆☆☆　☆☆☆

質問に答える

（会員よりの問合せに対して）

(1)名簿に出ている年令は入会当時のものですか

答三年程以前に全部書替えしましたから大して差はありませんが古い会員番号の方は二、三才多いと解釈して下さい。

(2)会員の方はどこのホテルを利用していますか？そして費用はどれ位いでしょうか？

答以前は特約していた旅館がありましたが現在はそう言ったものはありません、でも大阪市内では俗に言う温泉マークとか連込みホテルと言ったホテルを皆んな利用しております。休憩で千円から千五百円也、宿泊で三千円位いでしょう。勿論二人でです。男二人で利用するのもめずらしくありませんので決して気兼ねはいりません。

無題

鹿児島県　三一八六生

私はとても春が好きです。ホモの方には夏が断然と仰有るかも知れません。又若い方にはロマンティックな秋がと。然し私の場合は、春が人肌の季節とでも云うのか。暖かく柔かい感じで花やかでもあり、人恋しくなる季節だからです。折りにふれ、読んでいた春の句が手帖につまって来ましたので先生に採点して戴きたく投句致しました。

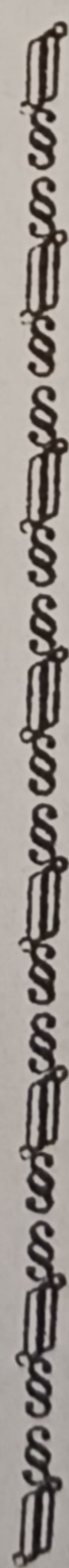
処で先達ては御忙しい処を突然御電話などして失礼申し上げました。初めての電話で。然も先生のじかの声のそこに、先生がいらっしゃると思うと、何を話していいやら、思う事の半分も口に出ませんでした。でも、御電話した後、いつ迄も先生の暖かい名残りが消えず、一日中うき／＼して過しました。

先生の会に入会し、私、同様の方達が大勢いられて、お互い、援け合う友愛の精心で、結ばれているのを知って心強く、幸せに思っている時、先生と電話で声を通じ合った日はこの上ない幸福感でナルミスな感じに落入ってしまいました。然しまだ自分の性格ゆえの不安もないではありません。今度の特集号、巻頭にありました先生の「行動を慎重に」の戒めには、とても反省させられ、行先に不安を覚えずにはいられませんでした。例えば、職場でホモ性をテストされるとか、素行で調査される風潮にある等全くどうしてよいやら迷ってしまいます。悖徳な事もなく、反社会的な事もない我々ホモ人間を、何とかそっとして貰えないものでしょうか。徴々たる存在の吾々が、何を社会に害毒を流せるものでしょうか。それどころか、吾々は少しでも社会に適応する様、何んなに苦しみ、努力しているか、その傍わら、何んなにつゝましく、控え目に、ホモの世界を生きているか、そこらを理解して貰えば、反って同情されるべき人間なのだと思います。

先生が幾十年、吾々ホモを、擁立、善導して来られた。その成果が現在の私達清心会の会員、その各々の人間像だと思います。一部の反則者、悖徳的な人は、他の一般の反社会的な、或いは、精神構造の変った人と変らないものと思います。それはそれで制裁を受ければいゝのですし、特にホモ人種を糺弾するには当らないのではないでしょうか。今後、まだ／＼清心会の人達は、社会的に

有意義な存在になって行くと思います。その形態は予想されずとは云え、意義ある人間に形成されていく事は必定です。その理想像が先生だと私は思うのです。或マスコミは先生をマジメホモと評価致しましたとやら、それはとりもなおさず、先生に一点、非の打ち処のなさがシャクの種で、マジメと云い、そしてホモと云って性情を認めている証拠だと思います。かと云って、世にホモ人種がはびこっては天然自然の摂理にかないません。ですから、別にホモ化を奨励、或いは感化する必要はありません。然し誰の罪でもなくホモとして生れ出でたものを人類淘汰の対象にする事は出来ません。ホモ人間より、まだ／＼悪質きわまりない性格公害を世に流す人種は、数え切れない程あります。そんな人間こそどし／＼糺弾されて然るべきだと思います。吾々の事はそっとしておいて貰いたいとつく／＼思うのです。そんな時、心の頼りに、心の支柱になって戴くのが、先生なのです。何卒今後も一段と御体調に御留意下さり、増々清心会発展の為に、でも決じて御無理なさる事なく、くれぐれも御自愛の上、御努力なし下さいます様、勿論吾々も蔭乍ら協力は惜しみません。声援もうんと御送りします。いつ迄も吾々の統師者として、リードして下さいます様、南の果から御願い申し上げます。

では今日は之にて。

十月二十四日

家庭を大切にして欲しい

私は本会を運営していても所帯を持っておられる会員の方々の家庭の事を大変に心配しています。生れ乍らの性で本会に興味を持つことは止むを得ませんが、概してホモの男性の奥様になった人はまことに気の毒だと思います。ですから出来るだけ他の面で家庭を大切にする様に心掛けて下さい。

本会で得た新鮮な空気で家庭と職場の励みになる様に努力して下さい。

ソドムの中のどおわー

神隠し

真理怒世夫

朝、昨日からの風邪気味が抜け切らないので、同級である伊の木の実樹ちゃんの処へ、女中のお竹に頼んで、学校を休むと伝えて貰いました。

それから、昨日から引きっぱなしの寝床で、再びうとうと寝ていました。すると、昼少し前に、実樹ちゃんが尋ねて来て、「町から教育委員の、何でも偉い人が学校へ来て、皆んな半日で帰された」と伝えに来ました。僕は実樹ちゃんを自分の部屋に上げ、今日の勉強の進み具合いを聞く事にしました。

「そんでさ、僕はさ、どうしようかとさ、困っちやってさ・・・・・・」

実樹ちゃんは女中のお竹が持って来た大福饅頭を無中で食べながら、僕に今日学校であった事を話すのですがどうも食べる方ばかりに懸命で、ちっとも話しは分かりませんでした。でも全部平らげた後詳しく話しを聞くと授業中、隣の席の健三に、実樹ちゃんの手を握りながら学校から帰った後、裏山の権現様の境内へ是非来て欲しいと、盛んにせがんだとの事でした。

実樹ちゃんは色の白い首が細い、組の者からお姫様などとはやしたてられる、以外と可愛い子でした。健三と言うのも、やはり細っそりとした子でしたが、色が黒くて顔が締っており、乾柿と呼ばれていました。でも、とても腕力が強くて、彼の前で乾柿などと言おうものなら言った者達はすぐ泣かされてしまう程でした。

「僕、どうしようかな？・・・・・」

実樹ちゃんはわざと僕の前で、そんな事を呟やくのでした。と言うのも、僕が彼を家来として、いつもどこへ行くのでも、従わせていたからでした。

「お父様に言い付けるよ」

そう僕が言って睨み付けると、実樹ちゃんは首を項垂れて、クスンクスンと涙ぐむのでした。―彼のお父さんは家のお父様に使われている小作人だったのです。

「一人で行っては駄目だ！　こっそり僕に後を付けさせるんだ。だったら言ってもいいんだよ」

実樹ちゃんは渋々俯付きました。

鞄を僕の部屋へ置いて、裏山に実樹ちゃんは出掛けて

行きました。僕も服に着換えてそっと後を付け始めたのでした。

家の裏庭から山の小道伝いに、権現様の境内へ抜け出られるので、その間は走って行っても見付かりません。でも、どう言う訳か実樹ちゃんは夢中で走って、僅か三分位で境内の横の小道に出てしまいました。

僕は小道の横の大木の影に隠れて、そっと石畳に立っている実樹ちゃんを見ていました。

ものの五分もし無い内に、例の健三が鳥居の方から走って、実樹ちゃんのすぐ側へ寄って来ました。

何か二言三言実樹ちゃんに健三は言っていましたが、実樹ちゃんは体を振りながら、嫌々をしているようでした。でも、健三は実樹ちゃんの手首を握んで、社の裏手に廻る細道へ連れて行きました。

細道は途中から二股に分かれていて、二人は、林の奥の方に通じる道の方へ消えて行きました。僕は二人を見失わ無いように、それでいて見付から無いように、真剣に後を追いました。

小半町ばかり行くと、二人は嵐か何んかで倒れた大木の幹に、腰掛けていました。どうした訳か、実樹ちゃんは妙にはしゃいでいて、僕と遊ぶ時には見せた事の無い笑い顔で、健三と喋っていたのです。その内、実樹ちゃんと健三は笑い声を立てながら、何かじゃれ合うようにくすぐりっこをし始めました。僕は何故かむか／＼として、隠れている大木の幹を、指でほじくり廻しました。そして、その事に無中になっていると、「あー！」と言う悲鳴が聞こえ、僕は驚いて二人の方を見付めました。

―確かに、二人は後の方へ、重心が傾いて頭から引繰返ったのです。僕も、「あれー!!」と小さく口に出してしまいました。でも、それはほんの一時で、ズシンと落ちる音が響くと、シーンと森の静けさが訪れました。僕はどうしたのかと、ハラハラ時が過ぎるのを待ちました。

ところがどうしたのでしょう。二人は、いくら待っても起き上がらないのです。僕は、もう少し様子を見ようと、用心深くじっと見付めました。でも、さっきとちっとも変わり無いのです。―僕は、いよいよ持って不思議に思い、そっと倒れている大木な近付きました。そして心の中で（一、二、三！）と呟いて、覗きました。―?!

僕は「あー！」と言って逃げ出す処でした。―二人の姿は無いのです。影も形も、草の上に倒れた跡さえも、全く無いのです。僕はふと、暗がりのトイレへ行く夜の、あの恐さを想い出しました。そして、後から、又自分の

気付か無いどこかから、何かが襲って来はし無いだろうかと、ビクビクしながら周りを見渡しました。

全く周りに人気は無いのです。まるで、この世の人が全て消えてしまったように、唯森が、空が、空気があるだけなのです。僕はふと別世界へ来てしまったような気になりました。すると何だかとても恐くなって、身じろぐ事さえも出来なくなりました。—心の中を（逃げろ！逃げろ！）と声が走ります。でもその一方、（逃げたらきっと何かが行成飛び掛かってくるぞ！）とブレーキを掛けます。僕はどうしたら良いのか、ジレンマに泣き出したい程になりました。

そうこうしている内に、気持ちが胸や腹や頭の中に一杯に成り過ぎて、とうとう「ワアッー！」と言う悲鳴と共に、一目散に逃げ出しました。—何かを吐き出さずには、とても我慢できなかったからです。

何処をどう走ったのか全く分かりませんでした。余り息が切れるので、足を止めて見ると、森の中の野原の側でした。大きな空がポッかり見えます。野の向こうには再び森が繁っています。—一度も来た事が無い処なのです。僕は（おかしいなあ・・・）と内心思いました。権現様へは度々行くので、走れば村の近くへ出るはずなのです。妙え反対方向へ走ったとしても、すぐ後が山なのですから、直勾配が急になり、木々も深くなって、進む事すらでき無くなるのです。—ふと心の中を、とんでも無い恐怖心が通り抜けました。（僕はきっと神隠しにあったのだ！　きっと天狗か狐に騙されてしまったんだ！）

泣き出したくなりました。こんな人っ子一人居無い処で一人っきりだなんて！　目が熱くなって、胸が震えて来ました。

すると、何処からか軽快で妙な音楽が聞こえて来ました。ずっと前、町まで行って見て来たサーカスの、あの時やっていた音楽、西洋の音楽みたいなのです。僕は泣き出す事も忘れて、木々の間から見える空や、近くの大木や、ずっと向こうに並ぶ木々などを、キョロキョロ見渡しました。

と、野原の真中にいつの間に居たのか、一人の大人の人がこちらに向かって歩いて来るのです。立派な御爺さんなのです。頭に黒い丸い、〇のある帽子をかぶり、家のお父様が御用事の時に着るような紋付衿を着て、ステッキ、黒く光る何んとも美しいステッキを付いて来るのです。どうした訳か、黒い傘をさしています。僕は杏気らかんとして、それを見ていました。何んだか可笑しく

なって、その御爺さんが厳しそうな顔をしているのに、少し笑ってしまいました。その内段々その御爺さんは近寄って来て、とうとう僕の隣に来ました。僕は何か口を聞かなくてはならないようなふんいきになってしまい

「あの、どちらから来られたのですか？」

そう尋ねました。

紳士は僕の脇を通り過ぎようとした時、ふと立ち止まるような様子をして、

「飛行機に乗ってな、あの森の向こうに到着したのじゃ。他に何か―？　そうじゃ、ここで会ったのも何かの縁、わしの愛用のペンを上げよう」

そう言うと紳士は、胸の処へ片手を入れ、お父様がよく使われているような西洋の筆をくれたのです。

「では、さらばじゃ――」

僕は御礼を言おうと頭を下げると、紳士は唯それだけ言って、又、サッサと森の奥へ踏み込んで行きました。

僕はその紳士の姿が木々の中に見え無くなってから、一体ここが何処なのか、又何処へ行けば人が居るのか、聞く事を思い出しました。後を追おうと余程思いましたが、きっともう広い森の何処かへ行ってしまっているのに違いないと思い直し、自分も目的を持って歩き出そうと、足を動き出し始めました。

すぐ前に開けていた野原を渡り、向こう側だった森の中へ入って行きました。

足早に一町も歩いたでしょうか、木々の間から「シュッ―」と言う音が聞こえて来ました。僕は（何かな？）と思いつつ、音のする方に足を向けて行きました。

茶色い煉瓦を組み合わせた丸い池のような真中に、水が上へ向けて飛び上がっているのです。確かこれは、本の中で読んだ噴水と言うものだと思いました。「シュッ―」と言う音を持続させながら、水の柱のように空へ伸びて「パッ」と散っています。周りからは水が溢れて、流れ出しています。僕はその水が清らかで美味しそうなので、そっと手で抄って飲みました。何か不思議な香りがして、少し辛く、ちょっと後味に苦味があります。でも、こんな時でしたので、美味しいでした。

僕はそこにいてもどうにもならない様な気がして、そこを後にしたのはそれからすぐでした。再び、森の中を当も無く歩き出しました。

何だかもう、自分が神隠しにあって別次元へ連れて来られたような気になり、恐さも段々無くなって来ました。

随分と歩いたようで、体が疲れているのですが、景色は

一向に変らず、大して歩いて無いみたいです。僕は（この森は一体どの位あるのかなあ?）と思いつつ、木々の間の空を仰ぎました。

?!—驚きました。何かふわっと飛んでいるのかと、思っ現のです。お父様が町から貰って来られた厚い書物に確かあんなのが乗っていました。軽気球と言うのでしょうか、空気より軽い気体を満たして、空中に上がる球い袋のようなものです。僕は、後を追おうと思い、空を見上げたまゝ走り出しました。

その時です。「シュッ!」と足元に何かが走りました。僕は空ばかり見ていたので、足元に気を付け無かったのです。僕は「アァッ!!」と身の危険を感じて、後は飛び過ぎました。—太い蛇が草むらへ逃げて行きます。僕は知らずに、とぐろを巻いて休んでいる蛇を踏ん付けたのです。蛇の方も驚いて、サッと安全地帯へ逃げたのでした。

僕は音で聞こえる位の溜息を付いて、その場に腰を下してしまいました。が、先程の気球の事を思い出して、（今のうちならまだ見えるかも知れ無いから後を追おう）と走り出しました。小半町も空を見上げながら走ると、「ズシン!」と重たい音がしました。驚いて音のした方へ走っていきました。

少し行った所に、ほんの小さな丸い草むらがありました。恐らくそこへ軽気球が落ちたのでしょうけれど、気球はありませんでした。と言うのも、兵隊さんが立っていたからでした。ネクタイをきっちりと首に巻き、サーベルとピストルを身につけています。日本人ではないみたいな気がします。その側に、小型の、あれは大砲でしょうか、それが置いてあるのです。僕は少し用心をして草むらの近くの大木に、少しばかり身を隠していました。兵隊さんは大砲の番をしているらしいのです。手を後に廻して、大砲の周りを歩いたり、時々空や、森の奥を覗いたりしています。僕はそっと、でも音が分かるように草むらに入って行きました。矢庭に、兵隊さんは僕の方へ身構えました。でも、僕が子供なのを知ると、ふと安心したような顔付きになり、うっすらと笑いました。僕も、こんな時にこんな処ですから、無理に御愛想笑いをして、近付きました。

「兵隊さん、こんな処で何をしてるのでしょうか?」

「なにネ、盗みに来るといけ無いから、身張りをしているのだよ。これは大切なものなんだ。これによって、人が泣いたり笑ったりするんだよ。だから、私はしっかり

守っているんだ」
　そう兵隊さんは誇らし気に言いました。
「そうだ！　君に良い物を上げよう」
　続いて兵隊さんは、後のポケットを探りました。
「はい！」
　ニコニコしながら僕にくれました。
　笛でした。日本の横笛みたいで無く、ちよっと変わったものでした。僕は（ありがとう）と言おうと頭を下げようとしました。その時でした。森のどこかずっと奥の方から、「ズドン!!」と物凄い音が響いて来ました。すると、兵隊さんは「ムッ！」と勇んで、その音の方へ走って行きました。
「あー、待って下さい！」と叫んだのですが、兵隊さんはもう、森の中へ消えていました。
　又々一人ぼっちになってしまいました。大砲は何も言ってくれません。僕は恐いと言うよりか、何か独りぼっちの淋しさを感じて、暖かい人の心が欲しくなりました。僕はもう大砲などおもしろくなく無り、又、今度は人の心を求めて歩き出しました。
　行っても行っても何もなく、あるのは唯、すくすくと伸びて長い木々と、青々とこんもりした緑と、ポッカリと開いた空ばかりです。僕は堪られない様な悲しみを感じて、思いっ切り走り出しました。そして、自分の耳が痛くなる程大声で、「ワアッー！」と叫んで、手を大きく広げました。息が切れて、胸がひどく痛くなりました。それでも、夢中で走ります。どこをどう走っているのか分かりません。でも、こうせずにはいられ無いのです。その時でした。ガクッとした何か力が抜けたのです。嫌、今まであるべき処にあった安定が、無くなったのです。僕は力の限りに、真逆様に何処かへ落ちて行きました。フワフワと、頭が熱く重たくなって行きました……。

　気付くと僕は、先程の権現様の鳥居、その前の小道に倒れていました。すぐそこが何処か分かり、僕はその道を下って、一目散に村の方へ走りました。自分の家へ帰りたかったのです。僕は神隠しから救われたのだと思い付き、もう唯嬉しさで胸一杯です。無中で走って村が見下せる処に来ました。何やら行列が見え、白い布がヒラヒラしています。あれはお葬式の行列です。誰が死んだのだろうかと、その後を無中で追いました。同級生が沢山いて、あの実樹ちゃんがシクシクと泣いています。健

三も下に俯いています。静々と暗くて妙な感じです。僕はその行列の中に家のお父様やお母様の後姿を見付け、真先に、その側へ行きました。きっと心配されているのに、違い無いからです。そして、お父様に今までの事をお話ししょうと、しました。その時でした。僕はお母様が大切に抱えている物に気付きました。それは死者の生前の形見で、白いヒモで結えてあるのでした。僕は心臓が縮み上がりました。それは、僕の、権現様に来て行った洋服でした!!

<了>

切手の交換について

会員の方で記念切手を収集しておられる方が割合に多い様ですがお互いに持っている切手を交換なり売りたいと思われる方がありましたらその内容を文章にまとめて原稿を送って下さい。次号より掲載したいと思います。

例　オリンピック聖火十円切手シートで二枚六百円で売りたい。

〇〇〇〇番生

郵便料金の値上げについて

近く郵便料金が大巾に値上げされます。今まで会誌郵送料四五円だったものが今後は七〇円となります。随って近くの会員はなる可く事務所で直接会誌を受取る様にして下さい。そして発信の際にもよく確かめて切手を貼付して下さい尚速達等の場合はいくら相当額の切手を貼付していても赤線もつけず普通便のポストに投函しますと普通便と同じ扱いとなって配達されています。よく注意して下さい。

会員便り

事務局抜萃

九州出張の折は色々と楽しく交際しております。これも先生の御努力の賜ものと厚く御礼申上げます。今後共宜敷く御指導下さいます様に御願い致します。　以下略

富山県　三二一七番　一月二十日

*

先日はお忙しい処、長いお便りを頂きまして誠に有難度うございました。とても自分の考へに参考になりました。宗教と云うものが、一個人の生甲斐であるならば、全く万教の分別が無いと言う事……。ほんとうにそうですね。個人個人の魂しいに取ってかけがえのないものであるなら、それだけで、その信仰は素晴しいものです。どうも僕はその場だけで、全体を見る目がないみたいです。もっと深く見つめる目をもたなくてはいけませんネ。

— 反省しています。

千葉県　二八六〇番　十二月二十日

*

私、十二号より会誌を読ませていただいておりますが、静岡県の、三一四四番の方の「精吾の大人への道」は、私を小説の中に引き込んでしまい、一度で三一四四番の方の小説のファンになってしまいました。十三号の同じく「海に生きる男」、十四号の「夏の夜の物語り」、どれもこれも二度、三度読ませていただいておりますが、私があこがれた日の、又過して来た事に良く似ておりまして、涙が出る程に、良く分ります。その上、文の巧みな進みに息もつかせずと感じております。今はただ、十五号の出来上りと、次の小説を待つ私でありますが、果して彼が、主人公否モデルではないかとさえ思う様になりました。会員の中には、イタズラ半分に手紙を下さる方又厚かましい事を書いて来られる方も有り困っておりますが、もう少し、男と男の恋に歩りたいと思います。心からの、なお返事の来ない人の方が多く、此れでは毛利先生ではありませんが、会員もバラバラになるでしょう。小説の主人公の様な恋を、一人一人が。まじめになれば出来ることです。私は、やって来ました。三一四四番の方の文をみると、過ぎた日がなつかしく思います。もっと会員の方もまじめになって下さい。

神奈川県　三二七六番　十二月二十四日

*

世の中と云うものは、なかなか思い通りにゆかないものです。徒に追ったり、待っているだけでは、能の無い事ですので、折角の名簿をたよりに、できるだけ機会をとらえて、呼びかけてみる事にしました。それにしても私自身を含めて案外、自己本位の人が多いような気がします。お互いに信頼し合い、例え一時の交友であったとしても、愛の高鳴りは、赤裸々なるが故に、美しく、切なく、尊いもののような気がするのです。ホモの愛は、移ろい易くその場限りのものが多いようですが、燃え上った二つの命は、やはり、真実のもののような気がします。好みの違いはどうしようもありませんが、その時はむしろハッキリ割り切るべきでしょう。お互いに、その事は、十分わかっている筈だからです。断る事も大切です。守れない約束は、お互いに、しない方が、より良い方法だと思います。手紙を出しても返事をくれない人……。その人がやっとの思いで捜し求めて、気おくれしながら心の猛をしるしたものでしょうに…。相手の気持をくんで、たとえ遅れたとしても返事は出すべきものだと思います。秘めやかな喜びは又、ひとしおであるが故に……。愛とは、お互いに育てあげていくものだ!!と云う事は、男と男との愛の形の上でも、真実の響があるものだと私は思います。

紅梅や　青年のひとみの忘られず

豊橋市　三二五六番　一月七日

＊

拝啓、昨日はお茶まで出していただき、色々と有難うございました。9日の朝1時頃帰宅しました。毛利先生に接しさせていただき、会員の皆様の中に入らせていただき、4時間と云うもの、あっと云う間に過ぎ云っていました。本日は、本当に有難度うございました。まずはお礼とお願いのため、お手紙させていただきました。

岡山県　三四六〇番　一月十日

＊

先生には、お元気で新年を迎えられた事と思います。昨年は入会に際し、本当にお世話になり本当に有難度うございました。私も元気で新しい年を迎え色々と希望に燃えております。今年も又、色々とお世話になる事と思いますが、どうかよろしくお願い申し上げます。

岐阜県　三二七二番　一月十日

＊

初めて、パーティに出席させて頂き、皆様の明るいお

顔に接し、とても爽やかな心地がいたしました。本当に有難度うございました。心から、厚く御礼申し上げます。

尚、いつかお願いいたしまじた求人の件ですが、良い人がおられましたら、早目に是非御紹介下さいませ。人を雇った経験はもう十七年前になりますか、ございますが最近の若者の考へ方につきましても、勉強しているつもりですが、御指導賜わりますれば幸いです。

兵庫県　三三五八番　一月十三日

＊

その後、先生御元気よく、この道の者等の御指導に撤しておられる事感激の他なく、日夜たゆまざる信念に対して衷心より尊敬の念を持つものです。世は将に刻々の変化を来たし、この道も、或る程度、今迄の様なみじめな事はなくなったものの、常道であっても思い通りにまいらぬ現在、特に、この道においても話様でありましょう、でも〝清心〟にあるように、スムーズに行くならば何も苦労はないでしょうに。その中で先生の御活躍、定めし、お骨の折れる事でしょう。寒さ厳しき折柄、御身おいとい下さい。心の燈を絶やさないようにいつまでも、御精進の程お願いいたします。

滋賀県　三三〇二番　一月十四日

先生の御健康と会の発展とを祈りますと共に、今後共何とぞ、よろしく御指導下さいますよう願い上げます。

名古屋市　二九〇二番　一月十四日

＊

私もこの会に入り、色々な方からお手紙をいただきました。ある時は悩み、ある時は嬉しく思い、又、ある時は自分に自信が持てなくて、お断りの手紙も書きました。しかし、これまで、自分一人で悩み苦しんでいた事が、こうも明るく晴れ晴れとした姿で、自分の前に現われた時、世の中には自分と同じ人も多くいるのだ、いや自分も自然の中の一人なのだと思うと、急に現実の世界が自分に近づいて来るように感じると共に、又毛利先生の御苦労のほどが、しみじみ私なりにも、分る様な気がします。

高知県　三二四四番　一月十四日

＊

文通の書信、斡旋の労、衷心より御礼申し上げます。先生、会に入会して、私の人生観は著しく、訂正されました。未だ、思い上って、胸を張っては謳歌出来ませんけれど、ホモの世界、ブラボーを叫ばずにはいられません。これひとえに、先生の我々の世界（良い意味でです）

に君臨していらっしゃればこそです。私達は決して、先生に尊敬と敬服を忘れはしないし、先生によりもたらされる恩恵に対しては、会、全員が感服をし忠誠を念ずる事でしょう。今後とも宜しく、私達を御指導下さい。私共も、発展の為、一致協力、大同団結致したいと存じます。末だこれより寒くなるので、御身体には充分な留意をなさって下さいまして、若々しく、私達を御見守り下さい。では失礼致します。

鹿児島市　三一八六番　一月十七日

＊

毛利先生がいつも清心へ書いておられるように、やっぱり、ああいう見苦しいことをしてはいけません。堂々と恥かしくない社会人として、生きなければなりません。あの暗いじめじめした行為……何とあさましいことでしょう。

愛媛県　三一三〇番　一月二十日

＊

会誌有難うございます。田舎の方に住んでいる私など会誌は心の糧となり仕事の励みとなり非常に感謝致しております。以下略

長崎県　二八九四番　一月二十日

※※※※※※

今年もいよいよ師走となりましたが、諸兄には益々ご壮健のことと思います。会費も念願の通りになり、会の運営も、多少なりとやり易くなられることと思いますが、先生のご苦労は、今後も、私達のために、数限りなく続けられる事でしょうが、精々御尊体に御留意なさいますよう、私達皆なで、お祈りしようと思います。

私事ですが、御上阪時のご宿泊とか、「描き刺青」を描いて下さる入、または描かせて下さる人等居られましたら、ご遠慮なく、前もってご連絡下されば幸いです。ただし、狭い処ですから、一日お一人として下さい。大阪から40分の処です。唯、信頼できる行為（今まで、2名程いかがわしく、物品黙持のことがあり、こんなことがないように願いたく思っています）を!!

会の繁栄を、心から諸兄と共に、祈りたく思います。

兵庫県　三三五八番

※※※※※※

事務局より

①　会誌の原稿が相変らず不足して困っています。なんでも結構です（詩、俳句、小説、郷土紹介、当会に関するもの）どんどん投稿して下さい。然し余り露骨な表現はさけて下さい。

②　新しい追加名簿に依って交際申込みや手紙の呼びかけをどん／＼して下さい。そしてそれを受けられた会員の方はイエスかノーは御自由ですが返事は必らず出して下さい。これは会員としての当然の義務ですから実行して下さい。

③　会員の住所は誰にも教えません。自ら相手に知らせ度い時は通信文の末尾に自ら記入して下さい。そうすれば先方も住所を知らせてくるでしょう。

④　手紙の転送は今後一切当会で使用している封筒を使用します。随って手紙は軽る帯封をして相手の会員番号を記入し相当額の切手を同封して当会宛に送って下さい。当会の封筒で表書きして発信します。色々の型の封筒や二つ折り又は三つ折りにした封筒では先方に失礼ですから改めた訳です。尚当会宛のものに封が完全でなかったり切手貼り忘れ料金不足のものが時々ありますからよく注意して下さい。

⑤　当会宛に速達便を出されるのは一向に差支えありませんが当会より会員宛の速達便は本人が事前に当会に申出でのある人以外は一切発信致しません。もし本人が不在の場合だと家族が開封するおそれがあるからです。

⑥　地方の会員の方はふだん出来るだけ貯蓄し、そして休暇も残しておいて一年に一、二回位は当会を訪ねて下さい。大勢の会員に接して見れば何か参考になることがあり今後の心構え影響を与えること丶信じます。

⑦　会費の納入といい、交際申込みに対する回答と言いすべてに誠実であらねばなりません。これが社会生活をする上の基礎となるものです。こんな事が完全に出来なくて、他人を愛したり、愛されたり、信用されたりする筈はありません。

⑧　会誌に掲載する、写真やさし絵等にも大いに協力して下さい。そしてより良い会誌を作りましょう。

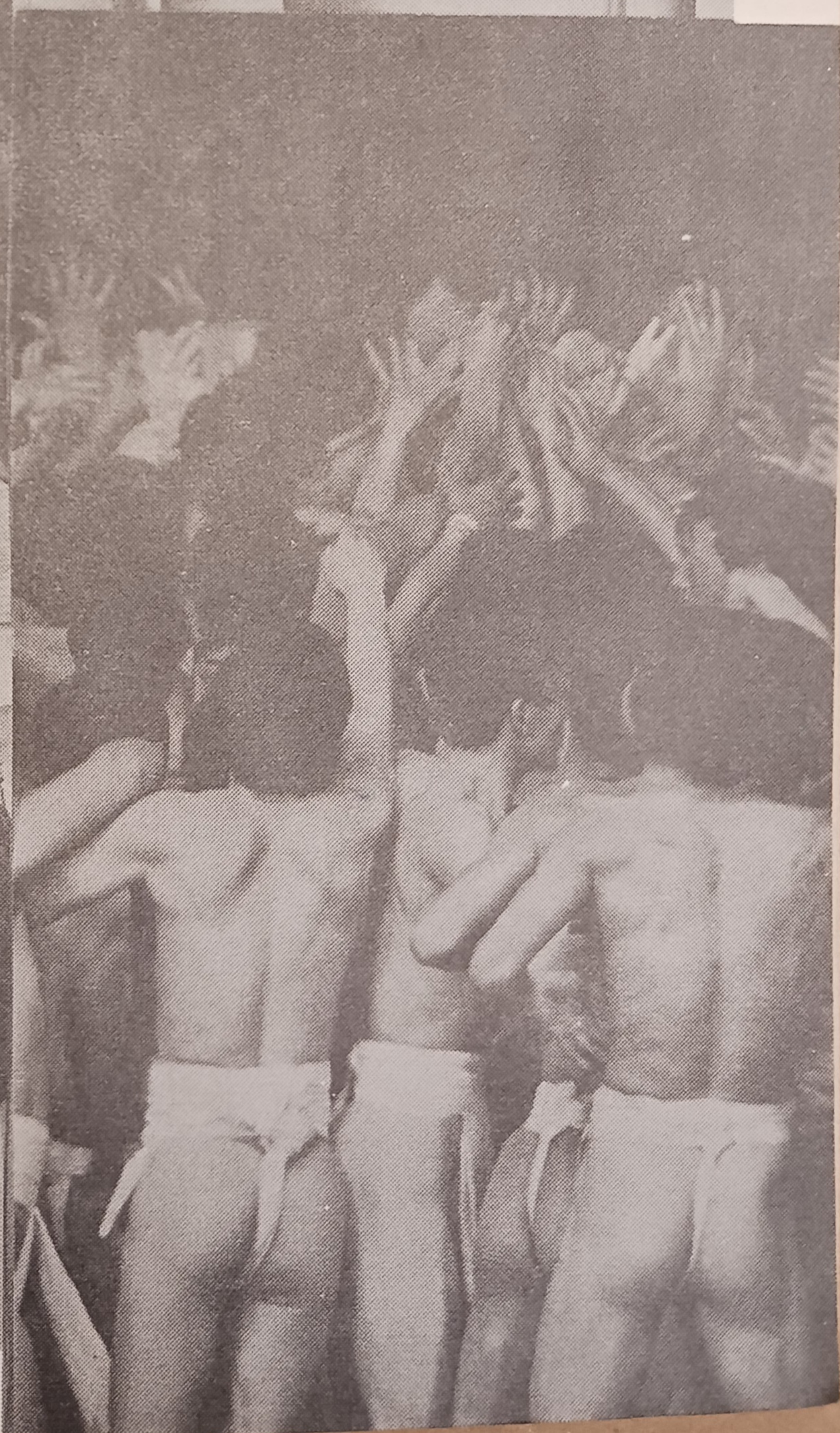
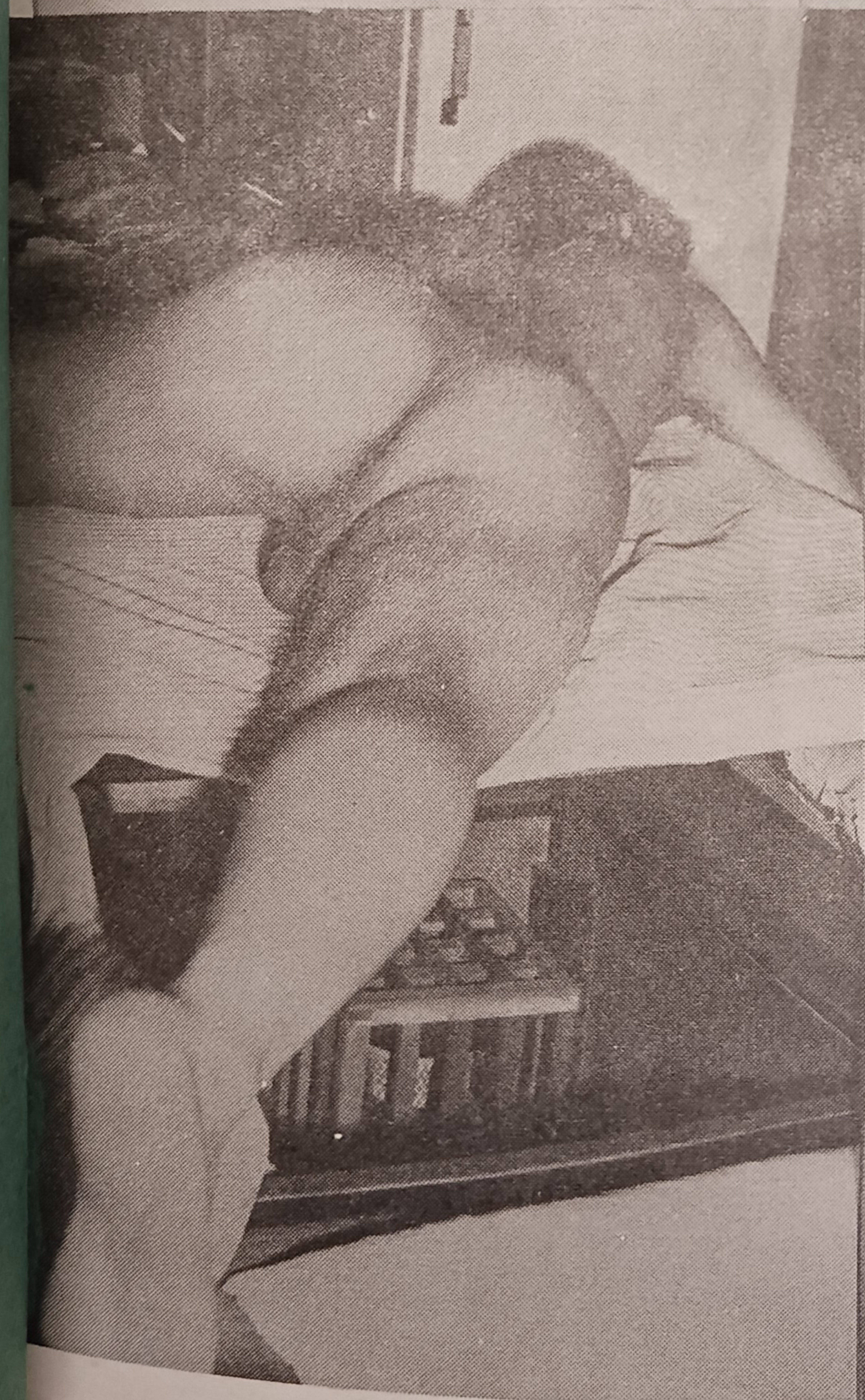
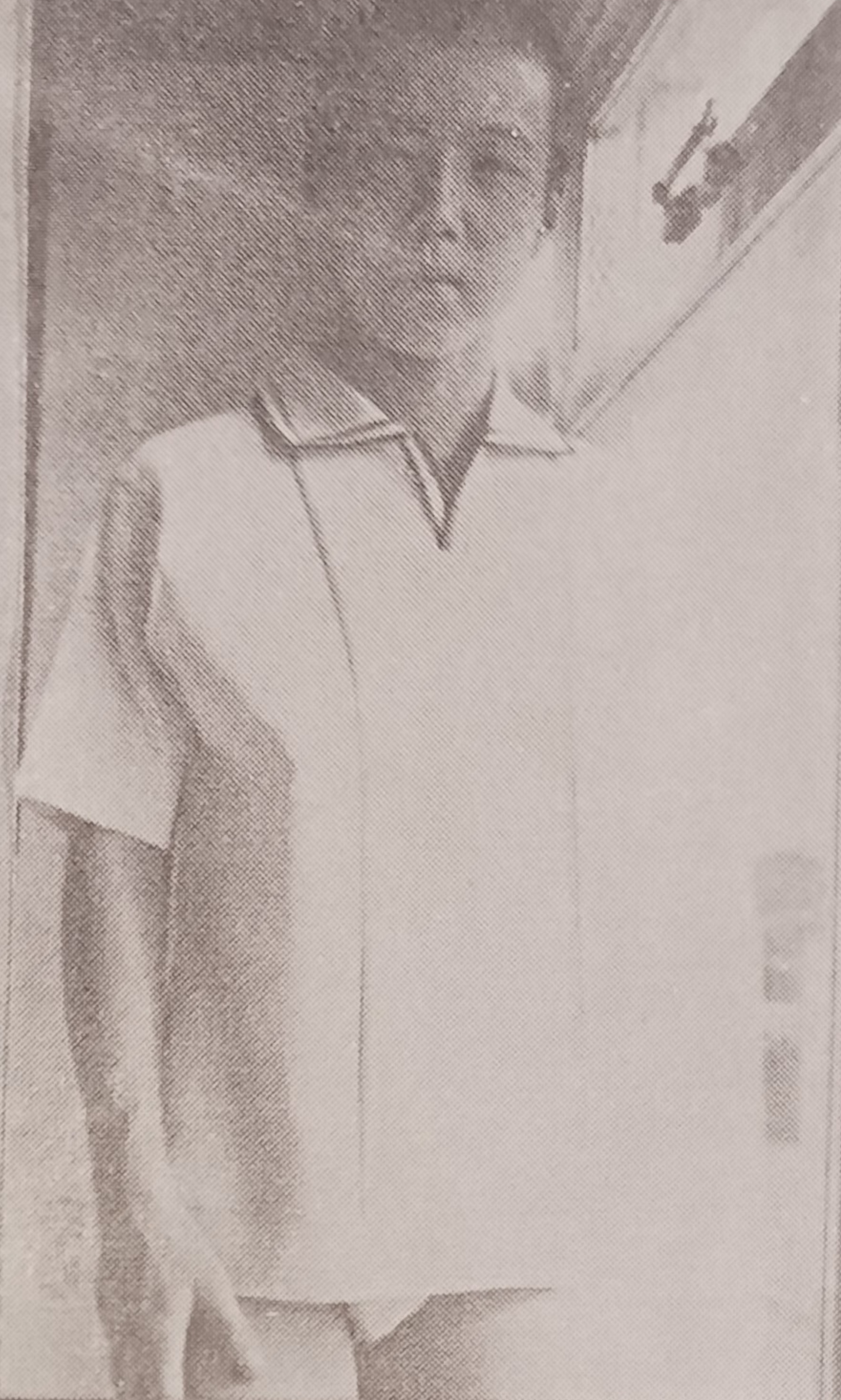
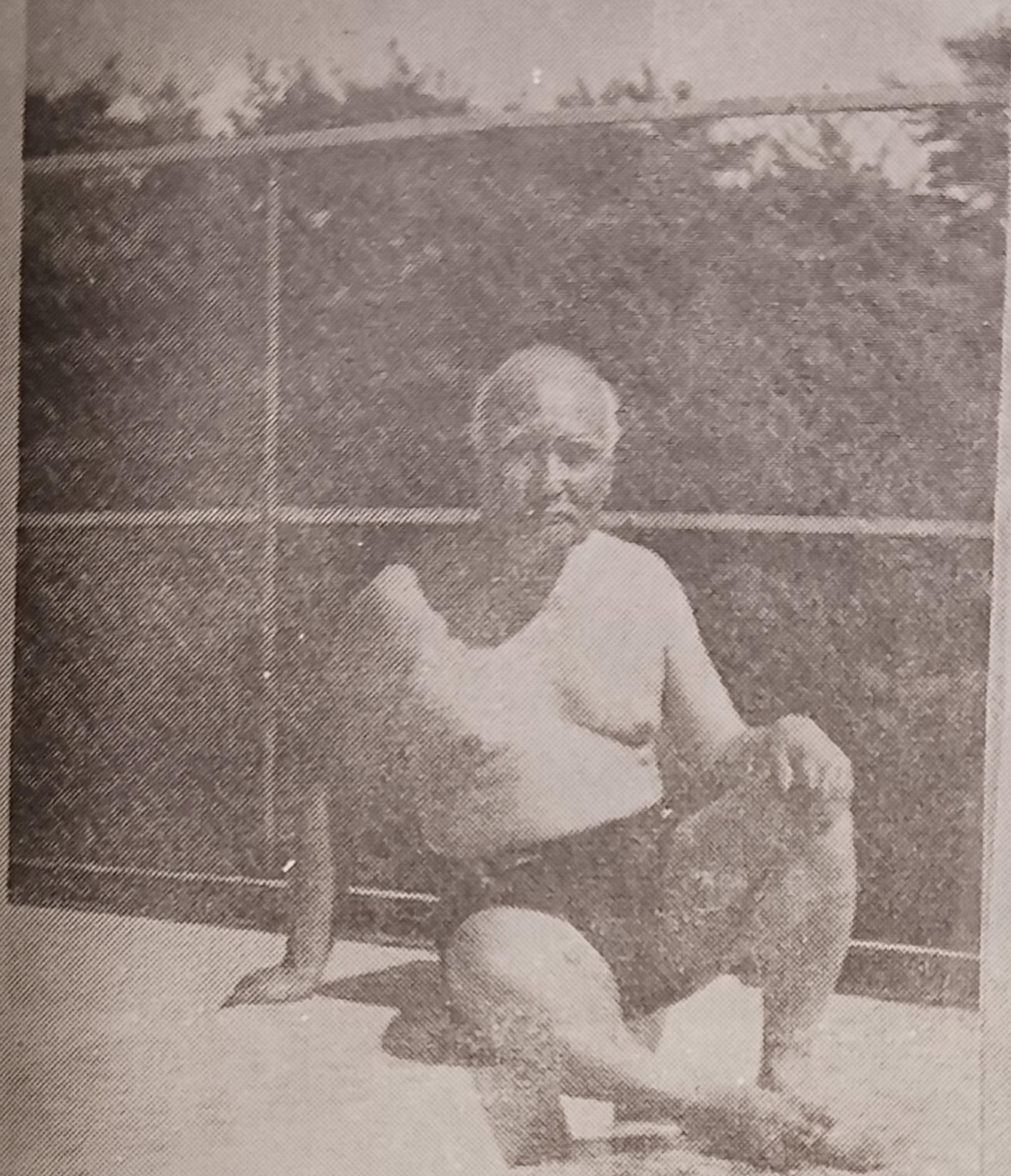
⑨　会誌「清心」のバックナンバーは4,5,6,8,9,10,11,12,

14,14,号と十一周年、十二周年特集号の在庫がありますから希望の方は購入して下さい。一冊何れも五百円です。（送料不要）

⑩ 当会宛に出信の場合又は、文通の場合です、必ず自分の会員番号を記入することを忘れない様にして下さい。

⑪ 会員に手紙の転送又は手渡しを依頼する時に封筒其の他の部分に自分の会員番号も姓名も記入していないものがありますがこんな会員であるかどうか確認出来ないものは破棄してしまいます。
又、事務所に架電して来て自分の会員番号も姓名も告げずに会員の誰それを呼んで下さいなどの物も一切お取次ぎ致しません。

⑫ 会費を送金する場合は必ず現金送金用封筒を使って下さい。普通便に封入されて紛失した（不着）例が可成りあります。そんな場合は発送人責任となりますから、くれ〳〵も安全確実な方法を取って下さい。

⑬ 会の事務所以外の外部で初めての会員とデートする場合の回答には必ず自分の姓とそして判り易い目印を附記して下さい。でないと割合に気の弱い人が多いのですから簡単に相手を見分けることがむつかしいと思います。又、電話をかけて来て下さいと電話番号は書いてあっても肝心の姓名其他が記入してなければかけようもありません。こんな点も案外にうかつな人が多いものです。

所在地　大阪市営の地下鉄三号線のナンバ駅で下車。南出口を南へ一五〇米（旧住友生命支社）改築中の建物の横を西へ入る三〇米（角から三軒目）ブリキ屋の二階です。

休日その他、毎週火曜日と第二、四日曜日は休日。その他の日は午後二時より八時迄開放しております。
電話〇六（六四一）七〇九八番は階下と共用ですから架電の際は相手が出たら先づ「二階へ願います」と言って呼んで下さい。

郵便番号は五五六ですから必ず記入して下さい。
発信はすべて毛利晴一の個人名で致します。受信の場合も個人名で結構です。

会員 番号		残高	
会費１月末現在		不足	